

るほど神御自身を愛することが深くなる。又神に愛さられる子供となる譯である。ヅキニ
チウスは能く解らなくなつた。ポムボニアが神は只獨りで全能であると云つたと聞いた事
がある。今老人の語る所に據れば、その神は又全きを善で、全き正義であるのだ。斯様な一
柱の神があるとするれば、ジニピターサツルンもアポロもジュツーも、ヴェタもヴィナスも
有ゆる神々ば凡て悉く無々な騒々しい群神と考へざるを得ない。老人は云ふ、神は平
等普遍なる愛である。それ故に人々互に愛することは、神の最大なる命令を成すものであ
ると。ヅキニチウスは此言葉を聽いて、愕然胸に電氣を打れたやうに想つた。老人は尙
ほ語を進める。俺れの國人を愛する許りでは可けぬ。神の子は萬民の爲めに其の血を注が
れた。又俺れに善をなす者を愛する許りでは可けぬ。基督は自分を死に渡した猶太人、又自
分を十字架に懸けた羅馬の兵卒の罪惡をも赦されたのである。又自分に愛をなす者を愛す
るばかりでなく、その人を愛して善に導かねば可けない。

老人の此の言葉を聽いてチロは考へた。自分の企畫は何にもならない。ウルバンはグラ

ウクスを殺さぬかも知れぬ。恚う失望したが又一方ではチロは自ら慰めた。グラウクスは
自分を發見しても殺すやうな事はないだらう。ヅキニチウスは老人の教訓を古びたものと
は想へなくなつた。驚いて自問した。「なんと云ふ神だらう。なんと云ふ宗教だらう。なん
と云ふ人だらう？」今聽いた事は直ぐ心に落着かない。全く新しい思想の塊である。ヅ
キニチウスは恚う云ふ教訓を胸に懷くを得るためには、自分の今までの思想習慣若しく
は自分の性格をも悉く積層れて燒棄しても可いと想つた。斯やうなものを悉皆灰と化し
て新しき生命、新しき靈魂を獲たい氣がする。波斯人もシシア人も希臘人も埃及人
もゴール人もプリトン人も皆愛して、敵を赦し、敵を愛し、惡に報ゆるに善を以てせよと
命ずる教訓、これは狂人の教である。けれど凡ての哲學よりも尙偉大なるものを持つてゐる
狂人の教である。この狂人の教は到底實行が出来ぬ。實行が出来ぬから神聖なもの
だ。ヅキニチウスは心に之を拒んだ。丁度花の一面に咲いた草原に入つて、高い香に酔ふ
たと同様な感じがする。いかに其の酔心地を取らうとしても、一度その香を嗅いでば蓮の

國に往つた人の如く、外の事は忘れて只そののみが慕はしくなる。ヅキニチウスは想つた此の宗教には現實な事は一つもない、が、同時に現實な事を此の宗教に較べると、無意味となる。價值がなくなる。前に想ひ及ばなかつた高い高い雲に登ゆるものが、自分の心情を圍むやうである。此墳塋は狂人の集會所とも想はれるが、又神秘な驚くべき所とも想はれる。なんとなく未見の世界に再び生れたやうである。赫灼たる電光は閃めき來つて、ヅキニチウスの眼を眩した。そしてヅキニチウスは斯やうな思想をリシアを愛する心情の媒介に依つて獲たのである。こは何ヵ一つの煩悶に自分を没してゐる人には常にある事である。この電光と閃めいた思想に於て一つの事が判然と見えた。それはリシアが今此處に來て居つて、此教訓を聽いてそれに隨ふならば、到底自分の妻にはならぬと云ふ事である。恚んな思想は今までヅキニチウスの胸中に起らなかつた。彼は愕然とした。憤怒の暴風は心に吹荒み、有ゆる基督者特に彼の老人に對して憎惡の念が滾々と湧いて來る。初めて見た時、無學な漁人と考へた彼得が、なんとなく恐ろしくなる。自己の運命をその掌中に握

つて居る神秘なる權力者の如く想はれて來た。

門衛は新たな松明に火を着けた。松吹く風は止んだ。燭は直上に立ち昇る。雲なき空には星が輝いてゐる。老人は基督の死を想ひ起したと見えて、今は只基督の事のみを話してゐる。聽衆は呼吸を殺して森々と更け行く夜の沈黙に、人の胸の動悸も聽える許りである。老人は實見談を初めた。眼を閉ぢてゐる。往時の事を再び見んとするのであらう。彼得は語つた。

十字架の下から選て、約翰と一緒に二日二夜喰はず睡らずに、晚餐の室で苦しみ嘆き驚いて首うな垂れて、只管に基督の死なれた事ばかり考へてゐた。あゝ基督は死なれた。如何に恐るべき事であらう。いかに驚くべき事であらう。第三日の夜は明けた。曉の光は壁を照した。けれども自分と約翰はまだ室に座つたまゝ、希望もなければ、慰安もなかつた、睡りたいと思ふ心は實に苛責である。苦難の前夜も睡らずに居たからである。二人は身を慄はして泣き出した。然るに日の登つた頃、マゲダラのマリアが息もつかずに驅

込んで来た。髪の毛を振亂して泣きながら言つた。「先生は何處に行かれましたか。これを聞いた二人は飛んで墓所に往いた。約翰は年若なので早く墓所に着いた。墓の空虚なのを見て約翰は茫然として中に入らうとしない。自分はマリアと一緒に墓所に來て、先づその中に入つた。石の上に、下着と屍衣とはあるけれど、基督の御亡骸がない。恐怖心は三人を襲つた。僧侶等が御亡骸を何處にか運び去つたのでは有るまいかと考へた。痛嘆の情は尙更激しくなる。他の弟子達も後から來て、皆悲しみに咽返つた。萬軍の主はそれを聴かれたであらう。一同消入る許りに泣いた。一同は基督がイスラエルを救はれる事を待望したのである。然るに今や基督は死れて三日目となつた。天の父は何故その獨子を棄てられたのであらうか。少しも解らぬ。弟子達は晝の光を見ずに、只死の事のみを思ふてゐた。基督の死は實に弟子達の重荷であつた。

老人は談茲に至つて、その恐ろしき記憶に涙を流した。その灰色の髻に涙の滴り懸るのが、炬火の光に見えた。老人の禿げた頭は震へて、その聲は塞がった。

「グキニチウスは心に想つた。この老人は事實を話してゐるのだ。涙はその證據である」心の單純な聽衆は大に感動した。彼等は一度ならず基督の苦難を聴いてゐるのである。歡喜が悲哀に次で來ることを知つてゐる。けれども今實見者である使徒がその譚を繰返して語るのだ。聽衆はその譚の眞味に引込れて、兩手を揉む。吸泣をする。胸を搔撈る。聴て再び聲を静めて、譚の續きを聴かうとした。老人は眼を閉ぢた。過去の出來事を最も注意して胸の裡に現はさうとするのであらう。やがて再び語り出した。

「弟子共が悲しんで居ると、マグダラのマリアが又驅けて來て主を見たと云ふのです。基督の御身のまばりに輝く大なる光に目眩んで、マリアは基督を庭番だと言違へました。すると基督は『マリアよ』と言はれましたので、マリアは『先生』と叫んで、その足許に平伏しました。基督は往いて弟子共に告げよと仰せられて、聖姿を隠されました。併し弟子共はマリアの言ふ事を信じません。嬉し涙に咽んで居りまするマリアを、嘲弄する者があります。又マリアは餘り悲しんだので、氣が變になつたと想つて居る者もあります。け

れどもマリヤは墓壁で天の使をも見たと云ふのです。で、弟子達は又墓所に驅けて往きま
したが、矢張空虚です。その夜晩くクレオパが他の者と一緒にエマオから参りまして、『實
際主は死から蘇生られた』と言ひます。それで猶太人に聽れては悪いと想ひまして、弟
子共は戸を閉めて此事を議論しました。其時突然基督が弟子共の中に聖姿を現はされ
ました。戸の聞く音もしませんでした。弟子共が恐れてゐますので、基督は『爾曹平安な
れ』と申されました。

「私は他の弟子達と一緒に基督を見ました。基督は光明の聖姿でした。基督それから我々
の心に歡喜となりました。私共は基督が死から蘇生されました事を信じます。海は枯れ
山は崩るとも、基督の榮光は決して滅びません。」

「八日目にトマスは基督の傷所に指を着けて、その御身體に觸つたのであります。そして

基督の御足許に身を平伏して「わが主よ、わが神よ」と叫びました。主はトマスに向つて
『爾は我を見て信ぜり、見ずして信ずる者は幸なり』と申されました。私共はその基督
の御言葉を此の耳に聽きました。私共の眼は基督を見たのであります。基督は私共の裡に
今も生きて居られます」

ヅキニチウスは耳傾けた。實に不思議である。その瞬間彼は自己を忘れた。思慮分
別は全く彼の頭腦から滑り出した。二つの不可能なる事は、ヅキニチウスの眼前に現はれ
た。彼は聽いた事を信ずることが出来ぬ。けれど私は見たと云つてゐる人が現に居る。其
人が虚構をつくのだとは到底想へぬ。老人の態度、その涙、その全身、その譚の細い事。
到底疑ふことは出来ぬ。ヅキニチウスは夢の中にあるやうな感じがした。けれども其の周圍
には聲を潜むる群衆が居る。提灯の燭ふる香が鼻を衝く。尠し離れて炬火が燃えてゐる。
墳壁の側の岩には老人が立つてゐる。白髪の頭を振りながら「私は見ました」と繰返し
て證明して居る。

それから老人は基督の昇天に至るまで種々なる事を語つた。聽て譚を中止した。老人は幾度となく此事を語るのので、凡ての状態が石に刻まれてゐるやうに其胸に彫付けられて居るらしい。聽衆は惚恍として尙も能く聽かうと思つて、頭巾を脱ぐ。聽衆の想像は遠くガリラヤに飛び、使徒達と一緒に彼處の谷間、此處の河邊を歩いて居るやうである。此處にある墳塋はチペリアの湖水かと疑はれる。朝霧深き中に、基督は湖畔に立つてをられる。約翰は舟の中から基督を見て、「あれ、彼處に主が」と言つた。彼得は直ぐ水中に飛込んで泳いだ。語る者は彼得その人である。聽衆の顔は皆恍然として喜びに輝いた。此世の幸福は全く忘れられ、測り難なき愛は感ぜられた。彼得の話してをる間に、幻象を見てゐる者も尠なくない。それから老人は語り語つて昇天の事に及んだ。雲は救世主の足許に叢がる。基督の御身體は自然と浮いた。聖姿は弟子達の眼から隠れて、五色の雲は漸次天に登つて行つた。談茲に至つて、聽衆の眼は一整に天空を見上げた。今天に在す基督を見んとする。基督の天より再臨するを望まんとする。基督は天の靈台よりそ

の尊敬すべき使徒が、小羊等にいかにも信ぜられて居るかを見て、彼得と聽衆を祝福したまふであらう。そして此瞬間に於ては、此處に居る會衆の心には羅馬もなければ、狂人の皇帝もない。異教の禮拜堂は勿論無いのである。只基督のみ地に満ち、海に満ち、天に満ち、宇宙に満ちてゐる。

その近隣に散在せる家から鷄の鳴聲が聽えた。最早眞夜中である。その時チロはヅキニチウスの外套の端を引いて呟いた。

「旦那様、あの老人から餘り遠くない所に、ウルバンが居ります。その側に、あれ御姫様らしい方が」ヅキニチウスは夢から醒めた如く身を慄はした。チロの指さす方に目を注ぐとリシアがそこに居る。

十六 追跡

リシアを見たヅキニチウスの脉には、血が煮えた。群衆も、老人も、今まで聽いた神秘

な事柄も皆忘れた只リシアの事ばかり残る。苦痛、心勞、驚愕の數十日を過した後、漸くリシアを捜し當てたのである。意馬心猿は胸に躍つた。運命は自分を醜弄してゐるのだと今迄思つてゐた。俺が幸福を實現することが出来るとは想はなかつた。然るに今や現にリシアが彼處に居る。幻象ではあるまいか、夢ではあるまいか。ヅキニチウスは急う疑つて見たが、數歩の前、炬火の閃光の裡にリシアは立つてゐる。美しき容姿が目のあたりに見えるのは事實である。リシアは頭巾を脱いでゐる。髪は艶し亂れ、唇は微かに啓き、全身の注意を注ぎ出して、使徒を見上げてゐる。服装は極く質素であるが、ヅキニチウスに取つて、リシアがこれ程美しく見えた事はない。愛の火は裡に燃える。永く渴いた後に生命の水を獲たやうな歡喜がある。巨人ウルススの側に居るので、リシアは全然稚兒のやうに小さく見える。艶し面瘦したやうである。リシアの面は蠟の如く透明である。花の如く、幻象の如くヅキニチウスの心を動かした。リシアの容姿を凝視れば、凝視るほど、羅馬の東邦の婦人と違ふ所が解る。ヅキニチウスは世界の有ゆる婦人と、リシア

一人とを取換えるであらう。否、羅馬も世界もそのためには惜まぬのだ。

ヅキニチウスは俺が現に居る所を忘れた状である。チロはヅキニチウスが何か仕出かしてはと氣遣つて、その外套の裾を引いた。時しも基督者は聲を合せて、祈禱と讚美を捧げた。「主は來ませり」といふ雷の如き聲がした。聽て使徒は泉水を掬んで、數名の人に洗禮を授けた。ヅキニチウスは夜が明けはせぬかと心を苛立つた。出来るだけ早くリシアの後を追つて、途上か、その家で捕へたいと思つてゐる。

漸く基督者は散ぜんとする。チロは叫いた。

「旦那様、彼處に往つて門の所で待ちませう。私共が頭巾を取らないものですから、じろく見えてゐる者があります」

これは事實である。使徒が説教する間に皆頭巾を脱いだ。頭巾を取らないのは、ヅキニチウスの一行ばかりであつた。チロの用意は周到である。門の所に居れば一人く見ることが出来る。ウルススの巨大な體軀は第二目に着くに相違ない。

「追跡ますのですか」とチロが言った。「何處かその御家を見ておきまして、明日旦那様。いや今すぐでも、奴隷にその御家を圍まして、御姫さまを捕へますのですれ」

「馬鹿！」とヴキニチウスが叫んだ。

「それでは、甚麼なさるのですか、旦那様」

「その家まで追いて往つて直ぐ捕へるさ。御前、どうだ。クロト」

「はい、旦那」とクロトが言った。「彼の嬢様の番をしてゐる牡牛のやうな野郎の脊骨が折れなかつたら、旦那の奴隷になりませう」

チロは弱つた。餘り亂暴な事をしてはと諫めて見る。

「旦那」とクロトが叫んだ。「黙れと云ひなさい愚圖々々云ふなら。拳骨で頭を割つてやりませうか。ですが矢張此處で嬢様を捕へるのは止めませう。石を投げられると因りませう、甚麼しても家へ御着きになつた所ですなあ。なあに造作はありませんや」

「うんさうだ」とヴキニチウスは快げに叫んだ。「明日家に居ないと困る。氣取られて、遁

げられては大變だ」

チロは呻いた。「あのウルスは恐ろしく力のある奴ですのに」

「御前さんに手を借せとは言はれぬ」とクロトは扭臥せるやうに言った。

余程長く待った。鶏鳴曉を報ずる時まで、ウルスもリシアも門の所に影を見せな

かつた。群衆は押合つて門を出て行つた。程過ぎてチロは使徒の姿を認めた。彼得と並んで、黝し身の丈の低い老人が歩いて行く。その側を二人立派な婦人と提灯を持った子供が着いて行つた。

「旦那様」とチロが言った。「御姫様は嚴重に護衛されて居られますよ。お姫様の先に行くのは使徒です。あれ、彼の人達が通ると、皆な平伏しませう」

群衆は實際平伏した、けれどもヴキニチウスはその事に意を留めぬ。只リシアを見失ふまい。甚麼してリシアを捕へやうかと焦慮つてゐる。軍人たる彼は虎穴に入らずんば虎子を獲ず、大膽に遣りさへすれば必ず成功すると信じてゐる。

路は遠い。折々先程聞いた妙な教訓が胸に浮んで、自分とリシアの間に深淵が横在つてゐる様な気がする。今や之れまで起つた事は悉皆解つた。その事の根底が充分に解つた。前には眞正にリシアを知つて居なかつたのだ。リシアは他の女に勝つた少女、煩惱を燃す値のある少女とは知つてゐたが、今までその宗教が他の人と違つてゐるとは知らなかつた。ヅキニチウスは愛情、煩惱、富、奢侈に依つて、リシアを誘惑することが出来ると思つてゐた。今やかゝる希望は、空中樓閣に過ぎないことを悟つた。要するにペトロニウスや自分に理解することの出来ぬ新しい教があつて、リシアの心情は全くそれに浸染してゐる。故にリシアがどんなに自分を愛する心があつても、愛情のために其信仰を微塵だも動すことが出来ぬ。リシアが幸福を望むとしても、其の幸福は自分やペトロニウスや、皇帝の廷臣や、全羅馬の人々の追求する所とは全く異つたものである。恚う考へたヅキニチウスの憤怒は骨髓に徹した。けれども其の憤怒も用ゆる所がない。リシアを連れて行くことは出来るであらう、又出来るに相違ない。併し其の宗教の前にはヅキニチウス

自ら零無である。彼の勇氣も權力も零無である。凡てのもの用ゆるに所なしだ。ヅキニチウスは羅馬の貴族として、軍人として、劔と腕力を以て世界に打勝ち、永久世界を支配する事が出来ると思つてゐたのであるに、今や初めて此世界には、劔や腕力に勝れる人いなる力があることを覺つた。ヅキニチウスの心は攪亂した。

混亂せる畫は、走馬燈の如く腦裡を駆け廻つた。墳塋、大集會、世の罪惡を贖ふ神人の苦難、死、復活、來世の幸福を約束する老人の言葉、又それを熱心に眞心籠めて聽いてゐるリシアの容姿!!

旋風の如くヅキニチウスの頭腦は荒狂つた。けれどもチロの愚痴を零す聲にヅキニチウスの想ひは地上に引戻された。チロはリシア姫を捜し出したので、自分の職分は終つたこと、哲學に身を献げてゐる老人を此上使ふのは殘酷であると嘆息した。

ヅキニチウスは財布を取り出して、チロに擲付けた。「それを取つて、黙つて居れ」

チロは其の重さを量つて、尠し機嫌を直した。夜は白々と明けた。壁の輪廓も解るやうになつた。路傍に植えてある樹木の影も現はれる。夜の帷幕は拂はれた。人足共が驛馬に澤山荷を積んで門の方に忙いで行く。朝霧が下りてゐる。晴天の明兆だ。往來の人ば朝霧の中を幻象の如く見え隠れに行く。ヅキニチウスは瞳子を放つて、リシアの臍な姿を見定めた。

「旦那様」とチロが言つた。「どうぞ私の申す事を聽いて、今日はリシア様の御住居を見届けたゞけで御還り下さい。奴隷を集めて、出直しなされた方が宜しいでせう。獨活の火木のやうなクロトの言ふことをお聞きなさらずに」

「おい、拳骨だぞ。一つ頭をなぐつたら、死ばる癖に」とクロトが叫んだ。

「私は不死の薬を持つてゐるよ」とチロが負けずに言つた。

キヅニチウスは答へない。最早都市の門近くに來た。使徒が門を過ぎると、二人の軍人は跪いて甲冑に手を措いて十字架を描いた。軍人にも基督者が在らうとは、夢にも想は

なかつた。ヅキニチウスは愕然とし、大火が戸毎に炎上るやうな感じがした。此宗教は有ゆる社會の人心に日毎に入り込んで行くのだ。此分ではリシアが都の外に遁れても、到る處にリシアを救ける者は居るであらう。リシアが都の内にあるは望外の幸である。

塀の外の空地に來た時、基督者の群衆は散り初めた。で、余程遠く離れてリシアの跡を追隨ないと氣取られる恐れがある。チロは足が痛むと言つて、段々後に離れやうとした。ヅキニチウスは此場合チロは何にも役に立たないことを知つてゐるから、尠しも咎めぬ。これで御暇を戴きますと云つても、拒なかつたかも知れぬけれども、チロは恐い者見たさに矢張隨いて來る。

タイパの河向に着くまでは、余程の時間を経た。旭日は登る。聽てリシアの周圍の群も散り初めた。使徒は老婦人と少年と一緒に河を渡つた。ウルススとリシアはその同伴者と一緒に狭い巷路を曲つた。百歩許り行くと、橄欖と家禽を商賣してゐる家に入つた。

チロはヅキニチウスとクロトから五十歩許り後に隨いてゐたが、塀の側に蹲踞つて、秘

かに二人を呼戻した。二人は相談するため引返す。

「チロ」とヅキニチウスが言った。「廻つてな、あの家が他の街道に向いてゐるか、甚麼か見て来い」

チロは足の痛さを忘れて、見えなくなつたが、間もなく戻つて来た。

「いゝえ、一方口です。ですが、旦那様」とチロは揉手をして、「甚麼しても御考へ直すことは出来ませんか、まあ御聞き下さい」

チロは一寸語を止めた。ヅキニチウスの顔は憤怒に蒼白く。眼は狼の如く煌々してゐる。チロはその状を一目見て到底駄目だと言つて口を緘ぢた。クロトは広い胸を叩いて首を振動しながら、

「私が見て参りませう」と言つた。

「御前は私に隨つて来い」とヅキニチウスは嚴然と言ひ放つた。二人は暗い路次に消えた。チロは近所の巷路の隅に隠れて、結果いかにと待つた。

十七 活劇

室に入るまでヅキニチウスは、此冒險の困難なことを悟らなかつた。家は大きい。諸處に物置がある。羅馬の貸家としては普通の家だ。家の中は小さな室に仕切られて、誠に複雑である。斯やうな家で人を捜すのは頗る難事だ。

ヅキニチウスはクロトと一緒に長い廻縁を歩いた。庭には泉水がある。夜は明け、けれど寂然としてゐる。未だ誰も寝て居るのだ。

「甚麼しませう、旦那」とクロトは立留まつた。

「此處で待たう、誰か出て来るだらう。庭から見えないやうに」とヅキニチウスが言つた。

聴て泉水の側に籃を持った人が顯はれた。ヅキニチウスは直ぐウルルスと知つた。「ウルルスだよ」と囁く。

「側に行つて骨を挫いてやりませう」

「待て！」

二人は鬮口の影に居るので、ウルススには見えない。ウルススは籃の中から野菜物を取り出して静かに洗つてゐる。朝食の仕度なのだ。聴て洗ひ終へたと見えて、濡れた籃を手に持つて窓掛の中に隠れた。クロトとヅキニチウスはその後を追ひ驅けた。直ぐリシアの室に往けると思つたのは間違ひ。窓掛は庭と座敷とを仕切つてゐるのではなく、暗い廊下に續くのであつた。けれどもウルススを片付けて、リシアを奪つて逃げるには却つて幸であらう。ウルススは小さな室に入らうとしてゐたが、足音に氣が付いた。立停つて振向くと二人の姿が見えるので籃を下に置いた。

「何誰を御尋ねなさるですか」とウルススが聞いた。

「貴様を！」と言下にヅキニチウスは答へて、クロトの方を向いて、忙しく低い聲で、

「殺てしまへ」

クロトは猛虎の如くウルススに飛懸つた。ウルススは敵と認むる先に、剛鐵の腕でクロトを捕へた。

ヅキニチウスはクロトの無雙の力量を充分に信じてゐるので、此の二人の争鬪の結果を待たず、鷲地に走つて、小さな室の戸を推開けて、中に飛込んだ。圍爐には火が燃えてゐる。リシアの顔は焔に輝いてゐる。リシアの側には一人の老人が座つてゐた。オストラニウムからの途で、リシアとウルススと連立つた老人である。

突然リシアは内に衝進した。リシアがヅキニチウスであるか誰か認めぬ先にリシアの腰の邊を抱へ上げて、戸外に出やうとした。老人は前に立塞がつた。けれどもヅキニチウスは片腕でリシアを抱へ、片腕で老人を衝退けた。頭巾は頭から落ちた。懐しい、けれど今は恐ろしい其の姿を見て、リシアの血管は凍つた。咽喉に痞へた。救助を呼ばうとも仕ない。呼ぶことも出来ぬ。只戸に握まつて身を悶へたが、駄目だ。握まらうと仕ても、指は石に滑つた。ヅキニチウスは庭に出て來た、リシアは慘絶たる光景を眼前

に見なかつたら氣絶したであらう。

ウルスは両手に人の曲つた體軀を抱へてゐる。其人の頭はだらりと垂れて口から血を吐いてゐる。ヅキニチウスの姿を見たウルスは、其人の頭に又鐵拳を喰はして、その體軀を擲り出し、狂せる野獸の如く、忽ちヅキニチウスに飛懸つた。

「死！」と年少の貴族は想つた。
聽て夢み、現み、リシアの泣聲が微かに聞えた。

「殺してはいけません」

ヅキニチウスは電光の如き或るものが、リシアを抱ける自分の腕を弛めたことを感じた。地は廻りに廻る。日の光は全く眼から消え失せた。

チロは片隅に身を隠して甚麼なつたかと待つてゐた。好奇心と恐怖心は胸裡に争ふ。リシアを巧く奪へるだらうか。さうすればヅキニチウスは益々自分を好遇するに違ひない。

チロはウルスヌを恐れない、クロトが必ず彼を殺し得ると信じてゐた。今か今かと結果を待つた。時は次第に過ぎる。門口は寂寞としてゐる。「まだ隠家が見當らないか知ら」とチロは思つた。兎に角これが成就すれば、澤山な報酬に有りつける。畢竟自分の利益だと考へてゐたが、突然空想を止めた。誰か門口に出やうと仕て居る。チロは扉に密付いて蹲踞まつて息を殺して窺つた。頭は門口に半分現はれた、急しげに四方を見廻した。間もなく頭は隠れた。

「ヅキニチウスかな、クロトが知ら。娘を捕まへたとすると、娘は何故叫ばぬだらう。なぜ町を見廻すのだらう。どうも娘に出會はねばならんに、甚麼したのか知ら」

チロの些少な髪の毛は突然逆立つた。
戸口にウルスが立つた。腕にはクロトの體軀を抱へてゐる。巨人は四方を見廻して人が居ないと見定めて、河の方に死骸を持つて走つて行つた。

チロは一片の漆灰の如く扉に平びついた。

―何處へ行く―

一六四

「彼奴に見つかつたら、殺される」と獨語いた。

ウルススは急足で巷路の片隅を走つて、次の家屋の向に見えなくなつた。チロは齒をがた／＼させながら、出来るだけ早く十字街道に脱れた。チロはほつと息を吐いて、

「後からでも彼奴に見られたら、捕まつて殺される。あゝ、救けたまへヂユースの神、救けたまへ、アポロの神よ、救けたまへ、ヘルメスの神よ、救けたまへ。基督者の神よ、ああ、何卒悪魔に捕まらぬやうに救けたまへ」

チロはクロトを殺したウルススを超人のやうに想つた。ウルススが走り出た時、野蠻人の姿をして居る神ではないかと驚いた。進退谷まつたチロは、常に嘲弄してゐる神の名を呼んだ。巷路から巷路を行過ぎて、職人に遇ふまでは我を忘れた。息を切らしてゐる。或家の上り段に腰を懸て、外套の裾で額の汗を拭きながら、

「私のやうな老人は休まなければ………」と喘いだ。

職人は街の角を曲つた。チロは又獨ぼつちになる。全市は尙ほ睡つてゐる。富有の家

の奴隷は日の上らぬ中に起き出づるので、戸毎に騒々しい。市民は冬季になると、特に朝寢をするのだ。チロは余程久しく腰を懸けてゐたが、寒くなつた。徐ら立上つてヅキニチウスに貰つた財布に手を觸れて見て、河に向つて歩いた。

「何處かにクロトの死骸が棄てあるかも知れない」とチロは言つた。「ウルススと云ふ奴は人間が知ら。人間なら一年の中に幾萬圓でも儲かるがな。狗兒のやうにクロトを殺せろのだから、誰も敵手にはなれない。クロトがあんな目に遇つたからは、ヅキニチウスも殺されたかな。多分ヅキニチウスの魂、魄も埋葬して呉れるのを待ちながら、嘆いてゐるだらう。彼奴は貴族だ。皇帝の友達だ。ペトロニウスの親類だ。羅馬で名高い男だ。おまけに軍人だ。彼奴を殺せば、徒は濟まぬ。市の役所に往つて届けてやらうか知ら」

チロは立留つて、自問自答したが、聽てまた獨語いた。

「これは困つた。彼家に彼奴を連れて行つたのはこの私だ。ヅキニチウスの家の者は此事を知つてゐる。だから彼奴が殺されたとすると、私が咎を受けるかも知れない。さうかと

云つて羅馬から出奔すれば、尙疑はれる。困つた事になつたな」

けれどもペトロニウスは此の事件を初めから熟知つてゐる。先づペトロニウスに告知すれば、自分の無罪を信じて呉れるかも知れぬ。チロは恚う考へたが、兎に角ヅキニチウスの成行を第一確實ればならない。殺されたのか、傷を受けたのか、捕虜になつたのか。チロは一向に知らないのである。不圖チロは想ひ出した。基督者は斯やうな貴族で高官の者を殺す氣配はない。若しそんな事をすれば非常な迫害に出遇うであらう。これは必ずシアを他處に隠すまで、ヅキニチウスを抑留したに相違ない。

恚う考へ付いたチロは希望を回復した。

「彼の龍のやうな奴が、寸断／＼に殺さなかつたとすると、ヅキニチウスは未だ生きてゐるだらう。生きてれば自分に罪のないことが解る。すると又一つ新しい職分が増すと云ふ譯だ。ヅキニチウスを搜索するためペトロニウスから報酬が取れる。それから又リシアを捜す役か。まあ、兎もあれ。ヅキニチウスの生死を確實ればなるまい」

それも夜になつて水車場のデマスの所に行つて、ウルススに問れば善い。チロは恚う考へたが、いやとんだ事だ。ウルススがアラウクスを殺さなかつたとすると、自分はどんな目に遭うか解らない。ウルススのことを思つて、チロは胸震ひした、晩になつたら、ユリチウスをやつて様子を見させやう。先づ湯にでも入つて休息するとしやう。一夜睡らずにオストラニウムから、タイバーの河向に往つたので、疲れ切つてゐる。だが、非常に嬉しい事がある。ヅキニチウスから貰つた二つの財布がある。運は好くなつたのだし、危い所を通つて来たのだから美しい物でも喰つて、美しい酒でも飲まう。

聽て酒舗の開く時刻になつたので、チロは或る酒舗に入つて、飲み且つ喰つて、湯に入る。ことさへ忘れた。酒舗を立出でたチロは、睡眼をして酔歩満跚としてスラア門に近い自分の住居に還つた。家にはヅキニチウスに貰つた金で買った奴隷の女が待つてゐるのだ。

チロは狐の穴の如く暗き寢間に入つて、寢臺に身を横にすると直ぐ睡て了つた。黄昏

「何處へ行く」

一九八

時まで起上らない。夕方奴隷の女は、重要な件に就いて訪れて来た人があると云つてチロを揺起した。

小さなチロは直ぐ目を醒した。身仕度も倉皇に出て見る。自分に挨拶する姿を一目見ると、全身が麻痺して了つた。立つてゐるその人は巨大なウルススだ。

チロは頭から足まで氷のやうに冷くなる。胸は動悸する。脊骨は震へた。暫時言葉は出ない。聴て齒をがた／＼させながら呻いた。

「シキヲ、私は家にゐない——何にも知らない……」

「私は貴方が家に睡つてゐらつしやると言つて了ひましたよ。貴方を起して呉れと彼の人云んですもの」とシキヲといふ女奴隷が答へた。

「あゝ、甚麼しやう。御前ね……」とチロはシキヲに私語く間に、ウルススは待兼ねて、寢室の入口まで遣つて来て、頭を内に衝込んで、

「チロ、チロニデス殿」と呼んだ。

「爾平安かれ！平安かれ！平安かれ！」とチロは繰返した。「あゝ基督者の御方様！はい、

私はチロで御座います。何かの御間違ひで御座いませう。私は貴方様を存じません」

「チロ、チロニデス殿」とウルススが繰返した。「お前さんの御主人ヅキニチウス殿がお前さんを連れて来いと御言ひだ」

中篇

一 介抱

グキニチウスは身體が非常に痛むので、氣が付いた。今何處に在るのか、甚麼したのか、一寸と解らない。耳はがん／＼鳴る。眼は霞む。三人の男が伏屈いて自分を睥視するのが臚に見える。二人は知つた顔だ。一人はウルルスである。他の一人はリシアを強奪つた時、毆打つけてやつた老人である。第三は全く知らぬ人だ。その知らぬ人はグキニチウスの左手を握つて、肱から肩に腕を撫つてゐる。グキニチウスはなにか自分の體軀に、復讐を行つてゐるのだと想ひ込んで、口を結びながら、

「殺せ！」と叫んだ。

三人は恚んな言葉に意を留めぬ。痛手を負へる者の讒言と想つたらしい。ウルルスは沈鬱な顔をしながら、繙帯の布を持つてゐる。老人は第三の知らぬ人に向つて、

「グラウクス殿、頭の傷が致命傷でないことは確實ですか」

「確實ですともクリスプス殿。私はこれ迄、療治は幾度も手懸てゐますから大丈夫です。なかに頭の傷は極く軽いです。この人が（ウルルスの方を向いて）嬢さんを奪ひ返す時、この壯者を壁に打つたのでせう。それを防がうと思つて、この壯者は腕で頭を庇つたからこの通り、腕の筋が違つて骨が砕けたらしいです」

「さうですか。兼て貴方の御上手な事は伺たまはつてゐましたから、ウルルスを御依頼にあげましたのでした」

「ウルルス？えい。此人がウルルスですか。さうすると昨日途中で私を殺さうと想つたことを白状した人ですな」とグラウクスが言つた。

「その事は私にもウルススが話しました。私は貴方が基督を愛してをらるゝ方と存じてゐましたので、貴方が叛逆人ではなく、眞正の叛逆人は、ウルススを教唆した人だと説明したやうな譯で」

「大變悪い事をしました」とウルススが嘆息した。

「それは又他の時御話しするとして、まあ此病人が大切ですよ」とグラウクスは挫けた骨を接合に懸る。手術が終るとヅキニチウスは蘇生つた。眼を開いて見ると、リシアが寢臺の側に立つてゐた。青銅の器を片手に持つてゐる。グラウクスは絶えず海綿を漬して病人の頭を冷してゐる。ヅキニチウスはリシアを凝視した。自分の眼を信ずることが出来ぬ。熱のために心に浮ぶ美はしき幻象ではあるまいか。暫時経つて私語いた。

「リシアさん！」

その聲の響に、器を持つたりリシアの手は慄へた。リシアは憂愁に満ちた眼をヅキニチウスに向けた。

「平安けくあれ」と微かに呷いた。

リシアは両手を擴げて立つてゐる。哀憐の心情は溢れて、顔に輝いてゐる。ヅキニチウスはリシアの面影を網膜に深く印象して、眼を閉ぢた後にも其の面影を見んとする如くりシアを熱心に凝視めた。リシアの顔は以前よりも蒼白く、窶れた。漆のやうに黒き髪毛は捲れてゐる。身には質素な仕事衣を纏ふてゐる。ヅキニチウスに凝視られたリアシの雪白の額には薔薇色の紅い血がさして來た。ヅキニチウスはリシアの容姿を看て、最先に心に浮んだ思想は、自分は何處までもリシアを愛しやうと云ふ慾念であつた。リシアを斯まで蒼白くしたのも、貧乏にしたのも、皆自分の所業である。リシアを愛に溢れた家庭から追出して憂慮艱難を舐ませて、恁んな黒い羊の毛の穢い衣物を纏はしむるに至つたのも自分であると思つた。リシアに錦爛の衣裳を着せて、世界の最も貴い寶石を身に飾らして見たいのはヅキニチウスの心に山々である。驚愕と哀憫とは、ヅキニチウスの心に一杯になつた。身動きが出来たら、リシアの足許に身を平伏したのであらう。

「リツアさん、貴嬢は私が殺されることを忍びなかつたのですか」と言つた。
「神さまは、貴方を御癒し下さいます」と美しい低い聲でリツアが答へた。

ヅキニチウスは幾度となく、自分はリツアを苦しませたと想つてゐる矢先に、憊うリツアに柔しい言葉を掛けられたので、香膏を嗅ぐやうに快く感じた。リツアの言ふ所は基督教で教へる安慰の言葉であることは暫らく忘れて、只々リツアは自分を愛して居る女でその云ふ所は極めて柔しく、自分の心を奥底から揺動かす深い遠い親切に満ちてゐることを想はざるを得なかつた。ヅキニチウスは又氣が弱つて來た。苦痛の衰弱ではなく、胸裡に湧き來る千感萬情は、その心を壓倒した。旋風のやうな、加之も快美、衰弱は彼を捕へた。なんとなく深い底なしの谷に陥ちて行くやうな氣持がする。けれども落ちながら楽しい幸福な感じがする。その瞬間、ヅキニチウスは聖い神々しい者に面と向つて立つたやうに想つた。

グラウクスは今頭の傷口を洗ひ終つて、膏藥を張つた。ウルススはりツアの手から水の器を取つた。リツアは洋卓から酒と水の入つてゐる洋盃を持つて來て、ヅキニチウスの口許に着けた。ヅキニチウスは息もつかずに飲んだ。そのため非常に元氣づいた。痛みもそんなに覺えなくなつた。全く人心地がついて、「もう一杯」と言つた。
リツアは空虚の洋盃を取つて次の間に往つた。クリスプスはグラウクスと二言三語叫び合つた、寢臺の側に寄つて、

「ヅキニチウス殿。神は貴方の不正を許しなさらぬ。貴方が悔改なさるやうに、神は貴方の生命を救ひられたのです。基督は敵を愛せよと仰つた。私共は貴方の傷を包んで、リツアが云ひました通り、貴方が御癒りなさることを神に祈つてゐます。ですが此上貴方を看護してゐることが出来ません。これで御別致します。リツアに對して此上迫害を加へなざるのが、正當な事かどうか御考へ下さい」

「では私を置いて何處にか行くんですか」とヅキニチウスが問はれた。
「此家を去らうと言ふのです。市の長官の手の届かない中に、貴方の御供は殺されました

し、貴方も恚んなに怪我をなすつた。我共の過失でないにしても、法律に問はれますから………」

「御心配には及ばん。告發されぬやうに私が保護します」とヅキニチウスが言った。

クリスプスは只市の長官や刑吏を恐れる許りではない。ヅキニチウスを信用することが出来ないのだ。その追求に對して、リシアを一層堅固に保護したのである。

「貴方の右の御手は何とも御座いますまい」とクリスプスが言った。「此處に筆と紙があり、ますから、轎をもつて迎へに来るやうに御家に一筆御書き下さい。此家は貧乏な寡婦の住居で今に婆さんと息子が歸つて來ますから、その息子に貴方の御手紙を持たして遣りませう。私共は他に隠れ家を捜さればなりません」

ヅキニチウスは蒼くなつた。リシアから離さうといふ心が解つた。再び失へば生涯リシアを失ふことになるかも知れぬ。自分とリシアとの間には大きな妨礙物が横はるのだ。リシアをわが有とするには何とか工夫をせねばならぬ。けれどそのためには時が必要であ

る。假令リシアを必ずボムボニアの許に還しますからと誓つた所で、今の處彼等が信じさうでもない。基督者の神でない他の神々の名に依て誓ひでもしやうものなら、益々不信を買ふばかりだ。

何とかしてリシアの保護者を和慰たいものだ。そのためには數日黙考ればならぬ。水に溺るゝ者は小さな板の細片にでも取縋る。ヅキニチウスは二三日でも可いから、リシアの側に居りたいと言つた。その中には何か巧い工夫があるだらう。恚う考へて、

「まあ聽いて下さい。私は昨夜オストラニウムに往つたのです。お前さん達の教を聽きました。私は教を聽かぬ中から、お前さん達は正直な罪のない人達だと思つてゐました。だから何卒私を信用して此家に居つて下さい。又私も置いて下さい。此人が(ガラウスクを見上げて)醫者なら、今夜私を他處に連れて行くのは可くないと言ひなさるでせう。私は病人です。骨が挫けてゐます。尠なくとも二三日は此儘動かさずに居たい。腕づくで私を運出しないなら仕方ありません。左もななくば此家に置いて貰ひませう」

「グキニチウスはこれだけ言つたが、胸が痛むので黙つた。」

「腕づくで甚厭仕やうとも思ひませんが、兎に角私共は安全な處に引越ます」

壯者は反抗しない。只額に皺を寄せて、

「どうぞ私に息を吻かせて下さい」と叫んだ。

「どうぞ私に息を吻かせて下さい」と叫んだ。誰もクロトの事を尋ねる者はない筈。クロトは今

日ベネベンチウムに往く事になつて居たのであるから、皆さう想つて居る。クロトと一緒に

に此處に來たのは希臘人一人である。その希臘人を此處に呼寄せて口留をすれば可い

さうすれば尠しの恐怖もない。髪一筋でも害されはせぬ。直ぐ其の希臘人を呼んで來て

下さい。その名はチロ、チロニデスだと言つた。クリスプスはそれに答へて、

「それならば、グラウクス殿に貴方と一緒に居てもらひまして、此家の寡婦と一緒に、貴

方を看護して戴きませう」

グキニチウスは一層眉を皺めて、

「私の言ふ事を聽いて下さい。私はお前さん達に感謝してゐる。お前さん達は善人なのに
似合はず、何故心を打明けて下さらぬ。私が奴隷でも呼集めて、リシアさんを連れて行くか
と心配するのでせう。さうですか」

「さうです」とクリスプスは嚴然と言つた。

グキニチウスは決して左様な事はせぬと誓つた。憤怒と衰弱にその顔は蒼くなつた
リシアは次の間で立聽き仕てゐた。リシアはグキニチウスが必然その誓言を守るに相違な
いと信じた。怪我をしてゐるグキニチウスを見ては、恐怖よりも哀憐を生じた。リシアは
出奔した以來、宗教的情熱の盛んな處に住んでゐたので、自然と犠牲献身の精神
に溢れてゐた。實の所グキニチウスはリシアの心情のいとも貴き要素となつてゐた。リシ
アは終日グキニチウスの事を言ひ續けたこともある。リシアは屢々神に祈つた。グキニチ
ウスの迫害に報ゆるに愛を以てすることが出來まするやう、その傲慢が變じて謙遜なる心
となつて彼の人も亦基督を信するに至りまするやうにと求めた。そして今こそ其の機會は

来た。リシアの祈は容れられた。リシアは恚う想つて、クリスピスの側に來た。興奮して、顔は輝いてゐるリシアは目を開いた。その言葉は聖かつた。

「クリスピスさま此處に御ゐでなさる事を許しておあげ下さいまし。基督が此の御方を癒して下さるまで、私共は御一緒に居りませう」

長老クリスピスは萬事に神の攝理の働くのを見てゐた。リシアの此言語がその眞心から出たので、想はず首を垂れた。聖なる神の使者とりシアを想つた。畏敬の念は胸に浮びて、

「さう致しませう」と答へた。

ヅキニチウスは聖淨なるリシアの顔から眼を離さなかつたが、クリスピスが直ぐ服従したので、奇異な奥深い感想が仕出した。リシアは基督者の中に崇敬かな尼さんではあるまいかと感つた。ヅキニチウスの心もリシアの前には謙遜らざるを得ない。愛情の側に畏敬の念が生じた。

二 再 會

羅馬で人を捜すのは、方角が正確に解つてゐても容易な業ではない。けれどもウルススには野蠻人として森林を驅廻つた本能がある。その上羅馬の街區は能く知つてゐた。故に直ぐチロの住居を捜し當てた。ウルススはそのチロなのに氣が付かない。一度遭つたのであるが、それは夜分であつた。判然その顔を覺へてゐない。チロはウルススが自分に氣が付かぬことを看取つて安心した。ヅキニチウスの書翰を讀んで尙更心を沈着けた。

「危険な場合には、ヅキニチウスが保護して呉れるだらう。自分を殺すために呼び寄せるのでは有るまい」と考へて、勇氣を回復した。

「お使の御方、ヅキニチウス殿には轎を御寄越しになりませんでしたか。どうも足が腫れてゐますから、到底歩けません」

「いや、歩いて行くです」とウルスが言った。

「年を老つてゐますからな」とチロが呟いた。

「兎に角行くんです」

「それは参りますとも。自由意志で参ります。誰も強制する事は出来ません。哲學者と申す者は強制を受けない者です。私は人間を樹木鳥獸に變ずる術に通じてゐますからなあ。行きますとも、行きますとも。先づ温かい衣物を着ましてから」

チロは恚う言つて外套の層れ着をして、大きな頭巾を被つた。これはウルスに氣取られぬためである。

二人はダイバーの河向の方に歩いて行つた。道程は長い。聽てその家に着た。チロの心は躍つた。お、寒いと言つて、外套を緊密と體軀に纏ひ着けた。支關を通り越して庭に導く廻椽に來た時、チロは突然立留つた。

「慚し息を吻て行きませう。さもないとヅキニチウス殿に御挨拶が出来ませんから」

立留つたチロは、危険はあるまいと胸の裡に繰返した。けれどもオストラニウムで見た不思議な人達に面を合すのかと想へば、五體が慄然する。

家の内から讚美歌の聲が聽えた。

「あれは何ですか」とチロが質れた。

「御前さんは途で基督者らしい事を言つてゐられたが、救主を讚美する歌を知らないですか。ミリアムと息子が今還つて來たんでせう。多分使徒も來てゐられるだらう。毎日御出でになるから」

「ヅキニチウス殿の所に私を連れて行つて下さい」

「彼の方も同じ室にゐられます。一番大きな室です。他の室は小さくつて薄暗いから、睡る時の外は使ひません。まあ室内に入つて休息なさるが可い」

二人は室に入つた。室内は慚し薄暗い。曇よりとした冬の日の夕暮である。燈火が二つ三つ茫乎點火てゐる。ヅキニチウスは頭巾を被つてゐるのがチロだと、眼で見ると先に心に

感じた。チロは傍目もふらずに、直ぐヅキニチウスの寢臺の側に往つた。ヅキニチウスの側に居りさへすれば安全と想つたらしい。

「旦那様、貴郎は何故私の言ふことを聽いて下さりませんでした」とその手を握りながら言つた。

「静かにせい。かういふ譯だ」とヅキニチウスはチロの眼を鋭く凝視して、「クロトの奴は私の所有を取らうと思つて、私を殺しに懸つた。それで私はクロトを殺したことは、殺したが、自分も恚んなに傷を受けた。此の方々が親切に傷を繙帯して下されたのだ、解つたか」

チロは直ぐその眞意を看取つた。さも其の言葉を信じたものらしく、眼を擧げて叫んだ。

「悪黨ですなあ。旦那様、だから彼奴を御信用なさいますなど、あれだけ言ひましたに、まあ、恩人を殺さうとするなんて、何といふ兇惡い野郎でせう」

ヅキニチウスは語を次いだ。「私が萬一短刀を持つてゐないものなら、殺されたかも知れん」

「だから短刀を持つてゐらつしやいと私が申しましたのです。まあ、御仕合せでした」

「今日何を仕てゐた？」

「貴方の御無事を祈つてをりましたと先程も申しました。はい旦那様」

「それから？」

「御使者の御出で下された時には、恰度御伺ひ申す仕度をして居りました」

「此處に手紙がある。これを私の家に持つて往つて、家扶に渡せ。此手紙に私はベネベンチウムに往くと書いてある。御前からデマスに話して呉れ。マトロニウスから呼びに參つたから、今朝ベネベンチウムに出立したと言ふのだ」

「ヅキニチウスは一層力を込めて繰返す。「私はベネベンチウムに往つたんだよ。解つ

たか

「貴方が御出立遊ばされましたので、旦那様、今朝御別しましてから、私は悲しくつて悲しくつて、泣き死ぬかと想ひました」

ヅキニチウスは病弱の身である。此希臘人の狡猾なことは充分知つてゐる。けれども笑はざるを得なかつた。自分の眞意を直ぐ擲んで呉れるのを嬉しく想つた。

「まあ涙を拭くが可い。燈火を此所へ」

チロは安心した。起上つて圍爐邊に歩み寄つて、棚から燈火の一つを取つた。その途端頭巾が脱れた。その顔は鮮明に照される。グラウクスは腰掛から飛上つた。急足に二三歩前に出て、希臘人に面と面を合せた。

「私を覺へてゐるか。ケフハス」

その聲は恐ろしく響いたので。居合す者は皆身を慄はした。チロは燈火を擧げたが、直ぐ床に取落して、身を縮めた。

「人違ひです。人違ひです。あ、お救げ下さい」

グラウクスは晚餐の洋卓を圍む人達に向つて叫んだ。

「此奴こそ私を陥れて、私と家内を苦しめた者です」

グラウクスの災難は基督者の中で有名な譚である。ヅキニチウスも聞いた。けれどもそのグラウクスが此人だとは想はなかつた。傷を縛帯された時は全く夢中で、其名を聽かなかつたのである。

ウルススはグラウクスの語を聽くや否や、闇黒に光の閃めくを感じた。飛上つてチロの側に往つて肩を握んで打振ながら、

「グラウクス殿を殺せと、私に勧めたのも此奴です」

「どうぞ御免なすつて」とチロは泣聲になつた。「どの様な事でも致しますから」と呻きながら、ヅキニチウスの方を向いて、「旦那様、どうぞ御助！御助けなされて。貴方様が生命の綱で御座います。どうぞ、旦那様。御手紙を持つて参ります。旦那様、どうぞ」

この奇妙な光景に、ヅキニチウスは餘り心を動かさなかつた。希臘人の秘密が悉く解つたのと、其の心には憐れみの情が乏しかつたからである。

「庭に曳づり出して生埋めにして仕まへ。使者は他の者で可い」と冷かに言つた。

チロは此言葉最後の宣告と聽いた。ウルススに體軀を抑へられてゐるので、骨が慄然震へた。涙を一杯浮へて、

「貴方がたの神さまのために、何卒御救け下さいませ。私は基督者で御座います。御信じなさらなければ今直ぐ洗禮を授けて下さい。一度で可くありませんければ、二度でも、三度でも。グラウクスさま、それは大變誤解です。説明致します。奴隸になります。生命だけは御救け下さいませ。どうぞ、どうぞ」

チロは壓着られるので苦しい。呼吸は塞がった。只哽咽ばかりである。

洋卓の向ふから使徒彼得が起上つた。白髪の頭を震はして、打垂れた。眼を閉る。やがて眼を開いて沈黙を破つた。

「救主は仰せられました。爾の兄弟、爾に罪を犯さば之を懲せ。けれど悔改めなば之を赦してやれ。日に七度罪を犯し、七度爾に背くとも、救けて呉れと言ふ者は、赦して遣せ、これは救主の御言葉ですぞ」

室内は森とした。グラウクスは手を面に當て、暫時黙つて起つて居た。やがて面を擧げて、

「ケフハス神は御前を赦して下さいませ。御前の罪は私も赦してあげる」

ウルススは希臘人の腕を離して、

「私が御前を救けてやるやうに、神は御前を救けて下さるわ」

チロは床に手と膝を着いて蹲踞つてゐる。係蹄にかゝつた獸のやうに頭を震はせながら、今に殺されるかと待つてゐたのに、想ひもよらぬ赦罪との言葉。驚いて四方を見廻した。眼をも耳をも信ずる事が出来ぬ。到底救からぬと觀念してゐたのだ。やがて徐々人心地が着いたが、紫色の唇を慄然させてゐる。

使徒は言つた。「平安に此處を去つたが可い」
チロは起上つた。口が利けぬ。驚愕と不安の念に室内を見廻した。やがて跣跟きながらヅキニチウスの側に往つて、

「御手紙を下さい」とヅキニチウスから書翰を受取つて、基督者の方に身を低く屈めて、急いで暗い庭に出た。若しやウルスが自分を殺しに来はしないかと想はず身の毛が竦立つた。不圖側を見るとウルスが隨て來てゐる。チロは地に平伏して苦しげに嘆願した。

「ウルスさま、基督のために御救けなされて！」

ウルスは言つた。「恐がりなさるな。使徒が玄關まで送つてやれと言はしやる。暗黒で御前が迷つただらうと心配しなさるのだ。弱つて歩けなければ、家まで送つてやらうか」

チロは首を擧げた。「それならば私を殺さないのですか」

「殺しはしません。先程餘り強く壓着けたから、骨が挫けたら許して下さい」

「殺さない御つもりなら、どうぞ私を抱へなされて、街道まで連れ出して下さい。其處から獨りで行かれます」

ウルスは鳥の羽でも持つやうに軽くチロを街道へ抱へ出した。二人は其處で別れた。

チロは急ぎ足に歩きながら、「何故彼奴等は俺を殺さなかつたらう？」と高く叫んだ。

三 幻 象

ヅキニチウスも亦此の事件を説明することが出来なかつた。チロと同じく靈魂の根底から驚いた。リシアを強奪せんとした自分を赦して、親切な待遇を仕て呉れることは、其道理を想へば解らんでもない。けれども大罪を犯したチロを赦すとは、殆んど人間業ではない。「何故チロを殺さなかつたか」これは避けんとして避け得られざる疑問である。餘り意氣地がなさ過ぎるやうに想はれる。狼に出會つた羊の感がある。ヅキニチウスの羅馬魂が

らは全く尊敬すべき事ではない驚きながら蔑視する心も生じた。
ところがヅキニチウスは又驚かされた。チロの出で行つた後、居合はす人々の顔は歡喜に輝けるではないか。使徒はガラウクスに近寄つて、その首に手を按いて、「基督は貴方に依りて勝利を獲られました」と言つた。ガラウクスは面を擧げたが、矢張り知らぬ歡喜は其胸に溢れた。ヅキニチウスが今まで味つた歡喜は、只復讐を成就した歡喜ばかりである。故にいかにも不思議に見える。彼は輝く眼を擧げて、狂人を見るが如く一同を見廻した。世界の秩序が轉覆り還つたやうな氣がする。やがてウルスは戻つて來た。チロを街道まで送つて、骨が挫けたら赦して呉れと言つたことを語つた。使徒は又ウルスを祝福した。クリスプスが側から、「今日は大勝利の日でした」と言つた。勝利の語を聞いて、ヅキニチウスは全く茫然した。
リツアが飲料を持つて來たので、ヅキニチウスはリツアの手を握つて、
「私も赦して下さいますか」と質れた。

「私共は基督者で御座いますから、心に怒りを含んでゐることは許されませんの」とリツアが答へた。

「リツアさま。貴嬢の神さまは何んな神さまですか。私は牛百頭を捧げます貴嬢の神さまですから」

「貴郎が神さまを御愛し遊ばすなら。御心にて神さまをお崇めなさいましね」

「貴嬢の神さまですから」とヅキニチウスは繰返したが、眼を垂れた。衰弱は又襲つて來た。

リツアは室外に往つた。間もなく還つて來て、寢臺の側に立つて身を屈めて、睡つてゐなされるのかと睥視めた。ヅキニチウスはリツアが側に來たことを感じて、眼を開いて笑つた。リツアは柔しくその眼瞼を撫て、睡らせやうと仕た。ヅキニチウスの心は非常に穩和になつて來た。けれども今容態が變つた。病は悪くなつたやうである。夜が更ると激しく熱が出た。睡られない。眼は只リツアの歩く方を凝視してゐる。

折々夢現になる。實際に在つた事と幻象が混亂して目に寫つた。古代の墳墓の中にある塔の形の宮殿の裡に、リシアが尼になつてゐるのが見える。リシアがその塔の頂上に立つて、縦琴を手に持つて、全身に光を浴て燦爛と輝くやうに想はれる。東洋に往つた時度々見たことのある、月夜に讚美を歌ふ尼さまの様にリシアが見えて来る。それから自分がリシアを下に降ろしたいと漸くの事で、螺旋形の階梯を登つて行くやうな心地になる、自分の後にはチロが這ひ上つて来て、齒をガタ／＼させながら、「旦那様、御止めなさいまし、その尼様を取ると神さまに怒られます」と叫ぶのが聞える。ヅキニチウスには其神さまと云ふのは何だか解らぬ。けれど自分がその神聖を瀆してゐるやうな気がして、空恐ろしく身が慄へる。塔の頂上の周囲の柵の所まで行くと、銀色の髻をした使徒が突然少女の側に立現はれて、

「この少女に手を觸ては往けない。此少女は私のものだ」と言ふ。

使徒と少女は次第に上の方に動いて、月の光で生じた途を天に登つて行く。ヅキニチウ

スは両手を高く擧げて、一緒に連れて往つて下さいと叫んだ。

此點まで来てヅキニチウスは目を醒ました。四方を見廻した。爐の火は消えかゝてゐる。基督者は爐の邊に座つてゐる。冬の夜で室は寒い。一同の真中に使徒が居る。リシアは使徒の膝に憑か、つてゐる。眇し離れて、グラウクス、クリスプス、ミリアムが座つてゐる。一方の端にウルススが居る。又一方の端にミリアムの息子ナザリウスが居る。美しい顔を、肩まで垂れ懸る、捲髮の若者。

リシアは使徒の顔を見上げて熱心に聽いてゐた。一同の眼も使徒に注がれた。使徒は低い調子で話してゐる。ヅキニチウスは熱に浮されて幻象を見た時と同じく、道理なく恐ろしく感じた。確かに自分の事を老人が話してゐると想つた。自分とリシアを甚麼して別離たうかと計畫してゐるのだ。外に話すことがあると想はれぬ。恚う考へたヅキニチウスは使徒の言葉を聽んものと注意力を耳に集めた。けれども全く間違つた。使徒は基督の事を話してゐるのだ。

「基督の事ばかり想つて暮してゐるのだな」とヅキニチウスは獨語いた。

老人は基督の捕へられた時の状態を話してゐる。「一隊の兵卒と下吏どもが基督の所に來たのです。教主は彼等に向つて誰を尋ねるのかと言はれた。彼等はナザレの耶蘇を答へたから、御前達の尋ねる者は私だと言はれた。するとその威光に恐れて皆地に倒れて了まつて、誰一人基督に手向ひする者が無い」

使徒は一寸と息をついて手を火にかざしながら。

「その夜は今夜のやうに寒かつたのです。だが私の血は體の中で煮くり返つてゐた。私は劔を抜いて基督を護らねばならんと想つて、下吏の耳を切落した。生命を的にしても基督を防ぐのは當前でせう。所が基督は劔を鞘に鞘めよ、我は父の與へられたる盃を飲まんと言はれたのです。そこで基督は捕へられました」

恚う言つて彼得は、額に手を當て、暫時語を斷つた。叢り來る思出を打消さうとするのであらう。ウルススは此譚を聽いて、耐へ切れずに起上つて、鐵の棒で爐の火を掻

廻した。火はパツと新しき勢で燃立つた。ウルススは座りながら、「その時私があるましたら」と言懸けたがリシアが唇に手をあてて見せたので、口を緘んだ。そして太く嘆息をついた。心の掻捲られるやうなのが見える。

彼得は額に撃した手を取つて、又話し出した。

けれども熱は又ヅキニチウスを襲つたので、半睡半醒の状態に陥ちた。ヅキニチウスの胸には、オストラニウムで聽いたガリヤヤ湖畔の基督が浮んだ。廣々とした湖水の上に漁舟のあるのが目に寫る。舟には彼得とリシアが乗つてゐる。ヅキニチウスは根限り力を出して舟の方に泳いだ。片腕が痛むので、二人の側に行くことが出来ぬ。暴風は波を捲いて目を塞ぐ。溺れた。聲高く救助を呼んだ。リシアが使徒に嘆願して、舟を漕ぎ寄せて權を延して呉れた。ヅキニチウスは權に取着いた。漸く舟に乗つたが、身は舟底に倒れた。

やがて起上つて四方を見た。大勢の人が舟に泳いで來る。泡立つ波に人々は吹分られ

る。波の上高く手を擴げる者もある。彼得は溺れる者を一人／＼救上げて舟に入れると舟は次第に大きくなる。大勢の人は忽ち舟に乗る。オストラニウムの群衆ほど大勢で、益々殖える許りだ。ヅキニチウスは甚麼してそんなに多人數が一つの舟に乗れるかと驚いた。沈没しないかと心配した。リシアはヅキニチウスを慰めて、遙か向ふの岸に燈火が見える、それを目標に舟は進んで居りますといつた。彼得が舵を操つてゐる。漸次岸に近寄ると暴風は止み波濤は鎮まつた。岸の燈火は益々鮮やかに輝いた。群衆は美しい讚美歌を歌ひ初めた。空中には清香飄として一面に擴がつてゐる。水は虹の如く七色に彩られた。清く澄める水を通して、百合や薔薇の湖底に咲くのが見える。やがて舟首は和かに岸の砂に着いた。リシアはヅキニチウスの手を取つて、「御出で下さい、御案内致します」と燈火の方に連れて行く。

ヅキニチウスは又目が醒めた。夢は次第に消える。葡萄の蔓が今しも爐に投られたと見えて、火は炎々と燃えてゐる。その光に熱く見れば、リシアが自分の寢臺の側に座つてゐるではないか。ヅキニチウスは心の奥底から感動した。先夜リシアはオストラニウムで徹夜した。然るに今夜も亦徹夜してゐる。リシアは疲れてゐるに違ひない。身を動かさぬ。眼を塞いでゐる。假睡を仕てゐるのか、冥想に耽つてゐるのか解らぬ。ヅキニチウスはリシアの横顔を見た。下を向けてゐる睫毛を見た。リシアの手は力なく膝に垂れてゐる。ヅキニチウスの異教的頭腦にも、邪氣なく假睡するリシアの容姿を見ては希臘羅馬の人々が圓滿完全の美なりと誇る裸體美以上に、この世界には純潔無垢の靈魂を宿せる人の崇高な美を想ふて、これに憧憬れざるを得なかつた。

ヅキニチウスは種々奇妙な新しい現象を見たが、まだこれが基督教であると言ふことを憚つた。けれどもリシアの容姿を睥視して、如何にしてもリシアと其信する教理とを引分けることが出来ぬ。有ゆる生物は睡る眞夜中に、自分を迫害する者を徹夜して看護してゐる此の少女。これは疑ひもなく其の信する教理に隨ふての事であらう。實に驚くべき事だ。リシアは確に世の常の女と違ふ。ヅキニチウスは心に驚いた。自分の心にも何か驚く

べき事が起つて来たやうな氣がする。奇妙な新しい感情は湧然として胸に湧いた。リシアは眼を開いて。ヅキニチウスが自分を睥視してゐるのに氣が付いて側に寄つて来た。

「私は貴郎の看護をしてをりましたの」

「私は現に貴嬢の靈魂を見ました」とヅキニチウスが答へた。

四 對 談

翌朝ヅキニチウスは目が醒めた。身體は疲れてゐる。額は冷たい。熱は去つた。叫ぶ聲で目が醒めたやうに想つたが、リシアは側に居ない。ウルスが爐邊に身を屈めて、火を吹起してゐる。ヅキニチウスは此男が昨日クロトを叩殺したのだなと、批評的に興味を持つて見やつた。

「それでも此男が俺の頭を挫かなかつたのは仕合せであつた。リシア人が皆な此男のや

うに強い奴なら、ダニエム河地方は危険だわい」と考へた。

ヅキニチウスは聲高く呼んだ。「おい、これや、奴隷」

ウルスは爐から頭を擧げて親しげに笑つた。「好い御天氣です。大變快い様ですなあ。だが私は奴隷ではありません。普通の人間です」

ヅキニチウスは快く笑つて、「御前はアウルスの家の者か」

「いゝえ、旦那、私はカリナ様に使へてます者です。カリナ様の母様にも使へました。自分の意志から御用を努めてゐるのです」

ウルスは又頭を爐に突込んで火を吹いたが、一寸と止めて、

「私等の中には奴隷はありません」

「リシアさまは何處に往つたかれ」とヅキニチウスは聽いて見た。

「一寸と外に出られました。私は貴方の朝飯の仕度をしてゐる所です。お嬢さまは夜通し貴方を看病してゐられました」

「何故御前代らなかつた？」

「お嬢さまは自分でなさるとお言ひですから。私は只お嬢様に随ふ許りです」

ウルスは恚う云つて一寸と額を繼めて、

「私がお嬢様の言ふことを聽ない者なら、貴方は今生きては居られませんでした。旦那」

「那」

「私を殺さなかつたのが残念か」

「いゝえ、旦那、基督は殺す勿れと命ぜられました」

「アタシヌスやクロトを何故殺した？」

「辛抱が出来なかつたのです」とウルスは叫いた。自分の腕を口惜しげに睥視る。心は

洗禮を受けてゐても、手には尙異教の血が循環してゐるのだ。ウルスは爐に壺を置いて、

蹲踞つて燃ゆる火焰を眺めながら考へ込んだ。やがて口を開いた。

「貴方が悪いのです。旦那、貴方は何故お嬢さんを苦しめなさるのです。國王の姫さまで

すぜ」

グキニチウスは勃如とした。平民で加之も野蠻人たる者が自分と親しげに話しをする許

りでなく、自分を批難するに至つては恕すべからざる事である。けれども今は仕方がない

奴隷も側にゐない。ウルスを如何する事も出来ぬ。グキニチウスは憤怒を制へた。それ

からリツアの經歷を尋ねて見る。

ウルスはリツア人と他の蠻族との戦争から話し出して、リツアの人質となるまでの歴

史を語つた。それからグキニチウスの朝餐の世話を始めた。

恰度其時リツアが窓掛の後方から蒼い顔を出した。

「今そこに參つて私がお世話を致します」と言ひながら、寢室から出て來た。寢に就くと

してゐたものらしく、身體に密着りとあふ肌衣を着たまゝである。髪の毛は垂れてゐる。グ

キニチウスは胸を躍らせながら、御寝みなさいと勧めた。けれどもリツアは快げに、

「恰度休まうと仕てゐましたのですが、まあ、ウルスの代りを致しませう」

ウルススから朝餐の器を取つて、寢臺の端に座つて、ヅキニチウスを養ひ始めた、嬉しさはヅキニチウスの心を鎮めた。リシアが身を屈める度毎に、ヅキニチウスはリシアの身體の温味を感じた。リシアの長い黒髪はヅキニチウスの胸に垂れ懸る。心緒紊れてヅキニチウスの顔は蒼くなつた。今までリシアに向つて只煩惱を動したに過ぎなかつたが、今や全心の愛は、リシアに對して迸出るやうに感じた。今までは盲目的な利己主義から只自分の事ばかり考へてゐたが。此時リシアのため許りを考へるやうになつた。ヅキニチウスは幾杯かの食物を喰べた。リシアの側に居るのを無限に楽しみながらも、「充分です、彼方に往つて寢んで下さい。私は心から貴嬢を尊敬してゐます」

「さやうなことを、仰やいますな」

リシアは恚う云つたが、微笑んだ。それから静しも睡くも疲れてもゐないから、グラウクスの来るまでお側に居りませうと言つた。リシアの一語一句は、ヅキニチウスの耳に妙なる音楽と聽えた。大いなる愛情、大いなる歡喜、大いなる感謝は胸裡に漲つて、言葉が出ない。

「リシアさん」と静し言ひ濁んだが、やがて語を續けた。

「今まで私は貴嬢を知りませんでした。不正な手段で貴嬢を獲やうと思つたのが悪かつたと悟つてゐます。だから、どうぞボムボニア様の處に歸つて下さい。彼の家になら誰も貴嬢を惱ます者はない筈です」

リシアは首を垂れて言つた。「遠くからでも善いですから、一目でもお母さまの御顔を拜見することが出来ましたなら、どんなに幸ひでございませう。ですけれども私は還ることが出来ませんのです」

「なぜですか」とヅキニチウスは訝つた。

「私共、基督者は皆存じてをります、御殿で起りました事を。アクテア様が御知らせ下さいましたので。貴方は御聽きになりませんでしたか。私が逃げ出しますと直き、皇帝はナポリへ御出發になりましたから、お父さまお母さまを御呼出しになつて、私を助け

たらうとの御疑ひ、御憤怒に乗じて、お父さまお母さまを脅かしになりましたさうでございます。幸にお父さまが巧く御答辯なされましたから、御救りなされたさうで御座います。ですから、私は一寸でも私の居ります處をお知らせ致さないのでございます

アウルスとボムボニアを慕ふ情緒は、リシアの胸に押寄せて來た。涙は眼に溢れたが、やがて氣を取直して、

「お母さまはどんなに私に遇ひたく思召てをられませう。ですけれど私共には他人達の知らない慰安が御座いますのですから」

「その慰安といふのは基督でせう。だが私には解らない」

「まあお聽き遊ばせ。私共には離別も悲哀も苦痛もなんにも御座いませぬのです。そのやうな事は皆欣喜に變つて了ひます。死と云ふことにしましても、貴郎には人生の最終とお見えになりませう。ですけれど私共にはそれが人生の最終なので御座います。小さな幸

福から大きな幸福に移るのでございます。小さな平和から永遠に變らない高い平和に行きますのです。敵を愛せよと命ずる教を信じますと、虚偽がなくなります。靈魂に悪いことが染なくなりませう。死にましてからも、限りない幸福が約束されて居るので御座います」

「さういふ事はオストラニウムで大概聽きました。私やチロに對する處置を見ても解ります。それを考へると全然夢のやうです。耳や眼を信じたくない位です。それはさうとして、貴嬢は今幸福ですか」

「はい、基督に何もかも申上げる事が出來ますのですから、不幸な事は御座いませぬ」
「グキニチウスはリシアを凝視した。リシアの言葉は人間の思考を全く超越してあるやうに想はれる。

「すると、ボムボニアさまの處に還る心はないですか」

「それは御座います。神さまがお許し下さるなら、還りたう存じます」

「それなら申しますが、お還りなさい。私は誓ひます。二度と貴嬢を苦しめるやうな事は
仕ません」

リジアは一寸と言ひ涙んだが、やがて、

「ですけれど、親しい方々の御身を危くするやうな事は出来ません。皇帝はお父さんの
御家をお憎みでございます。私が還りますれば、奴隷達が直ぐ町中にふれ廻ります。羅
馬中の評判になりました。曉には皇帝にも自然知れませう。さう致しますと、お父さ
まお母さまは罰を御受けになりまするし、私は又連て行かれるやうな事になります」
「さやう」とグキニチウスは顔を皺めて、「さうかも知れませぬ。皇帝は自分の意志を
遂行すために、さう仕さうですれ、ですが皇帝はアウルス殿から貴嬢を奪つても、私に
貴嬢を渡してくれませよ。さうすれば又ポムボニア様の所に還れます」

リジアは悲しげに、「グキニチウスさま、貴郎は又御殿で私を御覽になりたいと思召
しますの」と言つた。

グキニチウスは齒をくひ縛つて、

「やあ、眞實にさうです。私の言ふ事は愚でした。決してさうでは無いです」

底知れぬ深淵はグキニチウスの前に口を開いてゐる。彼は貴族である。軍人である。権
力ある青年である。けれどもグキニチウスの屬する世界の支配權は、人並はつれた俗惡な煩
惱を有する狂人の掌中にあるのだ。此狂人を恐れぬことは、基督者のやうな人達
には出来るかも知れぬ。けれども離別苦痛死の存在する此世界の人間には到底出来ない。
有ゆる人間は皇帝の前に慄へるのである。實にネロの治政は恐怖に満ちたものである。
グキニチウスは今や始めて全世界は變化と改造を要する。然らずんば人生その者が不可能
になることを悟つた。恚んな暗黒な時代に幸福なのは、只基督者ばかりだ。
恚う云ふ感想以上でグキニチウスは悔恨の情に責られた。自分の生涯とリジア
の生涯を纏れさせて紛糾解く能はざるに至らじめたのは自分である。悔ゆる心は言葉に
現はれる。

「貴嬢は私よりも余程幸福です。貧しくつても、又恁んな室に住んで賤しい生れの人達と御一緒に居られましても、貴嬢は貴嬢の教理と基督とを持つて居られますが、私は貴嬢を失なせば、住む所も食ふ物もない漂泊人です。私に取りましては貴嬢は此世界よりも貴いのです。私が貴嬢を捜し出しましたのは、貴嬢なしには生きてゐられないからです。飯も喰へず、睡くもなかつたのです。貴嬢を捜し出す希望がなかつたら、私は劍に身を投て死にましたらう。だが私は死にたくない。死んでは貴嬢を見られないからです。實際私は貴嬢なしに生きてゐられません。眞實です。今までは貴嬢を捜して御目にかゝりたい許りに生きてゐました。池の端で何日かお話し仕ましたね。貴嬢は砂の上に魚をお書きになつたでせう。其時は何の意味か解らなかつたです。鞠投も御一緒に仕ましたね。その時から私は自分の生命よりも貴嬢を愛するやうになつたのです。それからボムボニア様が神は一柱だと言ひなされたね。その一柱の神は基督だとは其時想ひませんでしたよ。基督が貴嬢を私に返して下さるなら、私も基督を愛しませう。貴嬢は私の側にゐなすつても、

基督の事ばかり考へてゐるのでせう。私の事も少しは考へて下さい。左もないと私は基督を憎むかも知れません。私に取りては貴嬢は神聖です。私は貴嬢の前に平伏して、祈つたり、捧物をしたり仕たいやうな氣がします。どれ程私が貴嬢を愛してゐるか解りますまい、解りますか」

「グキニチウスは恁う云つて蒼白い額に手をあて、半ば眼を閉ぢた。彼は意馬心猿を制し得ざる人の如く荒狂ふ煩惱を吐露したのである。リシアにはその言葉が神を瀆す如く想はれた。

けれどもリシアの胸は激しく鼓動して、着てゐる肌衣がはり裂けるやうであつた。グキニチウスを憫れみ、その苦悶に同情せざるを得ない。献げられた崇拜の語に心の緒琴は鳴り響いた。リシアは自分の愛されてゐること、測るべからざる程崇敬られてゐることを感ずると同時に、此の權力ある貴族の青年が、身も靈も奴隸の如く自分の所屬であることを覺つた。斯も服従されて、此人を全く支配してゐるのかと想へば、言ひ知れぬ歡

喜び胸に溢れた。リシアの記憶は猛烈に蘇生つて来た。異教の神の像の如く壯麗なる人、アウルスの家にて自分に戀を語つて、自分の心を稚き夢から呼醒了した人、自分の唇に接吻した人、ウルスが炎々たる焔からの如く、自分を御殿より救出してその絆を断切つた人、その同じヴキニチウスは、今や驚の如き其の顔に苦痛と歡喜の色を浮べて、蒼白い額をして、慕ひ求むる眼をして、戀のために傷つけられ、骨は挫けてをれど、尊崇と謙遜に心を潔めて、後には實現することを許しても可い理想の方に次第に近いて行くのだ。その理想といふのは靈魂の奥底から全き心を盡して自分を愛してくれぬ事である。恚う想へばヴキニチウスが一層親しく懐しく想はれて来た。

やかてヴキニチウスに對する愛情は旋風の如くりシアの脚を凌ひさうになつた。實際リシアは一度絶壁の端に立つたのである。その遁出して自分を救ふたのだ。リシアは眞心もて基督を愛して居る。故に基督以外に又他の人を愛することは、基督に對して罪であるやうに感ぜられた。これまでもヴキニチウスに對する愛情が兆す毎に、非常に

心を惱め恐怖を懷いたのであつた。

リシアが悶えてゐる時、グラウクスが入つて来た。病人の傷を洗ふために来たのだ。けれどもヴキニチウスは心に怒つた。邪魔者と想つた。容態を尋ねられても、碌な挨拶も仕ない。ヴキニチウスの心はリシアに向つて一大變化を來したものと、其他の事になると羅馬人その儘、矢張り己的である。

リシアは室を去つた。心の奥底には悲哀と不安が蟠かまつてゐる。わが心を静めたまへと基督に祈つた。涙の如き清き心になりますやうにと祈つた。けれども静けき心は再び還つて來ない。毒蟲が花瓣に入つて荒狂ふやうである、二夜も徹夜してゐるのに、床に就ても心は沈着かぬ。その内に假睡して夢を見る。ネロが軍勢を率ひてオストラニウムに來る。薔薇で飾つた兵車で基督者の群集を轢殺した。ヴキニチウスは腕にリシアを抱上げて兵車の中に入れて、密着り抱占めながら、「一緒に」と囁いた。

五 保羅の出現

その時からリツアは、ヅキニチウスの寢臺の側に餘り來なくなつた。けれども心は鎮まらぬ。病人が憧がるゝ眼は絶えず自分の跡を追うてゐるのに氣が付いた。リツアの言ふことは何でも聞く。少しも不平を起さない。リツアその者が歡喜である。健康の根元である。これを知つたりツアの心は、同情の想ひ、哀憐の念に漲つた。ヅキニチウスから遠ければ遠かるほど、憐れみを増して來た。言ひ知らぬ柔しき情緒が湧いて來た。春の海のやうに靜穩な平和は、再び還つて來ない。時には道理を附けて、ヅキニチウスの側に居るのは自分の本務ではないかと考へて見た。神は惡に報ゆるに善を以てせよと教へられた。談話をしてゐる間に、眞正の宗教の方へヅキニチウスを導いて行けるやうな氣がした。けれども又彼の人に心を魅せられてゐながら、その側に行くのは、自分の本心を欺くのだとも想つた。斯やうな苦悶は日に日に烈しくなるばかりである。網で捕はれたりリツアは、

遁れんと焦せれば、焦心るほど、強く占め着られた。日増にヅキニチウスの顔を見ずには居られなくなつた。ヅキニチウスの聲は益々懐しくなつた。寢臺の側に行くまいとするには、余程心を制せねばならぬ。側に往つた時、ヅキニチウスの眼の輝くのを見ると、リツアの胸は歡喜に躍るのであつた。或日リツアはヅキニチウスの睫毛に涙の痕の残つてゐるのに氣が付いた。生れて始めて接吻して、その涙の痕を拭ふてやりたいやうな熱き情緒が、リツアの胸に生じた。リツアは呀と想つた。深く心に耻ぢて、その夜一夜泣明たのである。

ヅキニチウスは忍耐を誓つたと見えて、非常に情を抑へてゐる。時には疝癩に眼の燃えることがあつても、直ぐ氣を取直した。只氣遣しげにリツアの許容を待つやうである。可憐らしきその状態、リツアは愛しと想はざるを得ない。實際ヅキニチウスは見違へるほど變つた。ガラウクスと議論することがあつても、傲慢な態度が余程薄らいだ。この可憐なる奴隷の醫者も、自分を看護してゐる老女ミリアムも、祈禱に日を暮してゐるクリスプ

スも矢張同じ人間であると想ふやうになつた。

ヅキニチウスは次第にウルススを可愛がるやうになつた。終日ウルススと話して居ることともあつた。ウルススと話して仕て居ると、自然リシアのことが話題に登るからである。この巨人は話しの盡きない男であつた。ヅキニチウスは余程賢しい質素な人々に同情同感を覺ゆるやうになつて、今まで経験しなかつた思想が湧いて來た。賢しい人々の性格の特徴をも見出した。

只一つヅキニチウスの目障りになつたのは、ナザリウスである。この少年がリシアを慕ふて居らぬかと疑つた。こんな妬心の起る毎に自分の心を叱つた。けれども一度ナザリウスが稼ぎ蓄の金で、二羽の鴉を買つて來てリシヤに贈ると、リシアが悦んで御禮を云つたのを聽いて、ヅキニチウスは着くなつた。ナザリウスが鴉に水をやりに行つた間に、ヅキニチウスは、

「リシアさん、貴嬢はそんな贈物を受取るのですか。希臘人はあの人達を猶太の犬と呼

んでますよ」と言つた。

「希臘人がなんと申してゐますか存じませぬけれど、ナザリウスは基督者ですから、わたしども兄弟の一人ですの」

リシアは恚う云つたが呀と想つた。餘り言ひ過ぎたと氣が付いた。ヅキニチウスはそんな兄弟は皆で叩き殺すか、足を縛つて島流しにでも仕なさいと言はうとしたが、齒をくひしばつて、憤怒を抑へて、

「リシアさん、赦して下さい。貴嬢は國王の姫君で、プラチウス殿の養女でした」と言つた。

ナザリウスが室に還つて來た時は、充分心が靜まつてゐたので、ヅキニチウスは別荘に還つたら、孔雀と紅鶴を二羽づゝ贈つて寄越さうと此の少年に約束した。

リシアはヅキニチウスが克己をするのに、非常に骨が折れることを知つた。その克己を見るにつけ、愛着の絆に纏はれた。けれどもナザリウスの事は、リシアが想ふほどヅ

キニチウスの苦心を要さなかつた。一時嫉ましく想つたものゝ、絶えず嫉妬したわけではない。ナザリウスの如きは、ヰキニチウスの眼には犬も同様である。その上ナザリウスは戀を知らぬ子供に過ぎない。ヰキニチウスの心を一層烈しく襲つた苦悶は、知らず識らずの内に、基督の教を奉ずる人々を尊敬するやうになつて行く俺が弱き心情との戦争であつた。基督の教に對して強硬なる態度を取らんとした。リシアが信ずる教としては、これを是認としたけれど、自分は決して信じたくない。けれども病が癒るにつれて、オストラニウムの夜以來起つた事件が判明と胸に浮んで來た。それを一列に組立て考へて、見れば見るほど根底から人の靈魂を改造する此宗教の神秘不可思議な力に心が動かざるを得ない。

ヰキニチウスは今まで此世に知られなかつた奇妙な力が基督教に在ると想つた。其の力を以て全世界に打勝つことが出来る。純全たる愛の世界に此世を變ずることが出来る。うである。

基督は神の降したまへる獨子であること、基督の復活、又その奇蹟に就ては、ヰキニチウスは毫も疑はない。その事を話す目撃者は充分信ずるに足る人であるからである。虚偽を口にするには餘りに正直な人である。當時羅馬には懷疑的思潮が盛んであつて、神々の存在は否定しただけれど、奇蹟の存在は信ぜられてゐた。

ヰキニチウスは此奇妙な難解な宗教を判然と解るやうになりたいたと想つた。此宗教は現存の社會秩序に反抗するもの、全く實行の出來ないものである。一種不思議な狂人の教である。勿論羅馬人は腐敗してゐる。此世は姦惡に満ちてゐる。けれども羅馬の皇帝が世界の統治權を失ふ時があるであらうか。羅馬人は他の民族を支配する力を失ふことがあるであらうか。生來の貴族であるヰキニチウスには到底想像することが出来る。それに又ヰキニチウスとリシアとを分つものは、今や實に此宗教のみである。さう想へば此宗教に對する憎惡の念が勃然と湧上る。

けれども又一方にはリシアをして到底説明の出來ぬほど絶世の美人たらしむるものは

その靈魂を培ふ崇高の教であることを認めざるを得ない。聖き光がリシアの心に燃ゆればこそ、ヅキニチウスの愛情は益々高まるのである。恚う想へば基督を信する念が自ら湧て来る。今やヅキニチウスは、基督を愛するか、憎むか、何れか一つを選ばねばならぬ瀬戸に達した。中立は不可能である。二つの潮は激烈にヅキニチウスを板挟みにした。彼は立瀬を失つた。恐ふべき處は四方にない。思想も感情も全く潮流に捲込まれざるを得ない。ヅキニチウスは止むを得ず首を垂れた。そしてリシアの信する、知らざる神を黙拜したのである。

リシアはヅキニチウスの心の變化を認めた。謙遜つた心を持たうと努めながら、尙ほ全力を以て基督教を拒絶んとしてゐることを見て取つた。非常に悲しくも想つた。けれどもヅキニチウスが知らず識らず基督を尊敬するやうになつて行くのを見て、益々愛しくなつた。リシアはボムボニアの憂愁を想ひ出した。ボムボニアは夫アウルスが未信者であるために、來世には一緒に住むことが出来ないといつて絶えずそれを苦勞にして、涙の乾く閑

もないのである。リシアは今やその愁、その悲しみをよく悟つた。

折々リシアはヅキニチウスが基督の教を奉ずる日が来るだらうと自分を欺いて見た。けれどもその幻想は永く續かない。リシアは餘り能くヅキニチウスを知つてゐた。その心が解つてゐた。ヅキニチウスが基督者！リシアの如き人生に經驗のない頭腦には到底想ひ及ばぬ事である。思慮の深い、素行の正しいアウルスでさへ、賢明にして圓滿なるボムボニアの感化の下に、基督者となることが出来ぬではないか。然るにヅキニチウスが、甚麼して基督者となることが出来やう。到底駄目である。悔改の希望、救の目途はないのだ。斯う想ふより外に仕方がない。

リシアはヅキニチウスの頭上に振懸つてゐる滅亡の宣告を想つて、慄へ戦いた。憐れと想ふにつけ愛しさは増した。時には暗黒なその未來を明瞭に話さうと想つた。一度その側に座つて、基督教の外には生命は有りませんと云つた。所がヅキニチウスは怪我をしてゐない方の手をあげて、突然リシアの衣物の裾にその頭を載せながら、「私の生命は

「あなたですよ」と言つた。

その圖端リシアは呼吸もつけなかつた。嬉しさに頭から足まで慄へた。ヅキニチウスの頭を両手で抑へて、自分の唇が彼の髪の毛に觸れんとする所まで持つて往つた。二人はその瞬間酒に酔つたやうに恍惚した。リシアは心を勵まして、努めて愛の夢から醒めたのである。

リシアは聽て起上つて、遁出した。血管には焔が燃える。頭はふらく／＼する。一杯に満ちてゐる洋盃の一滴は、搖れて溢れたのである。その夜一夜リシアは睡れなかつた。涙を垂れて神に祈つた。祈るべき權利はない。祈つても最早聽れないやうに感じた。翌朝リシアは早く起出で、クリスプスを庭に連出し、葡萄蔓の覆ひ被つた園亭に往つて、其の心の秘密を打明けた。ヅキニチウスに對する愛の絆に打勝つことが出来ぬから、此家を去らうと想ひますと言つた。

クリスプスは老人である。情の冷た嚴肅な人である。始終神に酔へる人である。故

に異議なくリシアの逃亡に同意した。そしてリシアの胸に宿つた地上の愛を罪深しと觀じた。全世界を見渡す所、基督の榮光のために獻げられた純潔至誠なる衷情は未だ嘗て存在したことがない。故に甚麼かしてリシアを圓滿完全なる眞珠として、寶玉として救世主に獻げたいものと想つてゐた。然るにリシアは今や汚穢れた煩腦に絆されてゐるのである。クリスプスは絶望の想ひをなして苦しげに言つた。

「あちらに往つて、神さまに罪の赦免をお願ひなさい。あなたを惑はす悪い心から自由になれば可けません。神さまは不思議にも彼の人の手から貴嬢を御救ひになつたのに、その暗黒の子供を愛するやうになりなされたとは、まあ、貴嬢は甚麼なされたのです。一體彼の人は誰です。基督に反對する人ではありませんか。眞の子供ではありませんか。彼んな人を愛するよりか、死んだ方が益です」

クリスプスの心は益々激した。リシアの戀を想へば、人の心が嫌惡になる。殊に女心の淺ましさを感じた。基督の靈妙なる御力でも、女の先祖であるエバの弱味を救ふこと

が出来ないかと嘆かれた。クリスプスはリシアが御殿から遁れ出た以来、リシアの父たる地位に立つてゐるので、リシアを憫れみ、慰め、勵まし、力を付けやうとした。

「私は神さまに私の失望と苦痛を申し上げます。そして貴嬢が救主を欺いて、罪の子供に想ひを懸けなされましたために、貴嬢の靈魂を御汚しになりましたことを、よく御詫びします。私は貴嬢が悪魔に打勝つことの出来るまで……」

クリスプスは一寸と言葉を断つた。他の人のある氣合がする。凋んだ葡萄蔓と青々とした常春藤の間に兩者の人のゐるのが眼に入つた。一人は使徒彼得である。他の一人は見た事のない人である。粗末な外套を着て、頭巾を被つてゐる。クリスプスはチロではないかと不圖想つた。

クリスプスの聲がするので、二人は園亭に来て石の腰掛に座つた。彼得の同伴の人は頭巾を脱して瘡せた顔を出した。頭の横の方は縮毛に蔽はれてゐるが、頭の頂上は次第に髪の毛が薄くなつてゐる。臉は赤い。鼻は歪んでゐる。質朴な。しかも元氣に満た容貌をして

ゐるので、クリスプスはこの人こそタルソの保羅と覺つた。

リシアは絶望の状態で、跪づいて彼得の足を抱へた。そして彼得の衣物の褶に疲れた小さな首を隠して黙つてゐた。彼得は言つた。

「心を平安になさい」

それから彼得は甚麼したのですと自分の足許に蹲踞つてゐる少女に尋ねた。やがてクリスプスはリシアの事を掻摘んで話した。

クリスプスの話してゐる間に、リシアは益々緊密く使徒の足に取着いた。隱家を其處に索め、使徒の慈悲を哀求するのである。

使徒は一部始終を聞いた。身を屈めてリシアの首に瘦せた兩手を載せて、クリスプスに向つて言つた。

「クリスプス殿、貴老は我等の愛する主が、カナの婚姻に招かれたまふて、男女の愛を祝福なされたことを御聴きになりませんか」

クリスプスは両手を垂れた。口を利くことが出来ぬ。話す人を驚いて凝視めた。彼得は暫く黙つたが聽て又言つた。

「クリスプス殿、貴老はマクダラのマリヤが基督の足許に平伏した時、その姦淫を赦したまふたことを聽きましたらう。その基督が野の百合花のやうに奇麗な此の少女を救して下さらぬと想ひますか」

リシアは歎歎きをしながら、彼得の足に漸次攫み付いた。隠家を索めた甲斐があるのである。使徒は涙に穢れたリシアの面を擽だて、

「貴嬢の愛してをられる彼の人、眞理に向つて眼を開くやうになるまでは、彼の人を避けた方が可い。貴嬢を罪に導くと可けませんから。只彼の人のため祈つて、貴嬢の愛の穢れないやうになさい。誘惑を遁れたいと想はれたのは、大手柄でした。悲しまないでも可い。泣くには當らぬ。救主は貴嬢を見棄られは仕ない。貴嬢の祈禱は聽かれます。悲しみの次には悦びが來ます」

彼得は恚う云つて、リシアの頭に手を按いて、眼を天に向けてリシアを祝福した。彼得の顔には神神しき光が輝いてゐる。

クリスプスは深く悔いた。謙遜つた心で、

「私は愛に逆つて悪い事をしました。此娘の心に地上の愛が入つて來たのを、捨ておくのは、基督に申譯がないと想ひましたので」

「私は三度基督を拒んだことがあります」と彼得が言つた。「それなのに基督は私を救して、羊を牧へと命ぜられましたでせう」

「それでもヅキニチウス殿は羅馬の貴族ですから」とクリスプスが言つた。

「基督は彼より一層頑固な心を柔げなされた事があります」と彼得が主張した。

タルソの保羅は今まで黙念として聽いてゐたが、自分の胸に指をさした。

「基督の僕等を迫害して、多くの人を殺したのは私です。メテパノが、石で打殺される時、殺す者の衣物の番をして居た者は私です。凡て人類の住んでゐる處から眞理を根拔

きにしやうと仕たのは私です。それなのに主は私を生れぬ前から選んで置いて、眞理の種を全世界に擴むるやうに命ぜられました。だから私は猶太でも、希臘でも、諸方の島々でも、又私が初めて来た時牢屋に入れられた此の神のあまさぬ都でも、眞理を宣傳へてゐるのです。今度私の先輩の役得が私を呼寄せたので、私は今此家へ来ました。そのヅキニクスといふ者の傲慢な頭を基督の足許に屈ましてやりませう。その礎地に種を播いて、主のために澤山な收穫を得たいものです」

保羅は眞直に起上つた。クリスプスは實際その瞬間この丈の低い駝背の人こそ、全世界を根底から震動して、諸の民、諸の國を征服してゐる巨人であるのだと覺つた。

六 靈魂の覺醒

ペトロニクスの書狀がヅキニクスの許に届いた。それはヅキニクスがわが身に起つた事を知らせてやつたその見舞狀である。例の滑稽な調子で、「御身は書中にジュリ

アス、シキザーを氣取り給ひし様に候。勿論シキザーの如く、我は來りぬ。我は見ぬ。我は打勝ちぬと云はば、語の簡潔いかに悦ばしく候へ共、我は來りぬ。我は見ぬ。我は遁れぬにては、餘りに可笑しく候はずや」などと認めてあつた。

ヅキニクスは返書を認めたくなかつた。ペトロニクスと自分との間には大きな溝が横たつてゐるやうに想はれる。ペトロニクスには到底自分の眞意は解らぬ。ヅキニクスは其後數日経つて、タイパーの河向から自分の別荘に還つて來たが、心は快々として樂しまぬ。身も魂も非常に疲れてゐる。ペトロニクスと談話をすることも嫌惡に感じた。これは生れて始めての經驗である。けれども返書を認るために四日経つて筆を執つた。

基督者の中にあつて親兄弟も及ばぬほど親切に待遇されたけれど、リシアは又ミリアムの家から姿を隠したことを憐れげに認めて筆を續けて慙う云つた。

先日小生はタルソの保羅といふ異常なる人物に出遇ひ候。その人は小生に基督とその教訓に就て語り申候。その談話には力あり、一言一句この世界を根底より轉變せんかと氣

遣はれ候。リシアの出奔の後その人は小生を訪れ候ふて申す様「神が君の眼に光明を與へられ、君の眼にある梁木を取ること恰も我になされし如くなし給ふ時には、君はリシアの出奔を正當なる事と想ふに至るべし。又その時には再びリシアに遇ふを得べし」と。小生は此語を聽いて、殆んど謎語に接する如く、その意を解せず、時には幾分解せらるゝ如きことも有之候。彼等は人道を愛すれども、我等の生活、我等の神々、我等の罪惡を憎惡せらるに候。リシアは小生をば此世に屬する人と想ひ、基督者の立場より罪ある者と考へし故、小生の許より遁れ去りしに候。貴下はリシアが小生を嫌惡せるため逃亡せるならんと思召すやも知れざれ共、實の所リシアは小生を慕ふて居るらし候。然るに何故リシアは小生の愛を避け候ひしや。斯く想ふと小生は羅馬の各區に奴隸を派遣致し、家毎に「リシアよ、還れ！」と叫ばしめて歩かせたき心勃然と湧來り候。

リシアは何故逃亡せるや、如何にしても解し難く候。小生はリシアが基督を禮拜するを禁ぜんとは想はざりしに候。否、小生は自ら小生の家の大廣間に神壇を築きて、基督を祭ら

んと想ひ居しに候。一體その神は如何なる災禍を小生に下すものに候ふや。小生は昔の神を全く信仰致し居らざる故に、その神を信ずるに至るやも計り難きにて候。基督者は虚言を吐す候。彼等が基督は復活せる故に神なりと申すは確實なるべく候。人間には到底出來ざる事なればにて候。タルソの保羅は羅馬の市民なれども本來は猶太人なる故に、昔の希布來の聖書には極めて熟通致し居り候。保羅は基督の降誕は千年前より預言者に依て預言せられし事なりと申し候。こは容易ならざる事實に候。保羅の言に據れば、世界には只獨りの神あるのみ、神の數多存在する如き事は不道理なりとのことに候。小生にも左様に想はれ候。セネカも同様の説なりと存じ候。セネカ以前の哲學者にも同説の人數多有之候はんか。基督も矢張同説なりし由にて候。基督は世界の罪惡を贖はんがため十字架に釘られ、而して死より復活せる由にて候。そは確實なるべく候。これに反對すべき道理を認めず候。小生は基督のために神壇を築くを躊躇不致候。基督は之を禮拜するのみならず、其の教を踏んで此世に生活するが肝要なる由にて候。

小生は全く彼等の言ふ所に隨はんと申し候ふても、彼等は小生の約束を信ぜず候。保羅は未だ信ず可らずと明言致候。小生はリシアを愛し、リシアの爲めならば何事をも拒むまじきには是非もなく候。勿論リシアの依頼とはいへ、ソクラテ山やヴェスヴァイアス山を双肩に擔ひ、或はトラシメネ湖を掌上に載せ、或は小生の黒き眼をリシア人の如く青色ならしむる事は不可能にて候。こは小生の力及ばざる事にて候。小生は哲學者にあらず、又愚者にあらず。こは貴下も御認め被下事と存候。併し小生は承知致候。基督の教世に行はるゝ時は、羅馬の支配は終るべき事をば。即ち羅馬は滅び、舊式の生活は止み、勝者と敗者、權勢と貧窮、主人と奴隸との區別失せ、政府は倒れ、皇帝も法律も社會の秩序も、悉皆空に歸すべく候。而してその代りに基督世界を統治し、前に見る能はざりし愛と、人間の本能、殊に羅馬人の本能に全く反せる親切を以て人心を支配するに至る可く候。左れど小生に取りては、羅馬の運命よりもリシアの身の上が一層大切にて候。全世界は滅亡するとも、リシアさへ小生の家に來らば可なりと存じ候。以上は余事にて候。實際基督

者は只口を以て成程と感服するも信用不致候。その教理を眞理なりと想はゞ、靈魂の中より他の物を追放せよと迫るにて候。こは小生に取りては困難の事に候。小生の本性には其教理に反抗する者有之候。口を以て其教を讚美し。日常生活するに當りて其の訓戒を守り如き事は爲すを得んと存じ候へ共、そは只戀のためにて候。リシアの爲めにて候。若しリシアの爲めに非ずんば、此教ほど嫌惡すべきものは他に有之まじく候。不思議と想はるは、タルソの保羅が小生の考樂を充分に悟り居る事にて候。彼得も亦存じ居り候。彼得と申すは、極めて質朴なる人にて生れは賤しき由に候へ共、基督者の中にて最も偉大なる人物にて候。基督の弟子にて候。この保羅と彼得が毎日如何なる事をなし居ると思召候や、あゝ此兩人は私のために祈禱せるにて候。恩寵とか申す賜物が小生に與へらるやうにと祈れるにて候。併し小生には奇妙なる不安と、リシアを獲んとする猛烈なる情の外何も御座なく候。

リシアが窃に出奔致したるは前記の如くに候へ共、リシアは姿を隠すに當りて、小生

―何處へ行く―

のために自ら木にて造れる十字架を遣し行を候。小生が目醒めし時、寢床の側にそれが有之候。小生はそれを只今小生の家の奥殿に保藏致置を候。奇妙なる事には、如何なる故か存ぜず候へ共、小生はその側に往く毎に恐怖と尊敬の情が湧き來るにて候。リシアが自ら造りしものかと想へば、それが懐しく候。而して又それがリシアと小生を分離せるかと想へば、甚だしく憎惡せらるゝにて候。時には此事件の根底に何か魔術の存するに有らずやと想ひ候。かの彼得が本來漁師にてありながら、アポロニウスよりも一層偉大なる人物なりとは不可解の事にて候。彼得は呪文を以てリシア、ボムボニア及び小生を惑はし居るかも計り難く候。

貴下は先の書翰にて小生の不安と幽鬱の嘆息を御承知に相成し事と存じ候。幽鬱なるは再びリシアを失ひたる故に候。不安なるは大いなる變化。小生に來りし故にて候。正直に白狀致候へば、此教理ほど小生の性質に反對せるものは御座なく候。左れど小生は最初此教理を聽きし時以來、今までの自己を是認する能はざるに至りしにて候。この魔術のた

めに候はんか。戀のために候はんか。昔の魔法使が微かに手を觸れしのみにて、人體を變化させし如く、小生は此教理に僅か觸れたるのみにて、小生の靈魂に一大變化を來せるにて候。こはリシアのためなる可く候。或はリシアの信奉せる奇妙なる教のためなる可く候。小生が基督者の許より家に還れる時、誰一人迎へに出でざりしに候。小生がベネベンチユムに往き居る如く想ひ居たるにて候。家は亂雜極まれるにて候。奴隸共は食堂にて酒宴を催せるにて候。小生の姿を見たる彼等は、恐怖に戰慄し、地に平伏して死を待てるにて候。小生が之を如何に處置せしと思召候や。小生は直ちに繩と鐵の棒を持ち來れと命じ候。然るに小生は突然耻かしくなりしにて候。貴下は信じ給ふや。奴隸も矢張人間なりとの思想小生の胸に浮びたるに候。

奴隸共は數日間、戦々競々とせるにて候。小生が刑罰を延べるは、何か殘刻なる刑罰を工夫するためと想ひたるにて候。左れど小生は刑罰を止めに致し候。如何なる故と思召候や。小生は罰する事能はざりしに候。

―靈魂の覺醒―

三日を経て小生は奴隷共を召集して、赦して遣はす故に、今後俺等の罪を償ふために忠實に働けと申渡し候。

奴隷共は歡喜に満ちたる眼を致し、一同跪き候。嘆聲を洩しつゝ、兩手を擴げて「主よ、父よ」と申すにて候。而して御耻かしき事に候へ共、小生は矢張感動せるにて候。その圖端小生はリシアの美はしき顔を見たる如き心地致し候。リシアは小生の斯る行爲を見て感謝に眼を濕せるにて候。小生も眼を濕ほし候。而して奴隷共は小生の赦免を受けたるために增長致す如き事無之候。却つて感謝の念に満ちて忠實に働くやうに相成候。こは驚くべき事に候はずや、小生が基督者の許を去る前日、保羅に向つて其教の結果として社會は縮なき桶の如く破壊するならんと申候ひしに、保羅は「愛は、恐怖よりも一層強固なる縮なり」と答へ候。保羅の言は眞實と存ぜられ候、小生はそれより奴隷共を憐れむ心を起したるにて候。親しく彼等と語を交へ候。彼等の妻子の事を尋ねて遣はすにて候。彼等は嬉し涙を流し候、而して小生はリシアが斯る行爲を實見致し候は、必ず悦んで賞讃する

ならんと存じ候。小生は狂氣と相成候にや、或は戀のために迷へるにて候や。自ら知る不能候。小生はリシアが遠方より小生を眺め居る如く常に感ずるにて候。リシアを苦悶せしむるは小生の忍びざる所にて候。

然り、叔父上よ、小生の靈魂は變化致し候。時にはそれを嬉しく存じ候、時には昔日の男らしき元氣を失へるを恐れて、心苦しく感ずるにて候。小生は既に元老院や、法廷や、饗宴に列することゝが不適當に相成候。戰場に往くことも不適當に相成候。疑ひなく何か奇妙なる魔術に懸れるにて候。若しリシアにしてポプピアとかクリスピラとか云ふ如き輕薄なる不義の女に候はば、小生は決して斯までリシアを愛するに不致る可く候。小生がリシアを愛するは我等兩人を分離するものなる故なるべく候。小生の靈魂の混亂せるは事實にて候。暗黒に包圍され居るにて候。小生の進路は全く見えす候。小生の將來は不確定にて候。小生の生涯を泉に譬れば、透明なる水の代りに不安の情が流れ居るにて候。小生は只リシアを見んことを望んで生存せるにて候。

小生の以上認めし所に妙に思召候はん。勿論奇妙に候。左れどこは確實にて候敬具。

七 深淵の離隔

ネロがベネンチユムから還るといふ風評が市中に擴まつた。やがて元老院に報知が來た。皇帝は途途諸處の市に立寄るとのことである。公衆の前で自作の歌を朗詠して十日も滞在する處もあるさうだ。ヅキニチウスは其間家に引籠つてゐた。リシアの事と新にその靈魂に入つて來た者とを冥想してゐた。グラウクスは時々訪問して來た。リシアに侍づく醫者かと想へば、グラウクスに遇ふことが嬉しい。けれども實はグラウクスもリシアの隱家を知らないのである。併しグラウクスはリシアが、長老等に保護されてゐることを斷言した。餘りにヅキニチウスが幽僻な状態であるのを氣の毒に想つて、ある日グラウクスはクリスプスがリシアの地上の愛を非難してゐる所を、使徒彼得に告められた

事を話して聽せた。それを聽いたヅキニチウスは、情緒紊れに亂れて、色若醒めた。幾度もリシアが自分に冷淡でない振舞を見たけれど、まだ其心が疑はしく不安に感じてゐた。今や初めて他人の口から、基督者の口から、俺が希望の確實なことを聽されたのである。感謝は胸は溢れて、彼得の評に走つて行きたいやうに想つた。けれども恰度この時彼得は都に居ない。田舎に傳道に行つてゐると聽いた、それ故ヅキニチウスは彼得が早く還られるやうにと、グラウクスに言傳を頼んだ。そして教會の貧者に施與物を約束した。リシアが自分を愛してゐることが事實ならば、有ゆる障礙物は取除かれたのである。恁う想つた圖端基督を禮拜したい心が湧然とヅキニチウスの胸に生じた。グラウクスは洗禮をお受けなさいと頻りにヅキニチウスに勧めた。けれどもさうすれば直ぐリシアを獲ることが出來るとは言はない。洗禮はヅキニチウスその人の爲めである。基督の爲めである。如何にリシアが聖淨無垢の少女なりとも、リシアの爲めに洗禮を受くべきでは無い。

「基督者の靈魂を持つことは人間に大切で御座います」とクリスプスは言つた。
「ガキニチウスは今まで尠しでも戀の邪魔をされると想ふと、忽ち憤怒を發したのであるが、今やガラウクスが基督者として憐れ言ふのは尤もだと想へて來た。不思議に見えること、奇妙に感ぜらるゝことに對して、ガキニチウスの心は余程慣れたのである。
タルソの保羅に面會したいと云ふ欲望は時々ガキニチウスのこゝろに浮んだ保羅の言葉は感興を起す、自分の心を動すのである。其教には反抗する。けれども保羅の人格には引着けられるのだ。併し保羅は此時羅馬に居らぬ。アリキウムに往つてゐた。傷も癒つてガラウクスの足が遠のくと、ガキニチウスは寂寞に耐へられなくなつた。リシアを遠くからでも可いから一目見たいといふ希望が起つた。ある日ガキニチウスはタイマーの河向の巻路をば處嫌はず彷彿つた。希望は達せられぬ。失望に心は疲れて短氣になる。本來の性情は、勢を盛返して押寄せた。満潮に乗じて高く擧る波濤のやうである。何等の目途もなく、獨り悲しむのは愚だと想はれて來た。ガキニチウスはリシアを忘れんと決心した

馳くともリシアならざる他の者より快樂を食はらんと想つた。盲目なる煩惱を燃して、人生の騷擾に身を投ぜんとした。人生その者が自分を欺いてゐるのだ。
冬の羅馬は寂然としてゐたが、皇帝の歸駕れる時が近づいたので、全市が活氣を帯びて來た。嚴肅なる歡迎準備は整つた。その内に春が來た。アルパン山の嶺を覆へる白雪は、亞非利加から吹き來る南風に溶初めた。葦花は庭の芝地に咲いた、公園にも街道にも漫歩きの男女の群が、織るが如くであつた。
ある日ガキニチウスは途上に群がる美々しき馬車の中に、一層目立つた壯麗な馬車が目に着いた。ペトロニウスの愛妾クリソテミスの馬車である。彼女はガキニチウスを認めて一緒に車に乗せた。そして徹夜の饗宴に連て行つた。ガキニチウスは家に連て來られたのを知らぬほど、大に飲んだ。けれどもクリソテミスがリシアの名を口にした時に、怒つて彼女の頭に酒を打かけたことを覺えてゐる。正氣になつて此事を思ひ出して、又怒つた。

翌日クリソテミスは侮辱されたことをも忘れて、ヅキニチウスの家に訪れた。又もやヅキニチウスを連出した。その夜二人は晩饗を共にした。クリソテミスはペトロニウスとの關係が絶えたので、今は自由の身ですと言った。二人はかくして一週間を送った。けれども間もなくヅキニチウスの心には、リシアの容姿が鮮明と浮んで来た。リシアを除けば世界は空虚であることを深く想った。肉の快樂は厭はしい。

ヅキニチウスの心は茫然とした。ネロが還つたと聞いても、何の感興も惹起さぬ。凡ての事索然として何の趣味もない。ペトロニウスを訪問する氣も起らぬ。その内に轎を以てペトロニウスから迎へが来た。

ヅキニチウスはペトロニウスを訪れた。初めは何を聴いても忌々返事をしてゐたが、聴て長く押着けてゐた思想感情は一時に堰を破つて滾々と唇から溢れ出た。彼はリシア搜索の一部始終を精細に話した。ペトロニウスは談話の間にヅキニチウスの變つた顔話しながら擴げる妙な手振に氣が付いた。聴て起立つて、ヅキニチウスの側に寄つて耳の

上の髪の毛に觸つて、

「やあ、お前の頭には白髪があるぞ」と言つた。

「さうですか、頭が全部白くなつても願んです。」

二人は黙した。ペトロニウスは思慮に富んだ人である。基督教の尊いことを直ぐ悟つた。その辯才を以ても、ヅキニチウスに即答することが出来ぬ。暫時口を閉ぢてゐたが、聴て、

「まあ魔術だな」と言つた。

「私もさう想つたことがあります。リシアも私は魔術に懸けられてるとしか想へんですもの」

「セピラの坊さんの處に往くと、そんな手品は幾等でもやつて見せる」と嘲弄的にペトロニウスが言つた。

ヅキニチウスは額を擦りながら答へた。

「魔術といへば、私は幾度も見た事があります。大抵の魔術は敵を苦しめる爲めに使うんでせう。處が基督者は貧乏に甘んじてゐる上に、敵を救すのです。謙遜と慈善を奨励します。魔術として何の利益もないのです。そんな得にならぬ魔術を何んの爲めに使ふでせう？」

ペトロニウスは頓智に巧妙であるに似合はず、適當な答が出来ぬ、間に合せて答へた。「新しい宗旨だな」と言つて暫く言ひ濁んで「お前は基督者のことを高潔だの、温順だのと讃めるが、なに矢張悪黨さ。人類の敵だよ。言はば、病氣だの、死だのと云ふ様なものと同じで、人の嫌悪がる宗旨さ。それはさうと、お前は氣を紛らすために、何ひ面白

い事をして見たか」

「見ました」とグヰニチウスは率直に言つた。
ペトロニウスは笑ひながら「この野郎、奴隷共が専ら評判してゐるぞ。クリソテミス盗んだらうが」

グヰニチウスは心に耻ぢて手を打振つた。

「それではお前に御禮を言はう。彼んな者は先に御拂ひ箱さ。私は二重にお前に御禮を言はればならんよ。先づ第一お前はユニケを盗んで行かなかつたな。それから第二にクリソテミスを取引つて呉れた。此世の中は面白いものだ。一番美しい酒を飲んで、何でも面白く暮すさ。手が利なく、唇が蒼くなつた後は、野となれ山となれさ。これがまあ私の一番新しい哲學だ」

「それは例もの定文句ではないですか。新しくもないです」
「處がその内容が出来たのだ。前には空虚だつたがな」

ペトロニウスはユニケを呼んだ。ユニケが現はれた。白衣を着けて、金色の髪を束れてゐる。ユニケは既に奴隷の身分を脱して、戀と快樂の女神である。

ペトロニウスは腕を擴げて「さあ」と叫んだ
ユニケはペトロニウスに飛付いた。膝に上る。腕をペトロニウスの頭に投懸けて、首を

その腕に擦り着けた。ユニケの頬は紅を浸した。眼は溶けさうである。げに戀と快樂の奇妙なる一對である。ペトロニウスはユニケを抱きながら、机に手を延して底の浅い壘を取つて、堇の香水をユニケの首、胸、衣物に振懸けてやる。それからユニケの肩を掴みながら、ザ井ニチウスに向つて言つた。

「幸福なものだらう。私のやうにこんな可愛らしい者に、憊うして取着かれてゐる者はなし。まあ私共は男神女神さ、此女を一寸と御覽。この奇麗なこと。温かな薇薔色の大理石さ
れい」

憊う云ひながら、ユニケの肩や頸に唇を接けた。ユニケはぶる／＼身を慄はして眼を閉る。又嬉しさに心が一杯であると云ふ面持で眼を開いた。ペトロニウスはユニケの首を擡げながら、ザ井ニチウスに言つた。

「まあ、考へて見なさい。あの陰氣な基督者とこれと比較が出来るか。その相違が解らなければ、基督者の方へ行くが可い、けれど此の光景を見たら、心が癒るだらうな」

ザ井ニチウスは室中に擴がる堇の香に鼻がふくれた。而は着くなつた、あゝリシアの肩に唇を接けることが出来たら、自分の歡喜は如何ばかりであらう？。世界は滅ぶとも、尠しも頓着する必要はない。ザ井ニチウスの思案は只リシアの事のみを走つた。

「ユニケ」とペトロニウスが言つた。「花冠を造らへてお出で。それから朝饗を美味しく喰せておくれ」

ユニケが室を去つた後で、ペトロニウスが言つた。

「彼女を自由の身に仕てやらうと云つてもな。彼女は「皇后さまになるよりも、貴下の奴隷である方が可い」と云つて、自由の身になることを嫌悪がるのだ。それだから私は彼女に知らせないで、自由にしてやつたやうな譯だ、私が死ぬ時は、寶石などは皆んな彼女に譲るつもりである」

ペトロニウスは憊う云ひながら、室の中をあちこち歩き廻つて、
「戀と云ふものは何でも變へるものさ。私も大に變つたよ。私は馬鞭草の香が好きだつ

だが、ユニケは葦が好きであるので、私も葦が好きになつた。春になつてからは葦の香ばかり嗅いでゐると云ふ譯さ」

ペトロニウスはヅキニチウスの前に立留つた。

「お前は甘松の香で甘んずるつもりかなあ」

「そんなことは止して下さい」と嘆願するやうにヅキニチウスが言つた。

「私はユニケをお前に見せびらかしたのさ。何も遠くに手を出すには及ぶまいぢやないか。近くに幾らもあるよ。お前の奴隷の中にも案外好い者があるだらう。リシアがお前を愛してゐる？愛してゐる證據に何を見せたのだ。なあ、おい。リシアはユニケのやうな譯に往かないよ」

「眞實私には戀は長いく苦痛です。貴下がユニケの肩に接吻されたのを、今見ました私もしリシアにそんな事が出来たらと思ひました。併しそんな事を考へると、なんだか聖潔な少女を汚すやうな氣がします。女神を犯すやうに考へて恐ろしくなりました。眞實にリ

シアはユニケのやうな譯には往きませせん。ユニケのやうな譯に往かぬ理由は恠うです。戀は貴下の鼻を變化させて、馬鞭草より葦が好きになつたと言はれました。私にはその變化が靈魂に來たのです。リシアが他の女のやうに甘へてくれるよりか、今のやうに遁げ廻つてゐる方が、何だか好ましいです」

ペトロニウスは肩を畏縮ながら、

「それなら、甚麽も仕方がない。私には解らん」

「あゝ、誠實にさうです、貴下と私とは最早御互に解することが出来ません」

八 快樂の夜

ネロが都に歸駕と間もなく、寵臣チゲルリヌスはアグリツパ池の側の森で饗應の宴を開いた。羅馬に於ける智者學者美人悉く一堂に集まつた。羅馬の年代記を繰り見てもこれほど盛大な宴會はない。チゲルリヌスは世界の各所に命令を發して、宴會の裝飾

のため、有ゆる嘉瑞麟鳳龜龍を蒐めさせた。この傲り狂へる計畫のために、各州の收入は全く消費せらるゝ有様であつた。チゲルリヌスの権力は隆々として擧る。他の廷臣は如何することも出来ぬ。ペトロニウスは修養に於て、知識に於て、才智に於て、チゲルリヌスに勝つてゐる。又その言葉は、皇帝を樂しましむるに足る。けれども不幸にもペトロニウスは、皇帝その人よりも勝れてゐるので、皇帝の嫉を受けてゐた。趣味の問題になると、皇帝はペトロニウスの説を恐れてゐる。然るにチゲルリヌスの方は、皇帝の自由になる。これがチゲルリヌスの勢力を張る所以であつた。

チゲルリヌスは鍍金してある角材で造らへた巨大な筏を、アグリツパ池に浮べた。筏の端は紅海や印度洋から採集した七色の介殻で飾つた。式場の八方には檜、蓮、薔薇が叢をなして繁つてゐる。その叢の中には香水を吐出す噴水が隠在してゐる。又神々の像が立つてゐる。金銀の籠の裡には美しい翼の種々の鳥が集められた。筏の側には金色の綱、紫色の繩を以て、魚の形、鵠の體などをした數多の小舟が繋がれた。

ネロが來た。ポプピアや廷臣を引連れて筏に乗る。天幕を張つた玉座に坐る。賓客も筏に乗り移つた。小舟には琵琶や縦琴を弾く美人が大勢乗る。水涯の建物からは樂の音や歌の聲が響いた。四隣から起る山彦は實に賑はしい。皇帝はポプピアと一緒に人の心を誘惑はす女神の假面を被つた年若な美人の群を見ながら、チゲルリヌスの趣向の巧妙を賞めた。この水上の饗宴は、ことの外、皇帝の氣に入つた。

婦人達の外に、食卓に着ける者は廷臣ばかりである。其中にヅキニチウスも居た。最も秀れて壯麗に見える。顔も容姿も殿めしく軍人らしかつたヅキニチウスは、今は苦惱と悲哀に憔悴してゐる。眼は大きく、悲し相である。けれどもその體軀には何處となく人を引ける力がある。婦人達は皆ヅキニチウスの方に眼を向けた。ポプピアや竈の女神に使ふる童女ルプリアすらも窃眼をした。

山の雪に冷された酒は、賓客の心と頭を熱した。水涯の林から蟋蟀形と蜻蛉形の新しい小舟が押出された。青々とした池の面は、花瓣や胡蝶を撒散したやうである。小舟の

上には、あちこちに印度、亞弗利加から送られた鴿や、その他の美しき小鳥が、銀色の糸、青い糸に繋れて飛んでゐる、日輪は既に蒼穹の大部分を過ぎ越して、將に没せんとしてゐる。時五月の初旬であるが、氣候は余程温かである。樂の音に合せて動く舟楫は、池の面を掻き亂した。風は勢しも無い。森の樹の葉も動かぬ。筏は池をぐる／＼廻つてゐる。筏の上の賓客は次第に酔が廻つて騒しくなつた。

饗宴は半ばに至らぬ先に全く無禮講になつた。ネロを初め威嚴を崩した。皇帝は椅子から立上つて、ヅキニチウスに近く寄れと言つた。そして童女ルプリアの耳に何か囁いた。ヅキニチウスはポピアの次に座つた。ポピアは腕を差出して、腕環の弛みを直して下さいとヅキニチウスに言つた。ヅキニチウスの手は慄へた。ポピアは長い睫毛の下から秋波にヅキニチウスを見やつた。

太陽は益々大きく紅くなつた。徐かに森の頂から沈んで行つた。賓客は大概酔が廻つた。汀に近く筏の來た時、道化役者が樹蔭から、花の中から顯はれた。農牧の神の如く、

腰から下は羊のやうな装をしてゐる。笛を吹く。銅鈸を鳴す。その周圍には牧場の女神などに假装つた美人が群がった。黄昏時になると、無数の燈火は森にも汀にも一面に點いて燦爛として眩しいほどである。水涯の建物は無数の燈火に晝よりも明るく壇上には、羅馬全市の家毎の美しと見える女は、人の妻でも娘でも凡て狩り出されて、隊を編つて嬉戯れてゐる。皆赤裸である。淫猥な身振をして賓客を招いた。聽て舟は岸に着いた。皇帝も廷臣も森の中に姿を隠した、皆散々になつて、淫猥な家即ち人工的に造られた樹の簇や、窟の中に隠された天幕の中に入り込んだ。

ありと有ゆる人は氣が狂つてゐる。皇帝が見えなくなつても誰も氣が付かぬ。元老も議員も勳爵士も音樂師も差別はない。男女の群は追かける、追廻す。燈火は故意と消された。森の中は大抵暗闇である。彼處にも此處にも、笑ふ聲、叫ぶ聲、囁く聲、喘ぐ聲がする。斯る狂態は羅馬に於ても未曾有な事であつた。

ヅキニチウスは酒を飲まなかつた。周圍に起れる光景を眺めて、初めは恥しく思つ

た。惑まどされた。やがて又快樂の熱病に襲おそはれた。森の中に潜ひそみ込んで、他の人と一緒に走つた。一番美しきうな女を索さがした。裸體美人の群は歌を唄うたひ叫さけびながら、ヅキニチウスの側を走つて行く。その跡を農牧の神の姿の道化役者や、元老や、勳爵士が追かける。樂器の音は諸處に響いた。聽やがてヅキニチウスはデアナの女神に假装いたつた女が先導してゐる少女の一隊に目をつけた。その前の方に飛んで行つた。デアナの女神に近づいて睥視みづめした。ヅキニチウスの狂へる心は靜まつた。髪毛を三日月に飾る女神が何處かりシアに似てゐるではないか。

少女の一隊はヅキニチウスを取巻いて嘶立はやしたてた。聽やがてヅキニチウスの追かけて來るのを待望まちのぞむが如く、羚羊の群のやうに遁にげて行く。ヅキニチウスは其處に衝立つたつた。胸は激しく動悸する。今のデアナはリシアで無ないことは確實である。側に寄つて見たら似てゐなかつた。けれども怖ろしい感じが湧いた。以前覺えなかつた程激烈に、リシアが戀しくなつた。戀の怒濤は胸に隆起たかつた。狂氣と醜猥の眞只中に於て感じたるリシアは

ど、懐しく清く可愛らしく見えたことには無い。一瞬前はこの猥雑醜陋なる群の中に入つて、煩惱の火焰を燃したのであるが、今や非常に嫌惡な感じがした。穴あらば入りたいやうに想ふ。新鮮な空氣が吸たくなる。醜猥の森に隠れた天の星が見たくなる。ヅキニチウスは飛か如く驅出かした。けれども將に身を動かさした時、覆面ふくめんの人が前に立現まはれた。ヅキニチウスの肩に手を載せる。熱い息を吹きかけながら呶さやく。女だ。

「貴郎が戀しいのよ。さあ、誰も見てをりませんから、急いで彼方に」
ヅキニチウスは夢から醒めたやうに、

「誰ですか」

その女はヅキニチウスに胸を押着けて繰返して言つた。

「急いで参りませう。二人限りですよ。貴郎が戀しいの、さあ」

「誰ですか」

「御判じ下さい」

—何處へ行く—

二六六

覆面の儘、唇をヅキニチウスの唇に接けた。息の塞るほど面と面と觸れたが、直ぐ面を引いて、

「戀の夜ですよ。無禮講ですよ。今夜は何でも許されてゐますでせう。さあ、私を御連れ下さい」

接吻はまたもヅキニチウスの唇に熱く押された。非常に厭惡な感じが歸つて来る。靈魂も心情も他處に行く。全世界にはリシアが存在してゐるのみだ。ヅキニチウスは覆面の女を押のけて叫んだ。

「どなたか知らんが、私には戀人があるんです。貴女に要はない」

女は首を垂れた。

「覆面を取つて御覽！」と嚴然として言つた。

その瞬間側の樹の葉がさら／＼と鳴つた。女は幻影の如く消えた。向ふの方に遁れて大きな聲で女は笑ふ。遽急しい聲であつた。

ペトロニウスが繁つた樹の間から現はれた。

「今の有様を見たよ、聞いたよ」と言つた。

「もう選りませう」とヅキニチウスが答へた。

ふたりは醜猥な森を後にして、轎に乗つた。

「御前の家に一緒に行かう」とペトロニウスが言つた。

途中二人は黙つてゐた。ヅキニチウス家の大廣間に着いた時、ペトロニウスは口を開いた。

「あれは誰だか知つてゐるか」

「ルプリアでせう？」とヅキニチウスは思出に身を慄はせて、疑はしげに言つた。

「いや」

「すると、誰でせう」

ペトロニウスは聲を潜めた。

—快樂の夜—

二六七

「ルプリアはな、皇帝と巫山戯てゐたよ。御前に言葉をかけた女は」と益々聲を潜めて「皇后さまさ」

寂然とする。ペトロニウスは言葉を續けて、

「皇帝はな、ルプリアに煩惱を燃して隠し切れなかつたのさ。それで彼女は捨鉢になつたのだ。併し私は妨げてやつた。皇后なことが解つて、御前が拒んで見る。御前もリシアも救からない。この俺も危ないからなあ。」

ヅキニチウスは憤激して言つた。

「羅馬だらうが、皇帝だらうが、饗宴だらうが、皇后だらうが、チゲルリヌスだらうが、何だ。私は息が塞るやうです。こんな状態で生活してゐる事は私には出来ん。眞平だ。貴下には私の胸が解りますか」

「御前は首を失くなさうとしてゐる。ヅキニチウス」

「ですが、リシアは私の愛する只つた一人の女です」

「それが、どうしたのだ」

「どうも仕ません。他の女なんて關係したくもないです。私はリシアの外には何も入りません。貴下も、貴下の饗應も、貴下の罪惡にも要はないです」

「なにをそんなに苦しむのだ。御前は基督者になつたのか」

青年は頷に腕を廻して失望したように、

「未だです。未だです」と言つた

九 誘 惑

ペトロニウスは肩を聳かして家に還つた。心は不快である。ヅキニチウスと相解せざるに至つたことを明かに悟つた。大きな深淵に二人は隔てられたのだ。けれどもペトロニウスが如何に羅馬の利己主義の代表者であつても、年若き同族を棄てることは出来ぬ。甚麼かしてリシアをヅキニチウスの手に復して遣りたいと腐心した。或日ペトロニウスは

皇帝がアンチウムに出立することを直接その口から聞いたので、早速グキニチウスを訪れた。グキニチウスは既に承知してゐた。扈從を許された人々の内に、自分の姓名も載つてゐたからである。けれどもアンチウムに往きたくない。ペトロニウスは若し往かないと何な咎を受けられるかも知れないと云ふ。グキニチウスは恐いとも想はぬ。リシアに遇ひたいと云ふことだけに思考を集注してゐる。何か手段はないものかと思つてゐる。

その翌朝思ひがけなく、チロを訪れて来た。

チロは疲憊れた状態で、弊衣を纏うてゐる。餓てゐるらしい。奴隸等は晝夜ともにチロの出入は自由に許してやれと命令されたことがあるので、チロの訪問を拒絶しなかつた。チロは直進ぐに大廣間に往つて、グキニチウスに挨拶した。

「御機嫌はいかがで御座いますか」

グキニチウスは初め希臘人を戸出に投出せと命じやうと想つた。不圖チロが何かリシアの事を知つてゐるかも知れんと考へて、憎惡の念に打勝つて、好奇心に驅られて聽いて

見た。

「お前か。此頃はどうした？」

「誠に、はや甚麼も。世も澆季になりますと、道徳と申すものは、何の報酬も獲られんものになります。眞正の哲學者は五日目／＼に屠羊者から羊の頭を貰つて、それを涙で洗つて嘔じる外仕方がございませぬ。旦那様。貴郎が下されたものは、皆な書物代にして頂きました。その上災難のために私はこんな零落致しました。けれど、まあ私が生命を差出して尊敬してゐます貴郎様の處に参りましたら……」

「何にしに來たんだ。何か知らせる事でも有るのか」

「御救けを受けに参りました。はい、この難澁してをります態と涙を御目にかけてながら、貴下のために調べました御報告を持つて参りました。私が何日か御話し致しました事を御記憶で御座いませう。旦那様。ペトロニウス閣下の奴隸に、パホスのグキナス神の帯の糸を一本持つて來てあげますと、その効能が忽ち現はれまして、そら、ユニケ様には貴い

お位置に上られました。私は此處にヅキナス神の帶の糸をもう一本持つてをります。此糸を貴下に差上げたいと存じまして」

チロは言葉を切つた。憤怒の情は勃然とヅキニチウスの顔に現はれた。チロは鬱勃たる暴雨を鎮めんと調子を變へて、

「えい、私はリシア様の御住居を存じてをります。旦那様、御住所をお知らせ致します、」
ヅキニチウスは情を和げて、「何處だ」

「リヌスと申します大變年を老つた基督者の坊様と御一緒に暮して御坐います。ウルヌスも其處に居ります。未だ水車場に通つてゐます。何と申しましたか。えい、デマスといふ人の水車場でした。ウルヌスの仕事は夜で御坐います。ですから暗くなつて、其家を御圍みになりますればウルヌスは居りません。リヌスは老人です。リヌスの外には、もつと年を老つた二人の女がをりますばかりです」
「甚麼して御前はそれを知つたか」

「貴下様は御記憶で御坐いませう。基督者が私を救いましたことを。グラウクスは自分の不幸が私のためと許り誤解してをりましたですが、それでも私を救けて呉れました。私は大いに感謝してをりますのです。基督者はその後甚麼してをりますかと尋ねる氣になりました。リシア様の事もそれで解りまして御座います。その御家は一軒家で御座います。ですから奴隷達に御圍ませになれば、鼠一匹遁げることは出来ません。なんと、旦那様、旦那様。あの美しい尊い王の姫様が今夜貴郎の御家にお出になるも、ならぬも御所存一つで御座います。若しさうなりましたら、この憐れな者を何卒御救け下さいまし。」
血はヅキニチウスの頭腦に上つた。誘惑は全身を慄ふ。然り好機逸すべからずである。リシアを一度この家に連れて來さへすれば、誰も再び奪ひ取る者はない。一度自分の妻となす上は、永遠に離しはせぬ。基督教を滅さしめよ、彼等基督者、其愛と幽靜なる信條を以て、この我になにを爲す事が出来やう。何故自分は他人の如く生活を仕ないのか。リシアは自分の信仰を以て、ヅキニチウスと和ぐことは困難だと想つてゐる。けれど其れ

が何か。只肝要な事はリシアが我が所有になる事である。今夜我が所有になることである。この新しき世界、煩惱の歡喜を味へば、リシアの信仰も支へ切れなくなるは必條である。而して今日こそ其の日である。チロを抑留して暮方に命令を發すれば、それで足りである。無限の歡喜は立所に來らんとしてゐる。

「俺が生涯はなにか」とザ井ニチウスは考へた。「暗惱として満されざる煩惱、應へなき疑問の無盡の提出に過ぎぬではないか」

今は此の苦悶を終決すべき機である。勿論一度リシアに對して手を擧ぐることは、決して仕ないと誓つた。けれども誰の名に依てそれを誓つたのか。神々の名ではない。神々は最早信ぜざる所である。基督の名に依てでもない。基督は未だ信ぜざる所である。要するにリシアを瀆したならば、結婚すれば差支へない。不正はそれで拭ひ去られるのだ。然りさう仕やう。リシアのためには自分の生命を差出してゐるではないか。

ザ井ニチウスはクロトと一緒にリシアを襲つたその日を思出した。ウルススが自分の頭に拳を振上げたこと、又その後起つた凡ての事を思出した。自分の寢台の上に屈めるリシアを思出した。奴隸の服裝をしてゐるが、女神の如く美しく、憐れみ深き崇高なる、あゝ其容姿。慙う思つたザ井ニチウスは知らず識らず奥殿の方に眼を向けてリシアの紀念の十字架を眺めた。リシアの徳に報ゆるために、再びリシアを襲撃すべきであるか、奴隸の如くりシアの髪を引つて、自分の寢床に連れ來るべきであるか。甚麼してそんな事が出來やう。自分はリシアを愛してゐるではないか。リシアの心高く想清きがためにリシアを愛してゐるではないか。

ザ井ニチウスは悟つた。我家にリシアを連れて來ることを以て満足すべきでは無い。腕力を以てリシアを引寄せらるは拙劣なことである。自分の愛はそれ以上を要する。リシアの同意。リシアの愛、リシアの靈魂を要するのである。リシアが自ら好んで我が家に來るならば我が家は祝福せられたのである。リシアの來る其の日よ、その瞬間よ、祝福はそこにある。否、わが生涯は即ち祝福の生涯となる。斯くして二人の幸福は海の如く、太陽

の如く、無盡藏である。然るに腕力でリシアを我が有にするは永久に幸福を滅することである。それと同時に生命をかけて尊び、生命をかけて愛する者を穢して、之を醜くすることである。

恚う考へたヅキニチウスは、慄然として恐れた。視線は想はずチロに向かつた。チロは後向になつて、弊衣に手を入れて身體を爬いてゐる。ヅキニチウスは言ひ盡されぬ厭な感じを起して、心はむらむらと、チロを穢き蟲か毒蛇のやうに足の下に踏つぶしたくなつた。心は直ぐ定まる。羅馬魂の激烈なる情に任せて用捨なく叫んだ。

「貴様の計謀は用ゐんぞ。併し貴様は報酬なしには還らんだらう。よし貴様を牢屋に入れて三百叩きにしてやる」。

チロは着くなつた。ヅキニチウスの立派な顔は嚴然として戯談とは想へぬ。チロは平伏した。切れ切れに呻いた。

「あゝ、神さま、神さま、何處に居られます。あゝ、神さま。私は年を老つて、餓えて難

澁して居ります。私は貴郎様のために骨を折りました。然るに貴郎様の御禮はそんなひどい……………」

「貴様が基督者にする御禮と恰度同じだ」とヅキニチウスが叫んだ。そして家従を呼んだ。チロはヅキニチウスの足許に平伏して、その足を掻抱き、土の如き顔色をして喘ぐ。

「旦那様！旦那様！私は老人でございます。五十にして下さい。三百でなく五十で充分です。百にして下さい。三百でなく、どうぞ、どうぞ」

ヅキニチウスは足を上げてチロを突飛した。そして眼を光して命令した。家従の後から二人の屈強な男が現はれて、チロの僅か残れる頭髪を捕えて、牢屋に引づつて行つた。

「基督のために」と廊架に出ながら希臘人が叫んだ。

ヅキニチウスは獨りになつた。心情は興奮した。散在つた考想を纏めやうとする。誘惑に

打勝つたので、思想は高まつてゐる。リシアのために不義の企畫を拒げ、その建築者を罰したと想へば實に愉快である。けれどもヅキニチウスは聽て又想ひ直した。リシアは自分がチロを罰したことを悦ぶであらうか。リシアの宗教は罪を赦すことを教へるのである。基督者は復讐する理由が充分にある悪人を赦したではないか。「基督のために」とチロの叫んだ聲が、聽てヅキニチウスの心情に鳴り響いた。チロは斯く叫んでウルススに生命を救はれたのである。ヅキニチウスは刑罰を中止させやうと決心した。

ヅキニチウスは家従を呼ばんとした。その途端家従は入つて來た。

「旦那様」と家従が言つた。「老人は氣絶しました。死ぬかも知れません。もつと笞打ませうか。」

「活を入れて此處に連れて來い」

家従は幕の後に見えなくなつた。容易くは蘇生らぬと見える。ヅキニチウスが待ち草臥れた頃、奴隸は希臘人を連れて來た。奴隸は去つた。

チロは眞着である、足からは血が流れて、敷物に垂れる。正氣にはなつてゐる、膝を折つて御辭儀をしながら、兩手を擡げて憐れみを乞ふた。

「有難う御座います、旦那様、御慈悲で救かりました」

「これや、犬！私の信仰する基督のために貴様を赦してやるのだ」

「旦那様、私は基督と貴下に仕へます」

「愚圖々々言はずに起きろ、これや、リシアの住んでゐる處に私を連れて往け」

チロは起上つた。足がふらふらとして立てぬ、色は益々蒼い。途切れ／＼に呻いた。

「旦那様、私は實際飢餓いのです。悦んで参りますとも。旦那様、けれど私は大變弱つてゐます。御家の犬の御餘りでも戴かして下さい、それから参りませう」

ヅキニチウスはチロに食物と金貨一片と衣服を與へるやうに命じた。チロは笞と餓に疲勞して、食物を喰ひたくも動くことが出來ぬ。再び笞打ればせぬかと心配した。チロは齒をがた／＼させながら、

「どうぞ身體が温まりますやうに、お酒を少々。さうしますれば希臘にでも参ります。」
チロは妙し元氣を恢復した。そしてヅキニチウスと一緒に出掛けた。道程は中々にあ
る。リシアは矢張タイバーの河向に住んでゐた。ミリアムの家から餘り遠くはない。チ
ロはヅキニチウスにリシアの家を示した。其家は一軒立の小さい家で、常春藤に蔽はれて
ゐた。

「此家で御坐います。旦那様」

「可し」とヅキニチウスが言つた。「もう還つても可い。だが言ふておく事がある、貴様は
私の用を務めたことを忘れる。又ミリアム、彼得、グラウクスが生きてゐることを忘れ
る。毎月俺の家にやつて来い。金貨を二片づつやるやうにデマスに言つておくから。萬
一此上基督者を探偵すると、笞で叩き殺すか、左もなければ、市の總督に引渡すからさう
思へ」

チロは首を低く垂れて、

「忘れます」と云つた。

ヅキニチウスが巷路の隅を廻つて見えなくなると、チロは兩手を擴げて、

「どんな事があつても、決して忘れはせんぞ」と叫んだ。恚う言つてチロは再び縮み上つた。

十 約 婚

ヅキニチウスは眞直にミリアムの家に往つた。門口でナザリウスに遇つた。ナザリウス
は吃驚した。ヅキニチウスは親しげに挨拶して、母の家に案内せよと言つた。

室にはミリアムの側に、彼得、グラウクス、クリスプス及びタルソの保羅がゐた。保羅
は近頃フレゲルレから還つたのである。ヅキニチウスが入つて来たので皆驚いた。

「私は貴君方の崇むる基督の名に依て御挨拶します」とヅキニチウスが言つた。

「基督の聖名に永久祝福あれ」と答へられた。

「私は貴君方の御恩を受けた者、友人として此處に参りました」

「私共も友人として御挨拶します」と彼得が言つた。「おかけなさい、お客様として。夕飯は御一緒にしませう」

「遠慮なく戴きませう、ですが先づお聞き下さい。マテロ殿、タルソの保羅殿、私を信用してお聴下さい。私はリシアさんの住居を知つてゐます。私は直ぐ向ふのリヌスの家の前から此處に参つたのです。皇帝は私にリシアさんを所有する権利を與へられた。私は奴隷を五百人許り持つてゐますから、リシアさんの住居を圍んで、リシアさんを連れて参ることも出来ません。だが私はそんな事を仕なかつたのです、又決して仕ません」

「然らば、基督の祝福に依て、貴郎の心は潔められませう」と彼得が言つた。

「有難う、もう少し聴いて下さい。私はリシアさんを慕つて苦しんで日を送つてゐますが、そんな亂暴な事は仕なかつたのです。私は此處に来る前に、確かにリシアさんを奪つて、武力に訴たへて保護することが出来たのです。だが貴君方の道徳と教理は私の靈魂を非常に變化させました。信じますと口でこそ言ひませんが、腕力を用ゆることが出来なくなり

ました。何故か知りませんが、實際さうです。私が此家に参りましたのは、リシアさんの父母の地位にある貴君方に御願ひに出たのです。どうぞ私の妻にリシアさんを下さい。私はリシアさんの基督を信することを許します。又その上私もこれから基督を學びます」

ヅキニチウスは首を擧げた。聲は正確である。けれども心情は動いてゐる。足は縞の外套の下で慄へてゐる。誰も答ふる者はない。一座は寂とした。ヅキニチウスは拒絶を豫想せる如く語を進めた。

「私は遂に妨礙のあることを知つてゐます。だが私は自分の眼の如くりシアさんを愛するのです。私は貴君方の敵ではない—貴君方の敵でも、基督の敵でもない—だから御信用になるやうに。心を打開いて話すのです。私は生命を賭して此事をしてゐるのです。私は確かな事實を言ひます。「洗禮を授けて下さい」と他の者なら言ふでせうが、私は光明を私に與へて下さいと云ふのです。私は基督の復活を信じます。死後の基督を見たいと云ふ確かな證據人が言ふのですから、疑ひはないでせう。又實際貴君方の宗教が徳と正義と愛を

教ふるもので、世間でいふやうな罪惡を教ふるものでない事が解りました。未だ全體としては貴君方の宗教が解らん所もありません。貴君方の行爲から悟つた所もあります。リシアさんから覺つた所もあります。貴君方と議論して覺つた所もあります。私は自分の心が變化したと斷言します。先頃までは鐵の鞭で臣僕共を治めたものですが、最早そんな事は出来ません。今までは慈悲と云ふことを知らなかつたですが、今はそれが解りました。先には快樂を好んだものですが、元夜は快樂が嫌惡になつて遁げ歸りました。嘗ては腕力を善いやうに思つてましたが、今はそれを悪いと知りました。私は自分ながら自分の心が解らなくなつて來たのです。私の靈魂は、饗宴にも、歌曲にも、銅鈸にも、花環にも、皇帝の朝廷にも、裸體美人にも、其他凡ての罪惡に反抗するのです。それからリシアさんが山の雪の如く清いと想へば、想ふほど慕はしくなります。リシアさんが其教に依てあんなに清いのだと想ふと、私は其教が懐しくなります。どうぞ其教を學びたいと想ふのです。併しまだ充分に教が解らんし、又教を實行することが出来るか甚麼か解らんも

のですから、又果して教が私の性質に適うかどうか知れんものですから、私は暗い牢屋に居るやうに心が定まらず、實に苦しいのです」

恚う云つてザネニチウスは額に苦痛の皺を寄せた。頬は輝いた。益々情熱は高まつて來る。

「私がどれほど愛のために、疑惑のために惱んでゐるか、解りませう。貴君方の宗教の裡に此人生も、人生の快樂も、幸福も、秩序も、政府も、羅馬の領地も受容れる餘地があると言はれますが、實際さうですか。甚麼いふ風になるのです。戀愛は罪ですか。快樂を経験するのは罪ですか。幸福を願ふのは罪ですか。貴君方は人類の敵ですか。基督者は悲惨なる事を欲するのでですか。私はリシアさんを慕ふ心を取去ればならんのですか。心理に對する貴君方の見解は甚麼ですか？貴君方の言語動作は清く澄める水のやうです。併し水の底には何が在るのです。私は極く眞面目です。どうぞ濃霧を拂つて下さい。私は恚う云はれた事があります。一希臘は智慧と美を生じた。羅馬は權力を生じた。けれどその

爲めに何が出来たか」と。ですから私に話して下さい。貴君方には何が出来ますか。信仰の扉の裡に光明があるなら、開けて見せて下さい」

「私共の生ずるものは愛です」と彼得が言った。

「假令諸の人の言葉や、天の使の語を話すことが出来ても、若し愛がなければ、鳴銅や響く鉦のやうなものです」とタルソの保羅が附言した。

老使徒は壯者の靈魂が、恰かも籠の鳥の如くに天空を見、日を仰いで羽叩きして飛ばんとするのを見て、大に憫れと想つた。ヅキニチウスに向つて兩手を擴げて言つた。

「門を叩く者は開かれます。主の恩寵は貴郎の上にある。故に私はあなたを祝福します。

あなたの靈魂、あなたの愛をば、世界の救主の聖名に依つて祝福します」

熱切の情に心紊れてゐるヅキニチウスは、彼得に飛び付いた。古來未曾有の不思議が起きた。近頃まで異邦人を禽獸視してゐた羅馬の貴族の青年は、年老いたるガリラア人の手を握つて、感謝して其唇に接吻したのである。

彼得は心より悦んだ。眞理の種は沃壤地に播れたのである。愛の網を以て靈魂を漁つたのである。神の使徒になされた崇拜の表象を見て、一座は皆悦んだ。聲を合せて叫んだ。

「いと高き所には榮光神にあれ！」

ヅキニチウスは輝ける面をして立上つた。

「解りました。貴君方の裡に幸福のある事が解りました。私は今大變幸福に感じたのです。その他の事も大低信じられます。ですが今皇帝はアンチウムに往かうと仕てゐます。私はその命令で御件をしなければなりません。命令を拒むと殺されます。だから私と一緒に往つて、私に眞理を教へて下さい。貴老は私よりも危険でないです。人が澤山に集るから、皇帝の廷臣にでも、眞理を傳へる機會が獲られます。アクテアは基督者だと云ふ評判があります。兵營の内にも基督者が澤山あるやうです。私は彼得殿、ノメシタナ門で跪いて、貴老に禮をした兵士を見ました。私はアンチウムに別荘があります。ですから其處で皇帝の側に居ながら、教を伺ふことが出来ます。ガラウクスが言ひまし

た。貴老は一つの靈魂を救ふためには世界の端までも旅をなさると、ですから貴老が猶太から此處まで来て人のために盡しておられますやうに私にも盡して下さい。さうして下さい。どうぞ私の靈魂を見ずで下さい」

この言葉に基督者は相談を初めた。基督の勝利を悦んだ。一つの靈魂を救ふために、世界の端にまで彷徨ひ行くことは事實である。主の死にたまひし以來、此一事を務むるのみだ。故にヅキニチウスの願望を拒む考へは毫もない。けれども彼得は當時大なる群衆の牧者である。故に往くことが出来ぬ。タルソの保羅は近頃アルキウム、フレゲルレから還つて来た許りで、これから東邦に旅立つて、諸の教會を訪づれて、新しき熱心を以て教會を鼓舞せんと仕てゐる。けれども自ら進んでヅキニチウスと一緒にアンチウムに往かうと言つた。保羅はアンチウムから便船を求めて希臘の海に乗出さんとするのだ。ヅキニチウスは彼得に同伴してもらへぬことを残念に想つたが、その代りに保羅が往くと云ふので、心から保羅に感謝した。總て老使徒に向つて最後の要求をした。

「リシアさんの住居は知つてありますから、獨りで往くことも出来ますが、貴老に御願ひした方が可いと想ひます。どうぞリシアさんに遇はして下さい。リシアさんの所に連れて往つて下さい。私はアンチウムに何れ程長く居るのか解りません。皇帝の側では誰も皆明日をも知れぬ生命です。ペトロニウスは其處に何か私に危険な事があると申すのです。どうぞ出立する前にリシアさんに遇はして下さい。どうぞ一目見せて下さい。私の今までの悪事を忘れて、私がつと善くなつたら、私を助けてくれるやうに、直接リシアさんに頼むことを許して下さい」

使徒彼得は快く笑つた。

「どうして、貴郎の正しい歡喜を拒みませう」と言つた。

ヅキニチウスは又低く身を屈めた。胸に溢るゝ洪水の如き嬉しさを抑ゆることが出来ぬ使徒は兩手でヅキニチウスの首を押へて、

「皇帝はそのやうに恐れなさらなくても可い。貴郎の髪の毛一筋でも損はれば仕ませんぞ」

彼得はリシアの許にミリアムを使ひに遣る。けれどもヰキニチウスの來て居ることを知らせるなど戒しめた。リシアの驚愕と喜悅を一層大いにせんためである。問もなく、ミリアムはリシアの手を引いて、庭園の樹の下まで來た。

ヰキニチウスはリシアに挨拶するため飛んで往かうとした。けれどもその愛らしき容姿を見て嬉しさに力が抜けた。息もせず立つてゐる。胸は激しく動悸する。漸く立つてゐる力があるのだ。初陣の節、波斯人の矢が頭の上を叩つて飛んで行つた時よりも、百倍も心が動く。

リシアは何心なく走つて來た。ヰキニチウスの姿に目が着くと、恰も根の生えたやうに不動の姿勢になつた。面は赤くなる、蒼くなる。愕いて四方を見廻した。

誰の顔を見ても親切に輝いた眼をしてゐる。彼得は側に歩いて來た。

「リシアよ、貴嬢は今でも此方を愛してゐますか」

寂とする。リシアの唇は子供が泣出さんとする時の如く震へた。その心には戀愛の罪

を恐れてゐる。けれどもそれを告白しない譯には行かぬ。

「答へなさい」と使徒が促した。

聽てリシアは謙遜と恐怖の態にて、彼得の足許に平伏して囁いた。

「愛してをります」

ヰキニチウスは同時にリシアの側に跪いた。彼得は二人の首に手を按いて、

「主に於て相互に愛せよ。爾曹の愛の裡には、罪あらざる故に、主の榮光のために互に相愛せよ」と祝福した。

十一 樂園

庭園を歩きながらヰキニチウスは、先きに使徒へ告白したと同様な熱烈な言葉をリシアに打ち明けた。自分の靈魂の不安、其の會ふた變化、ミリアムの家を去つた以來、無限の欲求に驅立てられたことを語つた。リシアを忘れやうと仕たが、出来なかつたこと、盡

も夜もリシアの事のみ考へたこと、紀念の十字架が絶えず思出の種になつたこと、今まで爲した悪業は皆愛に根ざしてあることを告げた。今恚うしてリシアの側に居るのは實に幸福であること、最早ミリアムの家から逃げたやうに身を隠しなさらんでせうと質れた。

「私は貴郎から逃げは致しません」とリシアが言つた。

「それなら甚麼して私を見棄てなすつたですか」

リシアは青い眼をあげてグキニチウスを見た。聽て面を赤めて下を向いて、

「御承知でせう」と叫いた。

餘りの嬉しさにグキニチウスは黙した。聽てグキニチウスはリシアがボムボニアの外凡ての羅馬の婦人から全く異なつてゐる事實を次第に認めるやうになつた事を説明しやうと仕た。けれども充分に言ふことが出来ない。リシアに依つて初めて新しい妙な美の世界に入つたこと、美は單に形體のものでなく、實は靈魂にあることを悟つたと言はうとしたが口に出ない。グキニチウスは充分にリシアを幸福にしますと言つた。リシアが自分か

ら遁れたために、尙更リシアを愛するに至つたこと、リシアを崇めて己が家の首石としますと言つた。グキニチウスはリシアの手を握つた。人生の歡樂は只リシアに在ることを發見せる如く恍惚としてリシアを凝視めたグキニチウスは再びリシアを見出せることリシアの側に居ることを確實めんとする如く、リシアの名を繰返した。

「あゝリシアさん！リシアさん！」

グキニチウスはリシアの今までの心情を質れた、リシアはアウルスの家で初めて遇つた時から、グキニチウスを愛したことを告白した。若し自分が御殿に連れ戻される様なことがあつても、尙グキニチウスを愛したであらう。而して基督者の憤怒を柔げるつもりでありましたと言つた。

「私は誓つて申します」とグキニチウスが言つた。「私はアウルスの家から貴嬢を連出さうとは想はなかつたです。私が初めから貴嬢を愛して結婚したいと想つてましたことは、ベトロニウスが何時か貴嬢に證明することがありませう。私はベトロニウスに貴嬢を私の

爐の側に坐らせたいと言つたのですが、ペトロニウスは私を笑つて、皇帝に言上して貴嬢を人質に取つて私にくれるやうに仕て了つたのです。私は幾度もペトロニウスを呪ひました。けれども今になつて想へば、それが幸福になつたのです。左もなくば基督者を知らずに濟んだのでせう。眞正に貴嬢を理解することが出来なかつたのでせう」

「眞正を申しますれば、マアクスさま」とリシアが言つた。「貴郎を基督に御導びきなされましたのは、基督御自身で御坐います」

ヅキニチウスは驚いて首を擧げた。

「實際さうです」とヅキニチウスは確乎と、「貴嬢を捜すために、私は基督者に出會つたのですが、皆不思議な事許りです。オストラニウムで私は使徒の談話を雷の鳴るやうに驚いて聴きました。以前あんな言葉を聴いたことがなかつたのです。貴嬢は私のために祈つてをつて下さいましたッ」

「はい、祈つてをりました」

二人は常春藤に蔽はれた園亭を通つて、ウルススがクロトを絞殺し、ヅキニチウスが撃つて掛つた場所に近付いた。

「貴嬢が居らなければ、私は此處で危なかつたのですれ」とヅキニチウスが言つた。

「御忘れあそばせね、ウルススにそんな事を思出させては可けませんから」

「貴嬢を保護したウルススをどうして罰することが出来ませう。ウルススが奴隸なら早速自由の身にします」

「ウルススが奴隸でありましたら、お父さまのお家で、もうとうに自由の身になつてをります」

「貴嬢は覺へておいでですか」とヅキニチウスが續けた。「私が貴嬢をアウルス殿の家に復さうとしますと、貴嬢は若しや皇帝がアウルス殿の家の者を罰すると大變ですと言はれたことを、ですが今こそ幾度でもアウルス殿の家の者に遇へますよ」

「どうしてですか、マアクスさま」

—何處へ行く—

三二六

「それは、貴嬢と私と一緒になつた曉には、アウルス殿の家の者に遇ふのに、心配はいりません。若し皇帝が何か云へば、あれ私の妻です。私が命令けたので、アウルスの家を訪れたのですと言ふつもりです。皇帝がアンチウムに滞在する間は短いのでせう。アケヤの方に往かうとしてゐますから。だが未だアンチウムに居るでせう。私は毎日皇帝に拜謁しないでも可いです。タルソの保羅から一通り教を聞いた後で、私は洗禮を受けるつもりです。それから此處に還つて、アウルス殿の一家と親しく仕ませう。さうすれば何も妨礙はない譯です。私の爐の側へ貴嬢に座つて戴くことが出来ます。れい可愛らしい方！可愛らしい方！」

ザキニチウスは恰も神を愛の證人とするやうに手を高く天に擧げた。リシアは輝く眼を擧げてザキニチウスを見て、

「その時が参りますれば、貴郎に随ひます」と囁いた。

「いや、リシアさん、私は誓つて申します。如何なる女でも、私が貴嬢を尊敬するやうに

夫の家で尊敬される者はありませんよ」

二人は黙つて歩いた。充分にその幸福を實現することが出来ないやうな想ひがする。春の女神が花の世界に二人を運び去つたやうに、深き懐しき妹脊の情緒を生じた。

聽て二人は長屋の門前にある楓の樹の下に立つた、リシアはその幹に憑かゝる。ザキ

ニチウスは震へる聲で、

「ウルスをアウルス殿の家に遣つて下さい。貴嬢の所有品と貴嬢の子供の時の玩具を持つて來ますやうに」

リシアは薔薇の如く、又は味爽の空の如く蔽くなつて、

「習慣に反きますやうでございませぬ」と言つた。

「それは知つてゐます。さういふ物は嫁入の時、お母さんが持つて往かせないのが習慣でせう。でも貴嬢はなすつても可いのです。私は貴嬢の玩具をアンチウムの別荘に持つて往つて、思ひ出の種にします。

—樂園—

三二七

憊う云つてヅキニチウスは手を叩いた。子供が何か強請やうな調子で、
「ボムボニアさんは、もう還られますよ。ねい、さう仕なさい。さう仕なさい。好い娘で
すから」

「お母さまは御自分の想ひ通りにあそばします」とリシアは花嫁の仕度を言はれたので
益々赧くなつた。

二人は再び口を緘ぢた。二人の間に通ふ愛は語に現すことが出来ぬ。リシアは尙楓
樹に憑かゝつてゐる。面は蒼白い。眼を下に向けてゐる。胸は忙しく波打つた。ヅキニチウ
スも顔色が變つた。益々蒼くなる。晝間ではあるが、四方は静寂としてゐる。二人の胸
の鼓動も聴くことが出来る。心は恍然として無窮に流れる。楓も椿も常春藤も凡て靈
化されて、こは愛の樂園でないかと想はれた。ミリアムは門口に立つて晝の御飯ですと叫
んだ。二人は我に還る。やがて二人は使徒の側に座つた。彼得は樂しげに二人を睥視めた。
この二人こそ、自分等の死後新しき宗教の種を益々廣く傳播する青年男女の代表者

であると思つた。彼得は麴麵を割いて二人を祝福した。平和は一同の顔に輝いた。大
いなる幸福は室内に清香を放つた。

「どうです」と保羅がヅキニチウスに言つた。「これでも基督者は愛と歡樂の敵ですか
どうです」

「初めて眞理が解りました。私は貴君方と憊うして一緒に居るよりも幸福な事は、決して
なかつたです」と羅馬の貴族の青年が答へた。

十二 婚約祝ひ

其日は暮れて、ヅキニチウスは家に還つた。その途中ツクス區の入口で、ペトロニウ
スの鍍金した轎を八人の奴隸が擔つて行くのに出會つた。ヅキニチウスは轎を呼留めて、
帷幕に近付いた。ペトロニウスの睡つてゐるのを見て、
「面白い夢を見てゐられるな」と言つた。

「あゝ、お前か」とペトロニウスは目を醒して「ほんとは、假睡してゐた、昨夜御殿で徹夜をしたものだから、睡い。私はアンチウムに往つて讀む物を買ひに來たのだつけ。どうだ、變つた事はないか」

「本屋に往つたのですか」とヅキニチウスが尋ねた。

「さうだ、私は圖書室を亂雑にしたくないから、旅には何か別に買つて往かうと思つたのだ。ムソニウスかセネカの新刊物が出た筈だ。それからペルシウスの著書を買ふと思つたのだ。今は手許にないバーツルの『エクロクス』も買いたかつたのだ。あゝ疲れた。余り書物にいじり過ぎたのである。誰も本屋に往くと好奇心に驅られて、あれこれと搜したものだ。私はアヴェヌスやアトラクタスの店に往つて來たよ、あゝ睡い。睡い」

「貴下は御殿に御出でなされたのですか。それなら何か新聞を伺ひませう。書物は奴隸に持して轎は御返しなされ。さうして私の家に御出で下さい。アンチウムの事や、其他種々話しがありますから」

「さうか」とペトロニウスは轎から出で立つて「明後日にアンチウムに出かければならんぞ」

「さうですか」

「お前は何を仕てゐたのだ。先づ私からお前に知らせるがな。さうだ、明後日の朝出立の用意をしなさい。實の所、赤髯は疔癩を起してゐるのだ。羅馬を呪つてゐる。羅馬の空氣が嫌惡だと云ふのだ。皇帝は悦んで羅馬を破壊するだらう。焼くかも知れない。皇帝は出來るだけ早く海の側に往きたがつてゐる。狭苦しい巷路から吹いて來る風で、墓場に往きさうだと言ふのだ」

「するとアケヤにでも往かうとするのですね」

「だがな、皇帝には只た一つの才智しかないのだからな」とペトロニウスが笑つた「オリムピアの大祭にでも出て、トロイの火事の歌でも謠ひたいのだからなあ、歌ふ所か躍りたいのさ。而して月桂冠を皆んな自分の手に獲たいのだよ。あの猿が疔癩を起した譯

は、昨日舞踏者のパリスの躍つてゐるのが羨ましくなつて、自分もレダの冒險を躍つたのさ、それで餘り汗を出したものだから、風邪を引いたのだ。まあ、あの赤髯がレダになつたり。神の嶋になつた所を想像して見い。大きな腹をして細い足で、實際嶋さね。これから公衆の前で躍ると云ふのだよ。先づ第一にアンチウムで躍つて、それから羅馬で「誰でもあの歌には弱つてゐますよ、羅馬では困るでせう」

「いやなに、羅馬では困りはせんよ。元老院では此國父に對する頌徳表を發するさ」

「なにが、もつと悪い事はないですか」とヅキニチウスが言つた

ペトロニウスは肩を縮めた。「お前は家の中に閉籠つて、リシアと基督者の事ばかり考えてゐたのだらう。だから二日前に起つた事を知らんのだ。ネロは公然ピタゴラスと結婚したよ。ネロは新郎さ。まあ狂氣の沙汰だ。僧正達は招かれて嚴肅な儀式があつたのさ、私も列席した。だが熟々思つた。神神と云ふ者が眞に在るなら、さぞ嘆息を吐くだらうと。皇帝は神々を信じてゐないから可いやうなもの」

「なに、皇帝は自分一人で高僧になつたり、神さまになつたり、無神論者になつたりするのでせう」

ペトロニウスは笑つた。「ほんとに、其處までは氣が付かなかつた。そんなに一人で兼ねるとは、まあ此世の中には類なしだなあ」

二人はヅキニチウスの家に入つた。ヅキニチウスは晚餐を命じておいて、ペトロニウスに向つて、

「どうしても、此世は改造しなければなりませんよ」と言つた。

「我々の時代には、まあ、改造は出来んよ。ネロ時代の人間は全然蝶々だ。日光を浴びて欣欣然と飛んでゐるが、一度冷たい息を吹かけられると直ぐ倒れるさ。實に蟬蛸のやうな生命だ。今まで幾らその例があるか知れんよ。だが仕方がない。轡をやつてユニクを呼んで呉れんか。晚餐の時に琴でも弾かさう。それからアンチウムのことでも話さうではないか」

ヅキニチウスはユニクに使者を送つた。けれどもアンチウムの事などに頭腦を煩はした

くない。

「皇帝の恩寵を日光と心得て生きてゐる連中は、そんな事に煩はされるが可いです。此世は御殿だけでは終りませんよ」

ヅキニチウスが極く冷淡に恚ふ言ふので、ペトロニチウスは驚いた。熱々ヅキニチウスを凝視めて、

「何かあつたのか。今日御前は金の垂飾でも頸に着けてゐる人のやうだな」

「私は幸福です」とヅキニチウスが言つた。「それを話さうと思つて来ていたよいたのです」

「なにかあつたのか」

「羅馬帝國と収換へるのも嫌悪な事が」

ヅキニチウスは座つた。椅子の背に片腕を投げて、首を片腕に懸せかけて、笑ましげに輝く眼をして語つた。

「御記憶でせう。アウルス、アラウチウスの家に御一緒に往つて、初めて聖淨なる少女を見ましたね。貴下が曉の明星。春の女神と御言ひなすつたでせう」

ペトロニチウスは青年の顔を凝視めた。頓智も何處かに往つて了つた。驚いて言葉も出なかつたが、漸く尋ねた。

「どんな事になつたのだ。勿論私はリシアを覚えてゐる」

「私はリシアと許嫁になりました」とヅキニチウスが言つた。

「え？」

ヅキニチウスは起上つて家従を呼んだ。

「奴隷共を誰も彼も皆んな呼んで来い。急いで」

「リシアと許嫁になつた？」とペトロニチウスが繰返した。

ペトロニチウスが茫乎してゐる間に、大廣間は男女の群を以て充滿した。よぼくした老人も、中年の男女も、少年少女も一緒に來た。前に出やうと推合つた。種々の國

言葉で喋舌つてゐる、聽て壁の所に圓形に列を造つて並んだ。ヅ井ニチウスは噴水の側に立つて、家従のデマスに命令を下した。

「此家に二十年務めた者は、明日司法官の許に往くが可い。自由の身にしてやる。まだそれだけ長く務めない者には金貨を三枚づゝ與へる。又別莊の方に使者をやつて牢屋にゐる者を皆赦してやれ。今日は私の祝日だ。家に居る者は皆んな悦んで呉れ」

奴隸共は愕然として黙つてゐた。自分の耳を信ずることが出来ぬ。聽て感激して一同手を擧げて泣出した。

「あゝ、旦那様、あゝ、あゝ、あゝ」

ヅ井ニチウスは手を振つた。奴隸共は其の足許に平伏して感激しやうとしたが、この合圖に忙いで室を去つた。喜悅の聲は土臺から天井にまで充ち溢れた。

「明日」とヅ井ニチウスが言つた。「私は庭園に奴隸共を集めて、地に何でも描きたいものを描かせて見やう。魚を描いた者は、リシアからして自由を受くるやうに仕てやらう」

物事に餘り頓着しないペトロニウスも、今は質れざるを得ない。

「魚！あゝ、そうだ、チロが言つたな、魚は基督者の表象だと」

冷かに云つて、ヅ井ニチウスに向つて手を擴げて、

「幸福は何處にでもあるものだ。まあ幸福に暮すが可い」

「有難う、私は貴方が不賛成かと、實は心配してゐました」

「不賛成？どうして、いや、私はお前が善い事を仕たと想ふのだ」

「それは、どうも」とヅ井ニチウスは悦んで、「貴下はボムボニアの家から歸路に何んと仰つたか」

ペトロニウスは冷やかに、「何んと云つたか忘れた。だが私は説を變へた。まあ、見、羅馬では何でも變るではないか。夫は妻を變へる。妻は夫を變へる。だから私も説を變へたのさ。お前、アンチウムに往つたら、ポプピアに用心しなさい、復讐を用捨せぬ女だ」

「何が恐いのです。アンチウムでは私の髪の毛一本損はることはないです」

「また私を驚かすつもりか。だが、さう思ふのは間違ひさ、どうしてさう斷言が出来るか」

「使徒彼得がさう斷言しました」

「はあ、使徒が斷言した。それなら疑惑はなからう。だがな、その斷言が間違うと、彼得はお前に信用をなくす譯だ。だから使徒でも間違うことがあると想つたが可い」

「それは、さうですが、私は彼得を信じます。貴下がさう想ひなさるのが間違ひです」

「さうか、もう一つ質れるが、お前は基督者になつたのか」

「未だです。でもタルソの保羅が私と一緒に往つて、基督の教訓を説明して呉れることになつてあるのです。それから私は洗禮を受けます。貴下は、此教は人生と幸福の敵だと言はれましたが。私はさう想ひません」

「それはお前のためにも、リツアのためにも善いだらう」とペトロニウスは肩を縮めて、獨語のやうに、

「實に妙だ、あの者共が改宗者を造るに機敏なこと、あの宗派は非常に擴まつて來たのだ」

「さうです」とヅ井ニチウスは既に洗禮を受けたやうに熱心な調子で「羅馬にも、其他伊太利の諸市にも、希臘にも、亞細亞にも到る處に基督者は幾千幾萬と云ふ程あるのです、軍隊の中にも、兵營の中にも、皇帝の宮殿にも、何處にでもあります。奴隸も市民も此教を奉じてゐるし、貧乏人も富有者も平民も貴族も皆信じてゐます、ボムポニア、グレシナも基督者なら、アクテアもさうです、實に世界に打勝つものは、基督教です、世界を改造することの出来るのは、只此教ばかりです、そんなに、貴下は肩を縮めないでも可いでせう、一月か、一年の中には貴下も此教を信するやうにならんとも限りませんよ」

「私」とペトロニウスが言つた。「いや、私はならん、其教は神々しい眞理と知慧があるとしても、私はならん。その教は窮窟に違ひない。窮窟なことは私は好かん。克己も可いがね。人生に缺くべからざる事を拒むのは私に出來ん、お前のやうな性質、恰度煮え

立つた湯のやうに沸騰するお前には、そんな事が出来やうが、私には珍らしい財寶のユニケがあるからなあ」

憊う云つてペトロニウスは小聲で、歌を唄ひ出した、其内にユニケが来る、晩餐が始まつた、音楽師は縦琴の調を合せ始めた、

十三 帝王と偉人

皇帝がアンチウムに往く途で、近頃アレキサンドリアから小麥を積んで来た世界の最大船を觀覽するために、オスチウムに立寄るといふことは羅馬に知渡つた。オスチウムから海濱を傳はつて、アンチウムに往くのである、命令は既に下つた。オスチア門には早味から多くの群衆が集つて来る。羅馬の市民は勿論、世界各州の人々は皇帝の行幸を見るために集つた、

その日の黎明である、カムパニアの牧羊者は山羊の皮を足に纏つて、日に焼けた顔をし

て五百の牝驃馬を援いて門から出て往つた、それはポアピアがアンチウムに行つて、其乳で、朝の沐浴をするためである。群衆は雲の塵埃を蹴立て、来る。驃馬の長い耳を見たり鞭の音と牧羊者の粗暴な叫び聲を聴いたりして、非常に面白がつてゐる、牝驃馬が通り過ぎると、童が大勢走り出て、路を奇麗に掃除をして、花と松葉を路に撒散した、群衆は離立てる。四方の花園の花は皆撈ぎ取られて、アンチウムに行く路は全く花で蔽はれるだらうなどと自慢げに風評をしてゐる。日が登ると群衆は益々殖える、家族擧つて出掛けた者も尠なくない、待つてゐる間の樂みに、用意の包物を擴げる者もある、幸にセレスの神殿を新築するために運んで來られた石材が其處一面に措いてあるので、其石の上で喰てゐる。群衆は彼處からも此處からも集つた、其中で旅行家は皇帝の過去の行幸の事、現在の行幸、又一般に旅行の事などを周圍の人に話してゐた、水夫や老兵は外國の陣營になつた頃の奇體な譚をしてゐる、アピアの路の先には足を踏出した事のない町の人々は、印度、亞刺比亞、英國などの不思議な譚を口を開いて聴いてゐる。虚誕誇張

な譚も無教育な者には其儘信ぜられる、群衆は又皇帝の御覽になる大船の事を語つた。その大船は二年間も使へる程の穀物を持つて来たこと、其他四百人の旅客と、同数の水夫と、夏期の演技に犠牲となる野獸を澤山載せて来たことを語る、恁んな話で皇帝に向つて一般に好意を生じた、皇帝は人民を養ふのみならず、人民に娛樂を供されるのである。感謝の想ひに一同熱切なる挨拶を仕やうものと、皇帝の行幸を待構へてゐる。一隊の騎兵が先づ現はれた、黄色い軍服を着てゐる、腰の帯は深紅である、耳には大きな環を填てゐる、その耳環は日に焼けた黒い顔に影じて、金色に光つてゐる、槍の突は焔の如く輝いてゐる。この騎兵の次には華麗な行列が来る。群衆は熱く見やうと前に推出した。けれども歩兵の一隊が門の所からして路の兩側に列んで立つてゐる。紫、紅、堇、白色などの幕を張つた貨車にて、酒樽や果實の箱が運搬される、貨車で壊れさうな物は、奴隷が徒歩で擔いで行く。コリント製の青銅の器や、小さな彫像を擔ぶ奴隷が二三百人ある。奴隷の一組はエトラスカや希臘製の瓶、他の一組は金銀の器、アレキサンドリア製の

水晶の盃を運んで行く。組と組との間には兵士が一小隊づゝ挟まつてゐる。組頭は鉛や鐵入の鞭を持つて奴隷を管督して往く。その次は皇帝と廷臣の使う樂器である。縦琴、希臘琵琶、琴、喇叭、銅鈸、其他種々の樂器が運搬される。その次には髻を生して、赤や茶色の髪をした青い眼の嚴めしき軍人の一隊が来る、眞正面に羅馬の鷲の像を運んでゐる。それから獨乙や羅馬の神の像、最後に皇帝の像と半身像を運んだ。この軍人等の鎧の下から日に焼けた武器も跳ね返りさうな、筋骨違ましき腕や肩が見える。その重々しき歩調に地響きがする。權力を漫じて傲然たる態度である。若し必要ならば、皇帝にも刃を向けかねまじき勢を示してゐる。群衆を睥睨して進んで行く。その後を獅子と虎が歩いて行く、亞刺比亞人と印度人が銅鐵の鎖でこの野獸を曳く。その鎖は花に包まれてゐるため、野獸は花環で引かれて行くやうである。熱練な人達に飼馴されてゐるので、野獸は綠色な睡さうな眼で群衆を見廻した。絶えずその大きな首をあげて、鼻を蠢かして周圍の人の香を嗅いだ。

その次に皇帝の兵車と轎が来る。大きなもの、小さなもの、金色なもの、紫色なもの、象牙眞珠を鑲めたもの、寶石に燦爛たるものもある。次に伊太利の義勇兵の一隊が羅馬風の鎧を着て来る。其後を華美な衣裳の召使や侍童が大勢来た。聴て、皇帝が来た。その近づいてくることは、遠方から擧げられる群衆の叫び聲で傳達される。

群衆の中に使徒彼得がある、生涯に一度皇帝その人を見たいと想つたのだ、彼得はリシアを同伴してゐる。リシアは厚く覆面してゐる、その側にはウルススがある。この雑沓せる亂秩序な群衆の中でも、ウルススの力は充分に浦若さ少女を保護することが出来るのだ。ウルススは神殿建築用の石材を取つて使徒の所に運んで来た、其石に登つたので、他の者よりは能く見える。

群衆は最初ウルススの其石を推出するのが、波を衝切つて船が進むやうに容易いを見えて、石の大きさは、屈強な力士四人でも持上げることの出来ぬほどである、囁き

は吃驚の叫びと變つた、

「あれ！あれ！」と八方から呼應する、けれども今や皇帝の容姿が見えた、皇帝は天幕を張つた兵車に乗つてゐる、金の鞋を穿いた六匹の白馬が玉駕を曳いて行く。天幕の兩側は故意と群衆に見えるやうに明けてある。陪乗すべき餘地があつても、ネロは衆目を俺が一身に集めるために、誰も乗せぬ。只二人の醜い珠儒が足下に蹲踞つてゐる計りである。皇帝は白の肌着を着て、紫水晶色の寛衣を其上に纏ふてゐる。其色は反射して薄藍に面を染めてゐる、月桂冠は首を飾つてゐる、皇帝の玉體はナポリから還へつて以来、目立つほど肥えた、顔面は廣い、顎の下は括れて二重になつてゐる、唇は平素から鼻と非常に接近してゐるのだが、どうやら膠で顔に接合けたやうな具合である、太い頸には例の如く絹の手布を巻いてゐる、そして血に塗れてゐると思はれるほど赤毛の一面に生えた肥つた白い手で始終その手布を整してゐる、その赤毛を摘んだらと思はれるが皇帝はそれを許さぬ、毛を取ると琵琶を弾くの手に手が顛へると誰かに言はれたからだ。飽

くなきの虚營心は、疲れた惱しげな其の面に常の如く現はれてゐる。それは暴虐なる君主の容貌であると同時に、戴冠者の面だ。瞬きをしながら片方、首を向けるかと思ふと、又片方に向ける。そして群衆の挨拶に熱心に耳を傾けた。

歡呼と賞讃の暴風が先づ起つた。

「萬歳 皇帝 萬歳—陛下 萬歳—アポロの子 萬歳—アポロ 萬歳—」

恁んな言葉を聽いて、皇帝は微笑んだ。けれど折々顔を蹙めて、羅馬の市民が諧謔な語を弄して、凱旋の英雄を迎へることが先例である。有名な逸話だが、ジュリアス・シーザーが羅馬に入らんとした時「市民よ、妻を隠せ、裸頭の放蕩者が来たぞ」と叫んだ者があるそうだ。勃々たる虚榮心を有するネロは滑稽を言はれたり、批評をされたりするのが嫌悪なのだ。稱讃の聲の中に。

「赤髻！火焰のやうな髻をどうするつもりだ。赤髻で羅馬が焼けるぞ」と叫ぶ者がある、かう云つた人も斯る滑稽が豫言になるとは氣が付かなかつた。皇帝はこの言葉には苦

しまぬ、赤髻は數年前に剃つたからである。

ポプピアが直ぐ、その後に来ると、「黄色い髪」と云ふ叫び聲が起きた。これは公娼の仇名だ。ネロは恁んな語を耳に捕えて、叫ぶ者を見つげんとする如く群衆を見廻はした。

その圖端ネロは石の上に立つてゐる使徒彼得に眼を注いだ。

二人は面と面を合せた。壯麗なる扈從も、無數の群衆も誰一人として地上における二人の大なる權力者が對抗して立つてゐることに氣が付かぬ。一人の權力者は凶暴なる夢の如く、忽ち消え去る者である。けれども粗服の老人に依て代表されてゐる他の一つの權力は永遠に羅馬を支配し、世界を掌握せんとするものである。

皇帝は聽て通り過ぎた。人民に蛇蝎視されてゐるポプピアも、美を盡した華麗な轎を八人の亞非利加人に擔はして過ぎ去つた。ポプピアはネロと同じく紫水晶色の衣裳を纏ふてゐる。顔には厚く脂粉を塗つた。眼を動かさず。澄して沈んで冷やかに構えたその姿勢。内心、女夜叉の美しき菩薩である。其後を男女の廷臣が大勢隨いて往く。ヘトロニ

ウスも群衆から親しき挨拶を受けながら、轎を奴隷に擔はして往つた。

ヅキニチウスは行列の後殿にゐた。使徒とリシアを認める。兵車から飛下りて挨拶に來た。面は輝いてゐる。忙しげに言つた。

「來て下さいましたね。御禮の申しやうも有りません。リシアさん。まあお別れします。又直き御目にかゝるつもりです。左様なら！」

「左様なら、マアクスさま！」とリシアは言つたか、低い聲になつて「基督は貴郎をお導き下さいますよ、保羅の教で貴郎が靈魂をお開きなさいますやうにね」

ヅキニチウスはリシアが自分の改宗の早からんことを望んでゐるのを見て、心嬉しく「貴嬢のお望みのまゝになります、私は保羅と一緒に住つて、熱心に學びますから、一寸と覆面をお取りなすつて、お別れ前にもう一度御顔を拜見したいです。どうしてさう厚く覆面をなさいました？」リシアは覆面を擧げた。輝いた顔、不思議に嬉し相な眼をヅキニチウスの方に向けて。

「貴郎は覆面がお嫌ひ？」と聞く。

その微笑には少女心の快活な風がほの見える。ヅキニチウスは欣然として、

「私の眼にだけは嫌ひです。死ぬまで永久に貴嬢を見たがる眼ですから」と云つて、ウルススに向ひ「ウルスス！、能くお前の姫さまを氣を付けて呉れ、お前の姫さまは私にも姫さまだからな」

ヅキニチウスはリシアの手を取つて唇を押した。側にゐた者は愕いた。權威赫々たる廷臣が、奴隷の如く質素に装つた少女を此のやうに尊敬するとは、慥しも解らぬ。

「左様なら」と言ひ捨て、ヅキニチウスは今恰度見えなくなつた行列の後殿を追つて、馬を走らせた。使徒彼得はその後で人知れず、十字架の表象を描いた。性の好いウルスは姫さまの嬉しげなを見て、欣然とヅキニチウスの武者振を讚めた。

扈從は進んで往く、時々濛々たる黄塵の裡に見えなくなる。群衆は長い間、其後を見送つてゐた。水車場のデマスは使徒の側に來て、手に接吻して、其家がエムポリウム門

の近所であることを話して、

「もうお腹のすく時分です。どうぞ御立寄なすつて御休み下さい」と言つた。

使徒の一行はデマスと一緒に往つた。その家で晝食をして休んだ。夕暮にタイパーの河向に還る。その途中パブリクスの岡を過ぎた。使徒彼得は此岡から羅馬全市を見下した。この世界の中心たる都に神の眞理を宣傳する自分の重大な責任を想つて、心情は沈痛なる感想に満された。靈魂は豁然に基督に馳せる。

「あゝ主よ、爾が私を遣はしたまへる此都で私は何を致しませうか。海と陸は此都に屬してゐます。野の獸も水に住む魚も羅馬に屬してゐます。諸の王國も諸の都も羅馬の所屬です。三十圍の軍勢は羅馬を護つてゐます。あゝ主よ、私は只湖畔の漁人で御坐います。私は何を致しませう。如何にして此都を征服致しませう？」

リシアは彼得の感慨を凝げた。
「全市火事のやうでございますよ」

太陽は正にヤニクルムの間に没せんとしてゐる。異様な夕映は全く蒼穹に散つて、火焔の如く紅である。今立てる岡から、夕映の全市に影じて反射する状が、一目に見える。尠し右を見ると、演技場の幅の廣い長壁がある。その向ふには宮殿の尖塔が高く聳えてゐる。正面の牛の市場の向ふには、ジュピターの大廟の頂上が見える。その壁にも圓柱にも、殿堂の屋根にも金色の光、紫色の光が漲つてゐる。遙かに見ゆるタイパー河は血の洪水のやうである。太陽が岡の下に低く沈むと、夕映は益々紅くなつた。大火のやうである。夕映は廣がり廣がり、七つの岡に一杯になつてゐる。七つの岡は周圍の國々の分界線である。

「全市まるで火事のやうです」とリシアが繰返した。

彼得は手を額にあて、眼に庇して羅馬の都を見渡して、
「神の怒が此都にあるのです」と言つた。

十四 愛の消息

ザキニチウスよりリシアに手紙が届いた、それには恚うあつた。

この書状を持参仕候。ふ奴隷はプレゴンと申す基督者にて候。此者はわが最愛の貴嬢より自由の身にして戴くべき者の一人に候。プレゴンはわが家の老僕にて候。小生は此者を充分に信用して此の書状を持参致させ候。此者ならば此書状を貴嬢より他の人に渡す氣遣ひなしと存じ候。小生等は暑熱甚しきため、只今ラウレンツムに滞在仕候に付、そこにて此書状を認め居り候。ポピアの先夫オゾウは此のラウレンツムに立派なる別荘を建築して、ポピアに贈りたる事有之候。ポピアは離縁されし後にも、平氣にて耻しとも想はず今だに其別荘を所有致居候。小生は今此處に滞在せる婦人達のことを想ひ、而して貴嬢のことを想ふ時には、岩の細片と水晶とを較ぶる如くに想はれ候。彼得は別れに臨んで、皇帝を恐るゝ勿れ、一筋の頭髪も損することなしと申され候。

誠に然りにて候。彼得の一言一句は深く我が精神を占領致居候。

彼得は我等の愛を祝福致され候故。皇帝も運命も、貴嬢を小生より取去ること能はず候。あゝ、リシア姫よ、小生はこれを想へば天にも登る心地致候。併し貴嬢は基督者に有之候故、小生が天と云ひ、運命と申すを御意にかけたまふことと存じ候。何卒御許容被下度候。小生は未だ洗禮に依て潔められず候故おのが心に對して罪を犯せるにて候。然れ共小生の心情は貴嬢の信じたまふ美しき教理を以て、タルソの保羅が充分に満すをうる空虚なる盃の如くにて候。そは貴嬢の教理なる故に、小生に取りては一層快きにて候。ああ、わが聖者よ、此盃に小生が以前満しゐたる水を零して、喝者が清泉に立てるが如く空虚なる盃として神の御前に差出せるを以て、小生の功績の内に御數へ被下らば幸甚の至りに候。

アンチウムに往きし上は、小生は日夜保羅の説を傾聴致す決心に候。保羅は此旅行の最初の夜より小生の部下の間に非常なる勢力を現はし、凡ての人は保羅の周圍に群集致候。

一同保羅をば驚天動地の働きをなしたる超自然の人物と想へるにて候。昨日小生は保羅の容貌に欣喜の状あるを認め候。而して小生がその爲せる事を賞れ候處、保羅は只簡單に私は種を播いてをると答へられ候。ペトロニウスは保羅が小生の許に滞在せることを知りて保羅に面會仕らんと申すにて候。又セネカもガルロより保羅の事を聽いて、面會を欲するにて候。

只今は夜半も既に過ぎ候へば、空の星の色褪め來り候。あゝリシア姫よ、曉の明星は獨り益々輝き居り候。間もなく夜は明けて、海の彼處は薔薇色となる事と存じ候。全世界は睡り閑にて候。併し小生は貴嬢の事を想ひ貴嬢を慕うて眼を醒し居り候。左様なら、ああ我が愛する生命の君よ、

十五 狂氣の沙汰

グキニチウスからリシアに又手紙が届いた。

最も親愛なる嬢よ。貴嬢はアンチウムに御出でになつたことがありませんか。若しありませんければ何時か貴嬢を此處に御連れ申しませう。ラウレンツムから此處まで、海岸には別荘が立列んでゐます。アンチウムには宏壯なる別荘が澤山あります。その圓柱は麗明な日ですと、水に映ります。私の別荘は海濱の最も好き地位にあります。別荘の後方は橄欖の森です。此別荘が間もなく貴嬢のものになるのかと想へば、その大理石は一層白く、その花園は一層緑暗く、海は一層濃く藍色になります。此處に着きましてから、午餐の折保羅と長く談話をしました。貴嬢の事を話したのです。保羅は適當な時間に教を説いてくれます。私は熱心に聽いてゐます。私に若しペトロニウスの筆あらば、私の心の靈魂の裡に起つた事を貴嬢に説明することが出来るのですがな。私は斯る幸福、斯る平和、斯る無限の靜穩があらうとは夢にも想ひませんでした。幸福平和靜穩は貴嬢と御話しをすれば凡て獲られるのです。私は都合のつき次第羅馬に還ります。

此世界には一方に、使徒彼得や保羅のやうな人物を容れ、他方に皇帝のやうな人間を

同時に容れておくことが、如何して出来るのでせう？私が恁んな疑問を起すのは、今日の夕暮ネロの御殿で或る事件が起つたからです。それは、初め皇帝がトロイの詩を讀んで、都の燃える所を見られないのは残念だと云ふのです。ネロはトロイの大火を見たプリアムを羨んで、故國の都が火事で破壊するのを見たプリアムは幸福だと言ふのです。チゲルリヌスはそれに對へて、「只一言御命令下されたら如何で御座います。さうすれば今夜アンチウムの燃えるのを御見物なさることが出来ます」と言ひました。皇帝は彼を馬鹿だと云ひ、「私は此處に海の空氣を吸ひに来たではないか。此處は神々が私に下された所だ。これに反し、私を害ふのは羅馬だ。羅馬の惡臭で私は咽喉を痛めた。羅馬の燃えるのを見たらアンチウムより百倍も壯麗で悲劇的な見物だらう」と言ふのです。ネロの此言葉に滿座の者は皆叫出しました。世界に打勝つた都を焦土に歸せしむることは、言語を盡せぬ悲劇だと云ふのです。すると皇帝は燃ゆる羅馬を見れば、ホーマアの詩に勝つた詩を作つて見せると主張しました。都は再築が出来る。將來の時代の人々が讚歎措く能はざる

やうな宏大なる建築を起して見せると言ふのです。酩酊してゐる者は、「さうしたまへ」と叫びます。皇帝は「もつと忠實な友人の賛成を得なければ、どうも」と答へました。これを聞いた私は實際不安心になつて來ました。最愛の貴嬢は羅馬に御ゐでなされるから心配です。併し何が何でも皇帝も廷臣もそんな狂氣な沙汰は致しません。あゝ祝福すべきかな。貴嬢がわが家の閨を御通りなされる其の日よ、その時よ、その刹那よ。わが今受容れんとて學びつゝある基督が、これを許したまはよ、その聖名は祝福すべきかな。私は基督に使へます。基督のために私の生命を與へます。私の血を注ぎます。私共は生命の綱の續くだけ永く基督に使へませうね。私は靈魂の奥底より貴嬢を愛し貴嬢の御機嫌を伺ひます。

十六 獅子の聲

ウルススに井戸から水を吸みながら低い聲で、奇妙なりシア人の歌を唱つてゐた。リヌ

スの庭園の樹蔭には、兩者の白き彫像の如くリシアとヅキニチウスとが立つてゐる。ウルスは二人を見て嬉し相な顔をしてゐる。微風はその衣服の裾さへ動かさぬ。金色の薄光は世界を蔽ふてゐる中に、二人は手を握り合つて、静かな夕暮に一緒に話してゐる。「お悪くはないのですか、皇帝に何にも仰やらずに、アンチウムから來て了ひなすつても」とリシアが問れた。

「願慮ませぬ。皇帝は新しい歌を作るために、テルプノスに二日間蟄居すると云ふのですから。そんな事は度々です。さう云ふ時は何も氣がつかないのです。まあ、皇帝の事などはどうでも可い。御目にかゝりたくつて仕方なかつた。夜も少しも睡られなかつたのです。餘りに疲れて假睡すると、何だか貴嬢に災難でもありはしないかと、心配になつて、不圖目が醒めて了ひましたことが、幾度かありました」

「私は貴郎が多分お出下さるやうに想つてゐました。二度もウルスに頼んで御家に見せにあげましたら、リヌスにも笑はれ、ウルススにも笑はれました」

リシアがヅキニチウスを待懸れてゐたことば明かである。今日は例になく平素の黒服の代りに柔らかな白い寛衣を着てゐる。美しい褶から、首と肩とが春の彌生に咲く櫻草のやうに現はれてゐる。頭髮には二三本の美しい草花を挿してゐる。

ヅキニチウスはリシアの手に接吻した。聽て二人は野葡萄の棚の下にある石の腰掛に座つて、肩と肩を擦り合せて、静かに夕日を凝視めた。將に没せんとする太陽は、最後の光を放つてゐる。黄昏の平和は二人を魅するやうに柔しく四方を鎖した。

「静かですな」とヅキニチウスが低い聲で、「世界は美しいですれ。今夜は全く雲がない。今日程幸福に感じたことはありません。甚壓してでせう。愛とは憊ういふものとは想ひませんでした。只煩惱の情火だと許り想ふてゐました。今はなんとも云へぬ、憊う快い無限の平和を感じます。これは私には全く新しい經驗です。基督が憊ういふ平和を下さるのですれ」

リシアは美しい首を、ヅキニチウスの腕に靠せて、

「マアクスさま！」と云つたが、その後が出ない。歡喜、感謝、正しき愛の意識は、リシアの言葉を奪つた。リシアは只涙ぐむばかりである。

「ガニキチウスはリシアの優柔な體軀を抱へて近く引寄せ、

「私が初めて基督の名を聽きましたその時は、祝福すべきですれ」

黙する。胸裡は愛に溢れた。夕映は全く消えた。三日月は今や庭園の上に輝いてゐる。

聽てガニキチウスは再び口を開いて、

「私は此處に來ました時、直ぐ貴嬢の御心配な様子を悟つたのです。教は充分解つたかしら、洗禮は受けたかしらと御想ひなされたのでせう。私は未だ洗禮は受けません。保

羅が私に、「もう大抵神が世界に降臨して、此世を救ふために十字架に釘られたことは、御解りだと思ふが、彼得が最初、君を祝福したのだから、彼得から洗禮を受なされる方が

宜しからう」と言はれました。それに私も貴嬢の見てゐなされる前で洗禮を受たいと思ひま

した。それから教保にはポムポニアさんになつて貰ひたく思つて、洗禮を延しました。私

は教理のこと、基督のことは大抵解つて、理論からも此教は神聖なもの、最上なものと思

へます。又心情でもさう感じます」

リシアは熱心に耳傾けた。青い眼をあげてガニキチウスの顔を凝視してゐる。ガニキチ

ウスの顔は、月下に咲く神祕の花のやうである。花の如く露を含んでゐた。

「さうでしたか、マアクスさま」とリシアは尙も密接く首をガニキチウスの腕に寄せた。

幸福は二人の心を結付けた。只互に相愛するばかりでなく、聖なる力が二人の心情を一

緒にするので、離れやうとしても離れられぬ想ひがする。ガニキチウスは無限の愛を覺へ

ながら、リシアの容姿、基督の教、柔かに照す月光、夜の平和と一緒に心情に封じ込んだ

聽て低い震へる聲で、

「貴嬢は私の靈魂の靈魂です。基督に祈つて感謝して暮らませうね。貴嬢と御一緒に生

活して御一緒に神を禮拜して死が私共を迎へましても、又復活つて新らしい光を見るこ

とが出来るかと思へますと、これよりも大いなる幸福はありません。基督の他には神は

ないのですね。基督者の靈魂の他には神の殿はないのですね。あゝ私は保羅がペトロニウスと話すのを聴きました。ペトロニウスは最後に、「私にはどうも」と云ひました。それより他には言葉が出ないのでせう」

「保羅はなんと御言ひになりました？」とリツアが問れた。

「私の家でね。ペトロニウスが或晩例の如く快活に滑稽な事を言つてゐました。保羅はペトロニウスに向つて、『貴君はどうして基督の生存したことを、又死から復活つたことを拒むことが出来ますか。貴君はまだ其頃此世に生れてゐなかつたでせう。彼得も約翰も基督を見たのです。私もダマスコで基督を見ました。貴君は我々が虚言者だと云ふ證明が立ちますか』と言ひますとペトロニウスは、『何も拒みはしません、我々にも神々がありまます。その神々は眞正でも虚妄でも、兎に角美しい神々です、それに頼つて楽しく、心配なく暮して往けます』保羅はそれに答へて、『貴君が愛の教、正義の道を拒まれるのは、先づ可いとして、果して貴君は心配なく暮してゐますか。貴君にしる、又他の權勢ある人

にしる、夜睡つて朝死んでゐるやうなことが無いとも限らんでせう。貴君は自ら運命の寵兒だと想つてゐられる。併し貴君が零落して貧乏になる事は容易です。能く心を静めて考へて御覽なさい。全世界は貴君の眼前に震動してゐるではありませんか。貴君は自分の奴隸の前にも戦慄すべきでせう。何日何時奴隸が叛反しないとも限らん。奴隸を平素壓制して居るために、その反抗を來したことは幾らも例があります。貴方は富有だ。けれども明日貴君の財産が失なることがないと保證が出来ますか。貴君は未だ若い。けれども明日死なぬとも限りません。甚麼して貴君は自分の生涯は幸福だ、楽しいと想へますか。其處で私は愛の教を宣傳へるのです。君主が臣下に對しても愛、主人が奴隸に對しても愛、愛に依て命じ、愛に依て役へるやうに仕たい、さうすれば限りない永遠の幸福が來るのです。』まあ恚う云ふ風に保羅が言はれると、ペトロニウスは『私にはどうも』と言ひながら意屈したやうに起上つて、又保羅に向ひ、『貴君の教よりも私はユニケの方を選びます。併し私は傳道の御妨げは仕ませんと言ひました。私は心を籠めて保羅の語を聴いたので

す。私には最早皇帝の御殿も、奢侈も、音楽も何も願はしく有りません。貴嬢だけあれば澤山です。羅馬を離れて他に往つて住みませう」

リシアはヅキニチウスの腕に矢張首を横へながら、眼をあげて梢の頂上が月の光を浴びて白く輝いてゐるのを見ながら、

「その方が宜しうございます。貴郎はシシリーの事をお書き下さいましたね。お父さまも其島に殖民するとか申してをりました」

ヅキニチウスは嬉しげに、

「シシリーに任せよう。アウルス殿と同じ處にですれ。あの島は珍らしい所です。氣候は好いし、夜分も羅馬より爽快で生々してゐます」

ヅキニチウスは將來の幸福を夢見て、一寸と息を吐いて、

「あの島で橄欖の森の中を散歩して御覽なさい。どんな苦しみでも忘れて了ひます。あありシアさん。二人で海と空を眺めながら、共に愛し、共に神を讚美して、平和な道を踏

んで生活したらどんなに幸福でせう」ヅキニチウスは口を緘らた。近き將來に爲すべき事を考へて、リシアを益々近く引寄せた。勳爵士の指環は月の光に輝いた。四方の家は皆睡つてゐる。沈黙の平和を破る音もせぬ。

「お母さんにお目にかゝることをお許し下さいませすの」とリシアが言つた。

「可いですが、家に御招待しませうか、それとも私の方から訪問しませうか。使徒彼得も招待しませう。彼得は年を老つたのと、餘り働き過ぎるから、腰が妙し屈みましたね。

保羅も来て下さる。保羅はアウルス、プラウチウス殿を改宗させやうと仕てゐます。さうなればシシリーに行つて、基督者ばかりの殖民地が出来ますね」

リシアはヅキニチウスの手を取つて、蕾の唇に當てやうとした。けれどもヅキニチウスは囁いた。

「いや、リシアさん、私こそ貴嬢を崇拜しなければ、どうぞ貴嬢のお手を」

「貴郎を愛します」

ヅキニチウスはリシアの手に接吻した。四方は森々としてゐる。聽えるのは、只二人が胸の鼓動。風も動かぬ。突然雷の如き響が、沈黙を破つて大地を震動した。リシアは身を慄はせる。ヅキニチウスは起上つた。

「動物苑で獅子が吼えるのです」と言つた。

二人は注意して耳を傾けた。第二の聲は第一に應じた。三聲、四聲、十聲と、諸方の町より相呼應する。獅子は自由を欲し、沙漠を慕ふて吼えるのである。其聲は空中に波動して全市に擴がつた。

ヅキニチウスはリシアを抱いて、

「恐くはありませんよ。演技が近い内にありますので、何處の動物苑も獅子で一杯です」

二人はリヌスの家に入つた。獅子の吼ゆる聲は雷の如く益々猛烈である。

十七 詩と羅馬

ペトロニウスはアンチウムで、皇帝の寵愛を殆んど一身に集めた。チゲルリヌスの勢力は全く傾いた。皇帝は淡青の海に臨める御殿の中で、美的生活を送つてゐる。朝から晩まで、詩は詠ぜられた。押韻の方法は論ぜられた。音楽でも、戯曲でも、希臘の天才が人生の裝飾にとて發明したものは悉く具へられた。ペトロニウスはチゲルリヌス其他の廷臣よりも修養がある、頓才がある、辯才がある、優雅なる趣味に豊かである、其名望の隆々たるは全くそのためである。皇帝は事毎にペトロニウスに相談した又その忠言を納れたのである。

ヅキニチウスが羅馬に還つた一週間後のことである。皇帝は廷臣を集めて自作のトロイの歌を數節讀んだ。讀み終はつて讚歎の聲も止んだ時、皇帝はペトロニウスを眈眼に視た。ペトロニウスはそれに應へて、

「拙作まづらごさいいますな。焼やいて了しまひなすつた方が宜よろしう御座ございませう」

満座まんざ悉おそく恐れ慄おそへた。ネロは幼少おさなき時以來、如何なる人の唇くちびるからも斯れいる冷酷こくせんな宣告こくを聞いたことがない。チゲルリヌスの顔かほは獨ひとり歡喜よろこびに輝きらいた。ヅキニクスは顔かほを蒼あはくした。ペトロニウスが嘗かつて一度も酒さけに呑のまれたことはないのに、今日けふは酩酊りやうていしてゐるのかと恐おそれた。

ネロは深ふかくその虚榮きよえいしん心を傷きづけられて、蜜みつの如ごとき聲こゑで、「此詩このしにどんな疵きずがある？」

ペトロニウスは狼狽うろたへぬ。一座みやを見廻みまして、

「列座れつざの方々の言葉ことばは御信ごしん用ようなさいますな。何か解とりませう。御製ぎよせいに疵きずがあるかとの御尋問たづね。事實じじつをとの仰おほせなれば申上まげます。御製ぎよせいが若もしもパーシルやオキツドやホーマアの作さくとしますれば傑作けつさくで御座ございませう。併しかし陛下へいかの御製ぎよせいとしてはいかにも拙劣まづらごさいます。第一御製ぎよせいの中の大火たいくわは、充分火事かじのやうに見みえませぬ。昔しゆじんの詩人しじんよりは一層偉大そうゐだいなる陛下へいかのことで御座ございますから、古來世界こらいせかいに現あらはれました詩歌しかよりも、一層の御傑作ごけつさくをなさいませんでば、どうも、これは露骨ろこつな御忠告ごちゆうこく、どうぞ尙一層御傑作ごけつさくを願ねがひたう存ぞんじます」

ペトロニウスは極めて輕快けいけいに斯くわうていう云いつた。皇帝くわうていの眼まなこには喜悅よるこびの霧きりが懸かつた。

「神々かみ々は私わたしに小さな技倆ぎりやうを下くだされたのだからな。勿論もちろんもう彫てうしは佳よいものが作される。卿けいは眞正ほんとうの批評家ひひうかだ。私の忠實ちゆうじつなる友人ゆうじんだ。よく私の面めん前ぜんで事實じじつを言いふて呉くれた」

皇帝くわうていは赤あかく銹さびてるやうな毛けの生なえてゐる肥こえた腕うでをば、デルフヒの神しん殿でんから掠奪うはつた黄金おうごんの蠟燭ろうそく臺だいの上に延のびて、其そのの詩しを燒やかうとする、ペトロニウスは紙かみに火ひの着つく前に其詩そのしを撈もぎ取とつた。

「ど、どう致いたしまして」ペトロニウスが言いつた。「御製ぎよせいは此儘このまでも不滅ふめつの傑作けつさく。私わたしが頂戴ていだい仕しります」

「それはどうも」とネロはペトロニウスの體軀からだを抱かかへて、「誠實ほんとうに尤もつともだ。私の描えがいた大火たいが充分じゆうぶんに火事くわじのやうに見みえぬ。だがホーマアと對等たいとうなら耐忍がまんも出來る。私の作さくの充分じゆうぶんでない譯わけは慙かうだ。彫刻家てうこくかが神かみの像ぞうを刻きむ時に摸型もけいを用もちゆるだらう。所ところが私わたしには摸型もけいがない。

私は火事の都を見ないのだからな。それで私の詩は實際らしくないのだ」

「ですが、偉大な藝術家と申す者は見ないでも見たる如く描く事が出来まする」

ネロは想ひに沈んだが、やがて首を擡げて、

「質れることがある。メトロニウス。卿はトロイの火事を憐れと想ふか」

「憐れ？何が憐れでございませう。何故かと申しますれば、プロメテウスが人間に火を授け

ませんか。或は希臘人がプロアムと戦争を仕ませんでしたら、トロイは焼ませんでしたで

せう。火事がありませんなら、エスキルスは『プロメテウス』を作ることが出来ません。又

戦争がありませんなら、ホーマアも『イリアッド』を書くことができません。あんな小さ

い穢い市が保存せられるよりか、『プロメテウス』や『イリアッド』が此世に出た方が宜ろ

しうございませう、あんな市があつて御覽なさい。やれ知事を派遣せればならんの、地方會

議を開ければならんのと、只陛下の大御心を煩はすばかりです」

「正實にさうだ」と皇帝が答へた。詩のため藝術家のためには凡てを犠牲にせなければな

らん。『イリアッド』に詩題を供したアケヤ人は幸せなものだ。本國の都の滅亡を見たプ
リアムは幸せなものだ。私は未だ火事の都を見たことがないのだ」

満座は肅然とした。チゲルリヌスが沈黙を破つた。

「いや、陛下私は言上致しました。只御一言を賜はらば、アンチウムを焼いて御覽にいれ

ますと。若し此處にあります別荘や御殿を焼くことを憐れと思召さばオスチアの船を焼き

なされまするか。或はアルバン山の下にあります木造の町家を御焼きになりましては、如

何で御座りませう」

ネロは蔑視むが如くに、チゲルリヌスを見つめた。

「木片の家を焼いて見物しるかと？、解らんことを云ふ。貴様も知恵がなくなつたな。私の

作るトロイの歌のためには、如何なるものを犠牲に供しても可いのだ。それが解らんか」

チゲルリヌスは恥らつて身を退いた。ネロは話題を變へんとする如く、

「夏も最早間もない。羅馬はさぞ蒸暑いであらう。だが夏期の演技に還らなければなるまい」

—何處へ行く—

三六二

「あゝ陛下」とチゲルリヌスが語を挟んだ。一同退り出でました時、暫時御内談を願たう存じまする」

一時間程経つて、ペトロニウスはヅキニチウスと一緒に選つた。途で二人は今日ありし事共を語つた。赤髯のネロの己惚を笑ふ。ヅキニチウスは羅馬に選つた時、リシアと一緒に聞いた獅子の遠吼が異様であつて、何か災禍の前兆らしく想はれたことを話したが、ペトロニウスは笑つてそれを打消した。

十八

霹靂一聲

ネロは縦琴を弾じながら、サイプラスの女神を讚美する歌をうたつた。詩も樂譜も自作である。聲は可なりに發する。眞に聽衆の心を魅することが出来たと想つてゐる。己惚に一層力を入れて弾じた。情激して顔色蒼ざめてゐる。滿堂の喝采も自分では解らぬ程である。ネロは暫く縦琴により懸つて首を垂れて座つた。やがて突然起あがつて、

「疲れた、戸外に出やう」と咽喉に絹の手巾を捲つけて、室の隅に座つてゐるペトロニウスとヅキニチウスの方を睥視して、

「一緒に御出で、ヅキニチウス。肩を借して呉れ、私は疲れた。ペトロニウスと音樂談をしたい」

三人は大理石の敷つめてある露臺に出た。ネロとペトロニウスは盛んに藝術談を試みてゐる。やがてネロはヅキニチウスに聽えぬやうに、聲を潜めてペトロニウスの耳に口をつけて囁いた。

「私が母親と妻を死刑に處したのも、畢竟藝術家として最大なる者になりたいたい許りさ。けれどあれだけの犠牲では、詩の國の扉は開かぬ。もつと大きな犠牲が必要である」

「何か御計畫でございませうか」

「今に解る。間もなく私の計畫を御目にかける。兎に角二人のネロがあるのだから、一人のネロは世界に赫奕たる皇帝。他の一人は卿だけ知つてゐる藝術家たるネロだ。私が

—霹靂一聲—

三六三

死んだら、此世界は、さぞ無趣味になるだらうな。それを考へると私は幽鬱になる。最大の権力と最高の技能を兼備してゐるのだから、中々その重荷に堪へ切れない」

「御尤もな次第で御座います。平素陛下を尊崇してをりまするヅキニチウスは勿論のこと地も海も御同情致します」

「ヅキニチウスは愛い奴だな。軍神に使へて藝術の神には使へてをらんでもな」とネロが言つた。

「いゝえ、所が此奴、愛の神に第一使へてゐますので」とペトロニウスが言つた。一撃の下にリシアの一件を片付けて、ヅキニチウスを脅かしてゐる有ゆる危険を絶滅せんと考へて、

「此奴は、もう戀の奴となつてをりますやうな譯で。あゝ此奴を最早羅馬に選しておやりなされ。左もないと此青二才萎縮してしまひます。陛下が此奴に賜はつたりシア人の人質が又見付つたさうでございます。其人質を此處に來ます時に、リヌスとか云ふ者に預けて

まゐつたさうです。今まで陛下には御詩を御製中でありましたから、御遠慮いたしました。が、ヅキニチウスはその女を妻に仕たいと陛下の御許容を待つてをるやうな次第で御座います」

「皇帝たる者が、臣下の妻を選擧してやる暇はないではないか。なぜ私の許容を待つのか」

「陛下、此者は陛下を尊崇してをりまするので」

「それなら、許してあげる。その女は美しいが、聲の狭い女だつたな。ポプピアが訴へたことがある。御殿の庭で私の聖兒をその女が眼で呪つたとか申して」

「いや、どう仕りました、神々はそんな不正な事をどうして許しなされませう。陛下は御記憶ですか、ヅキニチウスが陛下の御倒れなされます所をお助け參らせて、陛下御自身、これは有難う」と仰せられましたことを」

「存じてをる」と云つて、ネロはヅキニチウスに向つて、「卿はペトロニウスの申す如く、

その女を愛してゐるのか」

「御意で御座います、陛下」

「然らば明日羅馬に還つて結婚したが宜い。結婚の指環を箱めすには再び私の面前に出るな」

「眞心より感謝仕りまする、陛下」

「人を幸福にしてやることは善いことだ」とネロが言つた。「何卒この御許可をば、皇后さまの御前で御發表下されまするやう。ヅキニチウスは皇后さまの御好みになりません女とは結婚致したくないと申してをりまする」

「宜しい。卿やヅキニチウスの事なら私は何でも仕てあげる」と皇帝が言つた。

ネロは御殿の方に足を向けた。二人は勝利の歡喜に胸を躍らしてネロに續いた。

御殿の大廣間では、年若きネルバとツルリウスセネシオとがポプピアと話をしてゐた。テルプノスとヤオドルスとは縦琴を弾じてゐた。ネロは室に入つて龜の甲を鏤刻め

た燦爛たる椅子に腰を下した。そして側にゐた侍童に何か囁いた。侍童は姿を隠したが、直ぐ金の小匣を持つて來た。ネロは小匣を開けて猫眼石の頸飾を取出して、

「此處に寶石がある、その夜に相應しいであらう」

「旭日の輝くやうに光りますことね」とその頸飾は自分への贈物と想つてポプピアが言つた。

皇帝は空中に頸飾をぶら下げてゐたが、やがて、

「ヅキニチウス、卿は私が結婚せよと命じた妙齡な少女に、私からの贈物だと云つて此頸飾を遣はしてくれ」

ポプピアは憤怒と驚愕に目を光らせて、皇帝からヅキニチウス、それから遂にペトロニウスを睨んだ。ペトロニウスは空知らぬ顔で、椅子に憑かゝつて琴線を弄つてゐた。ヅキニチウスは皇帝に厚く禮を述べて、ペトロニウスに近付いて。

「貴下が今日仕て下されたことは、御禮の申しやうもありません」

「鵠を二羽ユーテルベに献げるさ」とペトロニウスが言った。「それから皇帝の歌を讚美するのだ。獅子の聲はこれからお前の百合花の睡眠を妨げまいよ」

「誠に、これで安心しました」

「まあ幸福にな。けれど、あれ皇帝が又琴を取られた。静かに、静かに、謹聴して涙でも溢してやれ」

皇帝は縦琴を手に取つて、眼を上に向けてゐる。四方の聲は全く止んだ。テルプノスとデオドルスは相互に顔を見合せて、それから皇帝の唇を凝視して、洩出づる第一聲を待つてゐる。

突然廊下が騒然しくなる。幕の下から、タコンと元老レカニウスが現はれた。皇帝は激して額を皺める。

「暫く御免、陛下」と喘ぎながらタコンが言った。「羅馬は焼けてをります。全市悉く燻に覆はれまして御座います」

満座は總立になつた。ネロは縦琴を下に措いて叫んだ。

「あゝ、火事の都を見ながら、トロイの歌を作つて了はふ」

恚う云つてネロは元老の方に向つて、

「私は直ぐ出發する。大火を見物するに間に合ふやうに」

「陛下」とレカニウスが言った。「都全體火の海です。市民は烟に絶息してをります。氣が狂つて火の中に飛込んでゐます。羅馬は滅亡してなるのです、あゝ、陛下」

満座黙然たる中に、ヅキニチウスが叫び出した。

「あゝ、どうしたのだ。可哀想に！」

青年は寛衣を投出して肌衣一枚になつて、御殿から驅出した。

ネロは天に向つて手を舉げて叫んだ。

「あゝ、禍なるかな、プリアムの聖を都よ！」